
インフィニットストラトス～天上駆ける蒼き刃～

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス〜天上駆ける蒼き刃〜

【Nコード】

N0270W

【作者名】

蒼

【あらすじ】

インフィニットストラトス、通称IS。

女性だけが扱える兵器。それによって女尊男卑の時代となった世界で、たった二人の男がISを起動した事で世界は動き始めた…

インフィニットストラトスの二次創作です。

このサイトでの処女作ですが、頑張ってやらさせていただきます（ハ

ハ）ノ

第一話：入学と晒し刑（前書き）

第一話です、よろしくお願いします

第一話：入学と晒し刑

…夢を見ていた。

…それは錆びたキオク。

…夢を見ていた。

…それは戻れない時間。

…夢を見ていた。

…それは……

インフィニットストラトス〜天上の蒼き刃〜

4月。出会いと別れの季節。
全国の方々は新しい季節の始まりに喜ぶだろう。だが、僕は素直に喜べなかった。

僕の名前は香我美^{かがみ} 真琴^{まこと}。

女みたいな名前だつて？僕は男だ。15歳、高校生。

僕は現在……衆人監視に晒されている。

理由？簡単な話だよ……世界初のISを起動した『男』の一人だから。

…インフィニットストラトス、通称 IS。元々は宇宙開発の為に開発された代物なのだけど、開発者の考えとは裏腹にお国同士で騒いで、結果。

パワードスーツを使ったスポーツになった。

さて、このISだけど。特殊な点が一つ。
それは、

『ISは女性にしか扱えない』と言う事。

じゃあなんで男である僕が使えるのか？

それは僕も解らない。

いや、よく覚えていない。

……に、しても。

ジーーーーー……

「……」

目線が、痛い……

目線から逃げるように教壇に立つ先生……かな？を見る。

緑の髪に、小動物を思わせる顔には少し大きなメガネ。そして何より……ちっさい。

その先生がこの沈黙の中口を開く。

「全員揃ってますね。それじゃあSHRをはじめますよ」

先生の名は山田真耶。…先生の親は狙ってこの名前を付けたに違いない。

「それでは皆さん一年間よろしく願いますね」

山田先生はそう明るく言った。
だが、

「……………」

クラス一同、無反応。
酷い、ヒドすぎる。
あ、僕もか。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

…先生、僕と僕の前に座ってる織斑　一夏君を晒し刑にする気なの…？

ええい、こうなれば現実逃避あるのみ！

さて、先程ISについてはだいたい話した。

続いては、そのISの教育機関について。

藍越学園。またの名を、IS学園。その名の通りISについて学ぶ学園である。

私立校にしては安い費用で入れ、且つ卒業後はIS学園とパイプのある企業に就職斡旋があると言う至れり尽くせりの学園である。

だがしかし。僕ら例外を除けば入学できるのは女性のみ。即ち、僕と織斑君意外は全員女子。

お分かりいただけただろうか…

ん、織斑君が立った。もう此処まで…織斑君、時間を稼いで…!

「織斑 一夏…です。宜しく願います」

織斑君…それだけじゃないよね?

期待の眼差しがクラスから織斑君に向けられる。

「……………」

ジー…

「……………以上です」

ズコン…!

ええ!?!それだけ!?!

後コケた女子ノリ良すぎでしょ!?

と、内心突っ込んでいると、

スパアン!!

「いっ………!!」

織斑君の頭が誰かに思い切り何かで叩かれた。
うわぁ、痛そう……で、今織斑君叩いた人で……

「げえっ!! 関羽!？」

「うそ!! 呂布!？」

スパパアン!!

「いたぁ!？」

「あう!？」

「誰が三国志のヒゲとゴキブリだと?」

そう言っ僕と織斑君を叩いた出席簿を持ち上げたのは、全身に黒を纏った、例えるなら狼のような女性が立っていた。

「ち、千冬姉!？」

「千冬さん!？」

ドドスン!!

「っ!!」

「にゃ!!」

「学園では織斑先生と呼べ」「はい……」

痛い……音と言い、威力と言い、出席簿のモノじゃないよ…

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえつ。副担任ですからこれ位はしないと……」

千冬さんが優しい声で山田先生と話す。

あ、山田先生はにかんだ。

「諸君、私が織斑 千冬だ。君達新人を一年で使い物にするのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、理解しろ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

相変わらずの暴力宣言だなあ……まあ、これでこのクラス的女子も大人しく……

『キャーーーー!!』

「わあっ!?!」

ならなかったみたいです…ああ、びつくりした…。

「千冬様、本物の千冬様よ!!」

「ずっとファンでした!!」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです!北九州から!」

憧れてこの学園に来るその心意気は凄い。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです!」

「私、お姉様のためなら死ねます!」

最後の物騒だから止めて!!

そんな狂喜乱舞、というか発狂?する女子達を見て千冬さんは面倒くさそうな表情を浮かべた。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それともアレか?学園長が狙ってクラス分けをしているのか?」

そう言つて溜め息を吐く千冬さん。

いや、千冬さん。恐らくこの学園の大半の生徒がこんな方々です。

千冬さんの呆れたような声に女子達は更に盛り上がる。

「きゃあああ!!お姉様!もっと叱って、罵って!!」

「でも時には優しくして!!」

「そしてつけあがらないように躑をしてー!」

…ダメだこのクラス。早く何とかしないと。
いずれ千冬さんが原因の発狂死者がでるよ…

「…それで、挨拶もまともに出来んのか、お前は」

落ち着きを取り戻してきたクラスで、千冬さんがそう織斑君に言った。

「いや、千冬姉、俺はー」

ドゴン!!

「織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生」

おかしい。何がおかしいかって、出席簿で叩いた音がおかしい。
ドゴン!! て何て音なの…織斑君、机に頭めり込んでるよ。

に、しても。今までの数回の発言で織斑君と千冬さんが姉弟と言う事がバレた。

ということは。

「え…? 織斑君であの千冬様の弟?」

「世界でたった二人、男でISを使えるのもそれが関係して…?」

「いいなあ、かわってほしいなあっ」

最後の、じゃあ僕と代わって。この空間は居辛い。

そんな事を思っているとチャイムがなった。

「さて、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後は実習だが、基本動作は半月で体覚えさせる。いいな。わかったら返事をしろ。わからなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

鬼だ…鬼が居る。

御伽噺の鬼も直ぐに逃げる程の鬼が。

ああ…僕の高校生活、どうなるんだろ……

「はあ……」

吐いた溜め息は春の陽気が差し込むクラスに消えた。

主人公紹介

名前：香我美 真琴

（かがみ まこと）

性別：男

容姿：淡い金色の長髪をポニーテールにしている。顔立ちは中性的で瞳の色は蒼。身長は男子平均より少し小さい。（イメージキャラ：武装神姫 battle master・アーンヴァル Mk？）

趣味：菓子作り、読書、散歩

使用IS：アーンヴァル

完璧な男の娘。家政スキルは高い。

好きな物は、ダンテ著・神曲、パンクロック、シフォンケーキ。
苦手な物は、虫、怖い話、暗闇。

過去、千冬に剣を教えて貰った経験あり。

孤児院：と言っても武家屋敷をまんま使った所の出身。それ以前の経歴は不明。どこ生まれかも分からない。

香我美と言っ名字は孤児院の院長からもらった。名前も院長からもらった。

一夏と似た理由でISを起動した男。

第二話・授業と知り合い（前書き）

授業風景です（＾－＾）／

戦闘は何時になるのか…

第二話：授業と知り合い

「「あー……」」

時間は過ぎて一時間目終了。現在休み時間。

僕と同じ思考だったのか、織斑君も溜め息を吐いた。

「「……………」」

キツイ。キツすぎる。ギブです。僕のライフはもうゼロです。入学初日からの授業はまあ良い。何とかついてけた。しかし、しかしだ。

「「この視線はどうにかならないか……………」」

あ、また同じ考えか。

「お互い、疲れるな…ええと」

「香我美。香我美 真琴だよ。宜しく、織斑君」

振り向いて苦笑いした彼に自己紹介。そう言えば僕の番が来る前に授業が始まったんだっけ。

「一夏で構わないよ。その代わり俺も真琴って呼んで良いか？」

「了解。これから宜しく、一夏」

「ああ」

そう言つて握手をする。うん。一夏とは良い関係を築けそうだ。
何せここはIS学園。

教室を見れば女子（黄色い声）、廊下を見ても女子（更に黄色い声）。

で、廊下の方は三年生も来てない？

「何か…」

「むず痒い感じだな…」

お互いそう言つて、苦笑い。

「ま、何にせよこれから三年宜しくな。男同士仲よくしよつぜ」

「うん、宜しく」

と、そこに、

「……ちよつといいか」

「え？」

「ふあ？」

女子がやってきた。

「………箒？」

「……………」

どうやら一夏の知り合いみたいだ。

かなり長い黒髪をポニーテールにしている。
身長は平均的、そして目つきが少し怖い。
イメージとしては、日本刀がピッタリだ。

「少し、一夏を借りたいんだが、良いか？」

「あ、どうぞ……」

急に話しかけられ、返事をしてしまう。

「そうか、感謝する。…廊下でいいか？」

「あ、ああ……」

一言僕に礼を言った後、彼女…確か、篠ノ之 篤さん…は一夏を連れて廊下へと出て行った。

さて……今気付いたんだけど。

ジー…

「……………あう」

一夏が居なくなつて、クラスの子の視線が全部僕に……院長、僕、この先自信がありません……

結局、この視線の弾幕はチャイムがなるまで続いた。

「ーであるからしてISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合、刑法によって罰せられー」

「……………」

机の上には教科書五冊とノート。

その中の一冊を開いて読みつつ、先生の話聞いてノートを執る。

…正直な話、この学園の学力は異常だ。

授業速度と言い、その密度と言い。

傍目から見ても他の高校とは違い過ぎる。

この授業の内容だって、入学前に渡された、『あなたの町のことから電話帳』に匹敵する分厚い参考書の内容を記憶しておかないとついていけないものだ。

記憶する為に一週間を要したのは良い思い出だ。

過去の苦勞を思い出しながらノートを執っていると、一夏がキョロキョロしている事に気づく。
どうしたんだろ。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

そんな一夏の様子が気になったのか山田先生が一夏に問いかけた。

「あ、えっと……」

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。何せ私は先生ですから」

そう言つて胸を張る山田先生。おお、頼りがいが……ある、かな……？

「先生！」

「はい！織斑くん！」

さて、一夏の質問はどんな……

「ほとんど全部わかりません！」

ガツン！

その言葉を聞いた瞬間、僕は頭を机にぶつけた。硬い……

「え……ぜ、全部ですか……？」

ああ……山田先生の顔が引きつってる。

「えっと……織斑くん以外に現段階でわからないって言う人はどれくらいいますか？」

シーン……

山田先生の問い全員沈黙で答える。無論、僕も。ごめん、一夏。僕

はあの一週間の努力を無駄にしたいくないんだ…っ！

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端に立っていた千冬さんが一夏にそう訊いた。

一夏、素直に答えたらダメだ。少しくらい読んだって言えば刑罰は少なく…

「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパアン！！

「いでっ」

一夏のヴァカアア！！

素直過ぎる！素直過ぎるよ！単純に『少し呼んだんですが…』的な
感じで良かったろうに…！

確かに僕も捨てそうになった！

『参考書？いや、これはタ○ンページだ』って捨てそうになった！

「必読と書いてあっただろうが、馬鹿者」

あゝあ、一夏の脳内の葬儀屋は忙しそうだな…一体今日だけで何万人死ぬのか…脳細胞。

「後で再発行してやるから一週間以内に全て覚えろ。いいな」

「いや、流石に一週間は……」

「やれと言っている」

「はい、やらせて頂きます」

うわぁ… 鬼軍曹が居るよ。否、鬼じゃない。魔王だ。

あれ、何か脳内に砲撃ぶっ放す人が思い浮かんだ…

そんな事を考えていると、ある程度話しが進んだのか、山田先生が授業を再開した。

「あうつー!!」

あ、コケた。

再び時間は進んで二時間目の休み時間。

僕と一夏はさっきの授業について喋っていた。

「にしても一夏、『古い電話帳と間違えて捨てました』って、素直過ぎる解答でしょ」

「いや、素直に答えたら受け入れてくれるかな、と」

「でも流石にあれば無いよ…」

ちょうど盛り上がっているその時、

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「ん？」

声をかけられたのでそっちを向くと、

「……………」

金髪の女子が立っていた。

第二話：授業と知り合い（後書き）

次回、セシリア登場！！

第三話・啖呵と部屋割り（前書き）

セシリアファンの皆様は気分を害されるかもしれません。 m（
—（ m

第三話：啖呵と部屋割り

「「……………」」

僕と一夏の視線の先、『いかにも』今時な女子が立っていた。

今時代、ISの普及で女性はかなり優遇されている。ここ数年で、女性＝偉い、なんていう構造が浸透してる。

まあ、つまり。男はそんな偉い女性の方々にこき使われても文句は言えない訳で。

そんな、『自分、偉いですよ』な空気を、目の前の女子は纏っていた。

「訊いてます？お返事は？」

「「訊いてますけど、何か？」」

そう二人で答えると目の前の女子はわざとらしく声をあげた。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度と言っものがあるのではないかしら？」

（…一夏、この手合いは？）

（苦手だ。真琴もか？）

（うん）

アイコンタクトで一夏と会話する。

正直、こう言った性格は苦手だ。

確かにIS操縦者は偉い。

だが、だからといって、その力を振りかざすのはおかしい。
そんなのはただの暴力だ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし。真琴は？」

「生憎、家事が忙しくてニュースはそんなに見て無いんだ。つまり知らない」

事実、去年は孤児院の子供達の世話と受験勉強であんまりテレビや新聞を見てなかったからなあ……

しかしその答えが不満だったのか、目の前の女子……いい加減名前をブリーズ……は吊り目を細めて、見下した視線と口調で話しを続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

名前判明。セシリア・オルコットさん。ふーん。

「あ、質問いいか？」

「ふん、下々の者の要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしく
てよ」

「あ、僕もいいかな？」

「構いませんわ」

「代表候補生って、何？」

ガタン！

あれ？何でみんなこけてるの？

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「アイルランド」

「ドナルド。ツクではなくて！！あなた方、本気でおっしゃってますの！？」

わーい、しりとり成功。にしてもすごい剣幕だ。マンガやアニメなら確実に血管マークが三つはオルコットさんの頭上についてる。

「おう、知らん」

「全く、わからない」

一応、聞いた事あるような無いような……

「……………」

オルコットさんは怒りが過ぎて逆に冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指で押さえた。

「信じられない…極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ。常識。テレビが無いのかしら……」

いや、そこまで未開の地だったら今の時代は無いから。

「それで、代表候補生って何なの？」

まあ、大体思い出したけど。

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートの事ですね。……そもそも、単語から想像できるでしょう」

「そついわれればそうだな」

一夏、それ堂々と頷く事じゃないよ……

「そう！エリートなのですわ！」

あ、復活した。

ぴしつと僕らに人差し指を向け、声をあげる。

「本来ならわたくしのように選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「ラッキーだね」

「…バカにしていますの？」

いや、幸運っていったの貴女ですよ。

「大体、あなた達ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。たった二人、男でISを操縦できると聞いていましたから、少し位知的さを感じさせるかと思いましたが、期待はずれですわ」

「俺に何か期待されても困る」

「知的さ醸し出して飯が食わせられるならとづくにやってる」

知的『さ』ではダメなんだ。外面？知りません。

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ」

節子それ優しさちゃう、横暴や。

っは、僕は何を…

「ISのことわからない事があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一って……あれ？

「入試ってあれか？ISを動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「僕もだよ？」

「は……？」

確かに倒した。開始早々突っ込んできたからそのままカウンター入
れて倒した。いやあ、あの試験用ISは動かし易かった。装備刀だ
ったし。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではって話じゃないかな？」

ピシッ。オルコットさんのまわりが凍てついたような気がした。
誰だ、いてつくはどう使ったの。

「っ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」「」

「あなた方！あなた方も教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ多分」

「僕も、一応、かな」

「多分！？一応！？どついう意味かしら！？」

「まあまあ、落ち着いて…」

「こ、これが落ち着いていられー」

キンコンカーンコン……

と、オルコットさんの話に割り込んだのは三時間目開始のチャイム。

僕には福音に聞こえる。

「っ……！また後で来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

だが断る。

って言ったら怒るだろうからとりあえず頷いた。

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目の授業担当は、これまでの山田先生とは違い、千冬さんのようだ。結構大切な事なのか、山田先生までノートを開いていた。実際、ISの装備は多岐に渡る。

刀剣類は勿論の事、銃やプラズマガン、果ては誘導兵器まで様々な武装がある。

ISはそれらのIS専用兵器との互換性を持ち、かなりの発展性をもっている。

そついった装備の特性を操縦者が活かせなければ宝の持ち腐れ。と

いう事。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなくてはな」

ふと思い出したように千冬さんが言う。

クラス対抗戦？そんなのあったんだ。

前に座る一夏も『クラス対抗戦？代表者？』と呟きながら首を傾げている。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力を測るものだ。今の時点で対した差はないが、競争は向上心を生む。

一度決まると一年間変更はないからそのつもりで。

自薦他薦は問わん。誰かやる者は居ないか？」

ざわざわと教室が騒がしくなる。

まあ、クラス代表者って今聞いた限り面倒くさそうだもんね。なる人にはとりあえず労いの一言でも言っておこう。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

女子の一人が手をあげる。

あ、やっぱりそうなるんだ。一夏ドンマイ。後でジュースを奢ろう。

「私は香我美くんが良いと思います！」

へえ、香我美なんて珍しい名字、僕以外にもいたんだ………

…いや、それはない。

まで、落ち着け香我美 真琴。聞き間違いかもしれない…

「私は織斑くんが良いです!」

「私は『香我美 真琴』くんを推薦します!」

わーい、聞き間違いじゃなかったぞー!!
って喜べるかぁ!!

「お、俺!？」

「僕!？」

つい立ち上がってしまう。一夏も同じ心境なのか立ち上がった。
そして、はい来ました視線弾幕。難易度ルナティックですね、わかります。

「織斑、香我美。席に着け、邪魔だ。

…さて、他にはいないのか? いないならこの二人のどちらかに決まるが」

「「ちよつと待った! 俺(僕)はそんなのやらなー」」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権など無い。選ばれた以上は覚悟しろ」

「でもー」

まだ反論を続けようとした僕らを、突然甲高い声が遮った。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がったのは、オルコットさんだった。

nice timing！オルコットさん！！

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくし、セシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！」

オルコットさん、何故『男が』の部分で僕を見なかった。

「實力から行けばわたくしがクラス代表者になるのは必然。それを、物珍しさを理由に極東の猿にされては困ります！わたくしはIS技術の修練の為にこのような島国に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

ついには猿呼ばわり…さらには『このような島国』、と…イギリスだって同じでしょうに。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！！」

ああ…なんかイライラしてきた…いや、キレちゃダメだ、穏便にー

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない事自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛でー」

カッチーン。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何

年覇者だよ」

「そんなにガタガタ言うならさっさと世界一まずい料理で数年覇者の母国に帰れば？実力トップさん」

――あ。

「なっ……!？」

つい言ってしまった。

一夏を見ると『やつちまったあああ!!』みたいな雰囲気醸し出してる。二人揃って視線をあげると、

ゴゴゴゴゴゴゴ!!

めちゃくちゃ怒ってましたああ!!

「あつ、あつ、あなた達ねえ!わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

いや、先に侮辱したのそっちだし。

こうなった以上、仕方ない。

覆水盆に返らずとはこのことか。

「決闘ですわ!」

バン!と机を再度叩くオルコットさん。机、よく叩くなあ。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい。な、真琴?」

「まあ、わかりやすいね」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

「わざと負けようと思う程、僕は堕ちてない」

「俺もだ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示す機会ですね！」

「そうですね。」

にしても、成り行きで決闘することになっちゃったな……ああ、そう
だ。

「戦う場合、一人ずつ戦うの？侮るつもりはないけど、オルコットさん体力もつの？」

「あら、別にわたくしは二対一でもよろしくてよ」

「だってさ、一夏。どうする？」

「…………俺は、二対一で構わない」

少し考えた末、一夏はそう言った。

一夏、男らしく二対一で戦うのが好みなのかな……

「いいですね。二対一でかかってらっしゃい。まあ、わたくしが圧倒するのは目に見えていますけど」

さっきの怒りようはどこへやら。オルコットさんは嘲笑を顔に浮かべていた。

「……………」

確かに。僕はIS同士の戦闘がどういったものかあまり知らない。せいぜい、テレビでやっていた千冬さんの現役時代の特集で見た程度だ。

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、香我美とオルコットはそれぞれようをしておくように。それでは授業を始める」

パンッと手を打って千冬さんが話を締める。

席について今後について考えた。

（操作技術に関しては誰かに教わって、後は放課後自主トレかな…）
けど…

（勝ったら勝ったで一夏と戦うのか…それに勝ったら代表者。なんか頭が痛い…）

まあ、とりあえずは授業に集中しよう。

「ふう……」

時は過ぎて放課後。僕は鞆の中に教科書とノートを詰め終わり、伸びをした。

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ…？」
前では一夏がぐったりとしていた。

「あはは…、まあ事前に参考書読んでおかないとただの文字の羅列みたいなものだよね」

「まったくだ…」

そう言つて一夏は愚痴る。
ちなみに、放課後とはいえ朝と状況は変わらず。女子（学年・クラス問わず）が廊下に押しかけている。

「…勘弁してくれ」

昼休みに至つては正に地獄だった。
僕と一夏が学食（かなり広い。メニューはおいしい）に移動するとピ。ミンよろしく全員ついてきた。
さらに学食では入った瞬間女子達が道をあけて、まるで十戒のモーゼの海割りを体感した。

「ああ、織斑くんは香我美くん。まだ教室にいたんですね、よかったです」

「「はい？」」

呼ばれて顔をあげると、山田先生が書類を持って立っていた。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて僕と一夏に部屋番号のかかれた紙と鍵を渡す山田先生。そういえばこつて全寮制だったけ。入学前に渡された書類はあんまり見てなかったから忘れてた。

「俺の部屋、決まつてないんじゃないですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学つて話でしたけど」

「僕も似たような感じでしたが……。あれですか、事情が事情だから、ですか？」

「はい、その通りです。……二人は、そのあたりのことつて聞いてます？」

最後は僕らにだけ聞こえるように声を潜めた。

政府と言つのはそのまま日本政府。

僕と一夏は前例の存在しない『男のIS操縦者』だから、国としては保護と監視を付けたいようだ。

まあ、あのニュースが流れてから家である孤児院にマスコミやら各国大使やら更には遺伝子工学研究所の人まで来て大変だった。

主に騒がしさに泣いてしまった赤ん坊と、ハイテンションな悪ガキ達の世話が。

僕にとっては今回の話はとてもいい。孤児院の子達が心配だけど。

「そういうわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいなんです。1ヶ月もすれば個室が用意できますから、それまで相部屋で我慢して下さい」

「わかりました…。それで部屋についてはわかったんですけど、荷物は家ですし、一度帰りたいんですが」

「あ、俺もそうしたいんですが」

「あ、いえ、荷物ならー」

「私が手配しておいた。ありがたく思え」

この声、千冬さんか。頭の中ではすでに四魔貴族のテーマが流れている。ちなみに千冬さんが怒ったときは、エ。ステスの戦闘曲だ。うちゅうのほうそくが みだれる ！

「「どうもありがとうございます…」」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと携帯の充電器だけで充分だろう」

まあ、それだけあれば充分かな。ゲームとかやらないし。あ、でも本は持ってきて欲しかったな。後で取りに帰ろう。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取って下さい。ちなみに各部屋にはシャワーがあります、大浴場もあります。……えと、その、二人は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

一夏…少し考えればわかる筈だ。

「一夏は、同年代の女子と一緒に風呂に入りたいの？」

「あー…」

やっと気付いたか。ここは、僕ら以外全て女子しかいないことに。つまりは、そういうこと。

「おつ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、ダメですよ！！」

「い、いや、入りたくないです」

まあ、倫理的にダメだね。入ったらまず死ぬし。

「えっ？女の子に興味がないんですか！？それはそれで問題のよう
な…」

あるえ？そっち方面になるの！？

というか廊下の女子は一気に盛り上がりすぎでしょ！！

「織斑くんと香我美くん、男にしか興味がないのかしら…」

「それはそれで…いいわね」

「織×香我…じゅるり」

「中学時代の交友関係を洗って！すぐにね！明後日までには裏付けとって！！」

おいコラちよつと待てええい！！

なんで僕も入ってるんだ！？

というか織×香我って何！？交友関係洗って何を知る気なの！？

「えつと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。二人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

ここから寮まで五十メートルはくだらないのに、どう道草食えと。

「ふー…」

「あうう…」

千冬さんと山田先生が教室から出て行くのを見て僕と一夏は立ち上がった。

そして視線をあわせて、

「「帰ろうか」「」

肩を落とした。

第三話：啖呵と部屋割り（後書き）

次回、部屋と専用機

真琴「戦闘はいつ？」

…善処します

感想よろしくお願いしますm（　　）m

第四話：部屋と開発者の妹（前書き）

真琴の部屋での話です。（＾・＾）ノ

よろしければ感想お願いしますm（|（|（m

第四話：部屋と開発者の妹

「えーと、ここかな。1025室」

「僕は…1027室ってあれ？」

あの後寮へと来た僕らは部屋の番号を確認して…疑問に思った。

「同じ部屋じゃ…」

「ない…だと…？」

Why? 何故？

普通に考えて男同士で相部屋。これが安置でしょ…。だと言つのに別々の部屋。

「…山田先生は一体何を考えているんだ…!!」

「まあ、真琴落ち着けて」

「声が震えてるよ、一夏」

「うぐ…ま、まあ、何とかなるだろ」

「それもそうだね…」

寮に入ってはやくも諦めの境地に僕らは至った。仕方なくドアに鍵を差し込む。

あれ？

「「開いてる？」」

「一夏も同じか……。やばいよこれ、何か嫌な予感がプンプンするよ。」

数秒の間の後、僕は顔を合わせ、

「死ぬなよ」

「お互いね」

それぞれの部屋へと入った。

って。

「あれ？」

部屋を見渡す。

高級そうなベッド2つ。窓。テレビ。机2つ。本棚。
しかし誰もいない。

「……相部屋の人はまだ帰ってないのかな」

鞆をベッドに放り投げ、制服の上を脱ぐ。
に、してもだ。

「……………」

なんか、ホテルの一室みたいだな…

「誰もいな「いるよ」「ーへ？」

唐突に言葉を遮られた。まわりを見ても誰も…

「ここにいるよ」

「っ！？」

恐る恐る後ろを見る。

そこには、『濡れた髪の子が立っていた』。

「っ…！！き…」

「き？」

「きゃあああああ！？」

「え、ええ！？」

即行でベッドに飛び込み布団をかぶる。

やだやだやだやだ、怖い怖い怖い怖い…！！
うう…

「怖いのだああ…！！」

ダメだって、怖いのだなの！無理なの！

「い、いや、私相部屋の人だから、大丈夫だから！怖くないからね？」

「え……？」

布団から出て改めて女の子を見ると、普通に同年代の女子だった。バスタオル一枚の。

「……………」

「？どうかした」

「…はやく、服着て下さい」

「あ」

女子は今気付いたかのように声をあげた。

「改めて、君と相部屋の、田並^{たなみ}里乃^{りの}。よろしく」

「えと、香我美 真琴です。よろしく……」

あれから、少し落ち着いてお互い自己紹介をしていた。田並さんは白桃色の長髪をそのままに、寝間着なのか赤いジャージを着ている。イメージするなら、赤いスポーツタイプのバイクだ。ついでに姉御キャラ。

「いやあ、さつきはごめんね。驚かせちゃったみたいでさ」

たはは、と笑いながら田並さんは頭を掻いた。

「い、いえ。僕の方こそ……」

正直あれはビビった。

にしてもさつきから隣が騒がしいな…。

「確か隣は…、篠ノ之さんと織斑って子だっけ？」

「一夏え…」

一夏いいなあ…知り合いと同室で。

「まあ、何にせよしばらく同室なんだし、仲良く行こうか！」

「はい、よろしくお願いします」

明るく笑う田並さんに返事をする。
田並さん、良い人だな…。

「とりあえず敬語抜かないかい？」

「え、でも…田並さん」

「ああ、後それも無し！名字で呼ばれるのは何か変な感じがするんだ」

「はあ……」

まあ、本人が言ってるんだし、素に戻しても大丈夫かな。

「…わかったよ、里乃」

「おう！」

イメージ通り、里乃は姉御肌だった…。

その後は相部屋での決まり事を決めたりして一夜を過ごした。

翌日。朝起きて食堂に来た僕と里乃は適当な席に座って食事をとっていた。

「相変わらず女子しかない……」

「IS動かせるのは真琴と織斑を除いて女性しかないんだ、諦めな」

おかずの鮭の切り身を食べながら里乃がそういう。
って、

「里乃、口に物を入れながら喋らないの」

「ゴクン。おっと、失礼。にしても昨日の話は本当なんだな」

「何が？」

「真琴が孤児院で子供達の世話してるって話」

「ああ……」

昨日里乃には僕の事がある程度話した。

孤児院の事、そこに居る子供達の事、僕が院長であり、義父である
『香我美 栄治』と子供達の世話をしている事など。

「実際、子供達の世話ってどんなんだ？」

「いろんな年齢の子供達だからなあ…朝起こして、ご飯作って、赤
ん坊にミルクやって、食器洗って片付けて、学校の帰りに買い物し
て、帰ったらお風呂沸かして、夕飯準備して、子供達をお風呂に入
れて……」

「もういい、真琴が多忙だったのは充分わかった」

「そんなに多忙じゃないよ？」

実際、子供達の世話は大変だけど楽しかったし。

「今頃義父さんにご飯作ってもらってるんだろっな……」

「子供達が心配かい？」

「まあ、ね…あの子達、甘えん坊だから」

慎二はおねしょ大丈夫かな？早苗はちゃんと起きてるかな？

奈美は…まあ一番しつかりしてるから大丈夫か。

「あんた、本当に15かい？」

失礼な、ピチピチの15さい……うげ、自分で言っただけで気持ち悪い。

「おっと、さつさと飯食べちゃおうか。そろそろ来る頃だし」

「来る？っは！」

そうだ、ここの寮長は千冬さんだった！！

危ない、昨日里乃に話を聞いてなければ死んでいた…。

急いでサンドイッチを食べていると、

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグ
ラウンド十周させるぞ！」

千冬さんが現れた。

危ない、食いが終わった。千冬さんの言葉を聞いた途端、食堂にいた
一夏のぞく全員が慌てて朝食の続きに戻った。

一歩遅れて一夏もスタート。あれ？さっきまで一夏の隣にいた篠ノ
之さんはどこへ？

「さっさと行こうか、真琴」

「うん、わかった」

里乃と席を立って食器をかたしに行く。

（来週…か）

来週、オルコットさんとの対戦がある。

それまでにはISの操縦を上手くしないと…。

ちなみに。IS学園のグラウンドは一周五キロ。千冬さんはそれを十周させると言った。

つまり五十キロ。

…、死ぬる。

時は過ぎ、現在三時間目ノートを取る僕の前で一夏は沈んでいた。なんかもう鬱オーラが漂ってる。

「……………」

おおよそ、授業内容は少しわかるけど他はわからない…みたいな感

じかな。なんでわかるかって？伊達にワンパクな子供達の世話してないって事で。

「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態に保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられー」

「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中をいじられるみたいでちょっと怖いんですけど…」

クラスメイトの一人がそう尋ねる。

確かにあのISを動かしたときの妙な一体感は、人によっては不安を感じるのかな。

僕はあの感覚好きだけど。

「そんなに難しく考えることはないですよ。そうですね、例えば皆さんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、人体に悪影響が出るといことではないわけです。もちろん、自分にあったサイズを選ばないと、形崩れしてしまいますがー」

話の途中で山田先生が一夏と目線を交わす。

次に僕と。

山田先生、理解してくれた？野郎はブラなんざつけないんだよねお！！（若本ボイス）

「あ、えと、その、お二人はしてませんよね。わ、わかりませんよね、この例え。あ、あははは…」

山田先生のごまかし笑いで教室内はなんというか微妙な空気になった。
どうすんのこの空気、絶対空気清浄機かけても戻らない空気だよこれ。

助けてえー（ry

「んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

excellent！！千冬さんありがとう！！

千冬さんの一言で山田先生は教科書を落としそうになりながら話の続きに戻った。

「そ、それともう一つ大事なことは、ISにも意識に似たものがあり、お互いの対話ーっ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、ISも操縦者の特性を理解しようします」

つまりは一緒に戦う事で学ぶって事か。

「それによってお互いを理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識して下さい」

パートナー…家族みたいな感じかな。

山田先生が話を区切るとすかさず女子の一人が挙手した。

「先生ー、それって彼氏彼女みたいな感じですかー？」

ああ、人によってはそういう考えもあるのか。

「そつ、それは、その…どうでしょう。私には経験がないのでわかりませんが……」

経験というのは交際のことかな？

でも山田先生ってルックスいいからすぐ彼氏できそうだけど…。

赤面してうつむく山田先生を尻目に女子達は男女関係の雑談をはじめる。まあ、年頃の女の子だし仕方ないか…でも。

（めちゃくちゃ空気が甘い……）

このクラスだけでなく、学園全体の空気が甘い。女子しかいないというのが関係してるんだろうけど、とにかく甘い。ものすごく居づらい。

「……………」

「な、なんですか？山田先生」

「あつ、い、いえつ。何でもないですよ」

ふと気づくと一夏が山田先生にじっと見られていた。

キンコンカーンコン……

「あつ。えつと、次の時間では空中におけるIS基本制動をやりますからね」

そう言った山田先生と千冬さんは教室を出て行った。忙しそうだな

…。

「お疲れさん、真琴」

「あ、里乃」

「ねえ香我美くん！」

「しっつもーん！！」

「うわぁ！？」

里乃に肩を叩かれ振り向くとクラスの女子十数名が詰めかけてきた。前を見ると一夏も似た状況になっていた。

「び、びっくりしたぁ…それで、質問って？」

「香我美くんって料理できるの！？」

「まあ、一通りは」

「じゃあ今度私に料理を作って！！」

「え、でも…」

「悪いな、一番は私だ」

僕に詰め寄る女子に自分の胸を親指でさしながら里乃が言うと、僕のまわりにいた女子達は固まった。

「「「なん…だと」「」「」

「今度暇な時に私に作ってくれるんだ。な？」

「うん。そういう約束だし」

などと話していると、

スパアン！！

「休み時間は終わりだ。散れ」

千冬さんが現れた。音の出どころは一夏の頭。
出席簿恐ろしや。

「ところで織斑、香我美。お前らのISだが準備に時間がかかる」

「へ？」

「どうしてです？」

「予備機がない。だから少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「???」

「なっ…」

一夏はよく分かってないみたいだけど、専用機を用意って…かなり
凄いことだね……

「せ、専用機！？一年のこの時期に！？」

「つまり政府からの支援が出るって事で…」

「ああ。いいなあ…」

そう、専用機というのはおいそれと誰もが持つものじゃない。国レベルの話だ。

一夏の様子を見かねたのか、千冬さんが一夏に指示をだす。

「教科書六ページ、音読しろ」

「え、えーと…」

一夏が教科書を読み始めた。
長文なので要約すると、

・ISは現在世界に467機しか存在しない。

・制作者は篠ノ之博士。

・ISに使われているコアは各国家などに割り振られ、研究されている。

・コアは取引、売買してはならない。

「つまりそういうことだ。本来ならIS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。だが、お前らの場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。…理解できたか？」

「な、なんとなく…」

千冬さんの『理解したか、馬鹿者』オーラに一夏が頷いた。

簡単にいえば僕は特別待遇な実験体ということだ。

そういえば、篠ノ之博士の篠ノ之って……

「あの、先生。篠ノ之さんて、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか…？」

まあ、そう考えるよね。篠ノ之 束。ISをたった一人で作り上げ、世界を塗り替えた稀代の天才と言われる人物。

IS発表のニュースを見たときは酷く驚いた。

何せ、たった一人の人間が、世界を塗り替える瞬間だったから。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

案外あっさり個人情報漏洩。あいつって呼ぶということは千冬さんと親しい仲なのかもしれない。

「えええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？こんどISの操縦教えてよっ」

授業中に関わらず篠ノ之さんの所に集まる女子達。

ああ、篠ノ之が震えてる。怒ってるなあれは。

「みんな、それ位にしな」

篠ノ之さんが口を開く手前、女子達の後ろに立った里乃がそう言った。

「確かに興味を持つのは分かるけどさ。あんまりそういうのはバンバン詰めかけて聞くものじゃないよ。篠ノ之の気持ちも考えてやって」

里乃の言葉に篠ノ之さんに集まっていた女子らが自分達の行為に気づいたのか、自分の席に戻っていった。

「…礼は言わんぞ」

「何、構わないさ。困った時はお互い様ってね」

篠ノ之さんにそう言うとき里乃もまた席に戻った。ほんと、姉御肌だなあ…。

前に座る一夏を見ると何か引つかかるのか、首を傾げていた。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

僕も気になるけど、とりあえず今は授業に集中しよう。

第四話：部屋と開発者の妹（後書き）

次回、IS訓練のお話です（＾－＾）／

第五話：訓練、飛翔（前書き）

漸くIS登場です。

第五話：訓練、飛翔

時間は過ぎ去り放課後。休み時間や昼休みにいろいろあつたけど割愛。

現在僕は剣道場に来ている。

理由はまあ、一夏に引つ張られてきたから。

なんでも篠ノ之さんが一夏に稽古をつけるらしい。

僕も一応やつとかな。

一夏と篠ノ之さんが打ち合っている間に僕も少し離れた所で借りた竹刀を構える。

とりあえずは居合いの構え。

今の僕の格好は胴着だけなので、一応様になってると思う。

「……………」

――眼前に仮想敵を配置。武器は、二刀。構えは上段構え。

「……………」

集中。

【……………！】

「…っ！」

開始。

一歩強く踏み込み竹刀を抜き放つ。

仮想敵は右の刀で防ぐと左の刀で袈裟切りを放つ。

「っふ！」

それを敵の後ろにまわるように避け、がら空きの背中に唐竹割りを放つ。仮想敵はそれを前に踏み込むことで避け、振り向きざまに一閃。

「っ！」

「流る風」

イメージはそよ風。足の力を抜いて後ろに一歩。そして、そこから。

「凪ぐ風」

「っはあ！！」

大きく踏み込み仮想敵の懐に入って竹刀を逆袈裟に振り上げる！！

斬！！

「……………」

【……………】

手応えあり。

——仮想敵を消去。

目を瞑り、開けると、そこに仮想敵は居なかった。

「ふう…」

体の力を抜いて、一息ついていると、妙に視線を感じた。

ジー…

「えと、何？」

「「格好いい……」」

「ふえ？」

格好いい？何が？

家でやってた事をしただけなのに…。

「真琴って、剣道やってたのか？」

「剣道、っていうか剣術をかじった位かな」

一夏の疑問に答える。

「僕の義父さんが剣術やってて、それで教えてもらったんだ」

「そうなのか」

納得してくれたようだ。　　ってか剣道部の方々、

「家政スキルありで剣術もやってて……完璧ね」

「ああ…普段はかわいいのに剣術やってる時は綺麗ねえ…」

とか言ってるけど、完璧って何が。更に普段はかわいってどういう意味だ!!

まあ、とりあえず体はなまってないみたいだし、安心かな。

翌週、月曜日。オルコットさんとの決戦日。

「やってしまったああ……」

「まあまあ、真琴気をしっかり保て」

「これがしっかり保てるわけないよ!」

やってしまった。大いにやってしまった。
剣術の練習が楽しくて今日に至るまで、

全くISの訓練をしていない……!!

判明したのは昨日の夜。里乃に聞かれてやっと気づいた。
その時の会話がこれ。

『そういえばさ、真琴』

『何？里乃』

『最近剣術頑張ってるんだって？』

『まあ、ちっちゃい時からやってたし…』

『そうなんだ。で』

『？』

『明日セシリアと対戦だけど、大丈夫か？』

『……………大丈夫じゃない、問題だ』

以上、昨日のハイライトをお送りしました。

「頼む、言い訳をさせてくれ。僕と一夏のISが来てないんだ。練習しようがないじゃないか…」

そう、僕と一夏のISは何かいろいろこたついてるらしくまだ来ていない。『今もまだ来ていない』。

「……………」

同じ理由（？）で剣道をずっとやってた一夏とその原因である篠ノ之さん、そして僕と里乃は沈黙した。

と、そこに。

「織斑くん香我美くん、織斑くん香我美くん!!」

よく噛まずに言えるなあ…。

第三アリーナ・Aピットに走ってきたのは山田先生だった。
いつも以上に慌てた様子だ。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいつ。す〜〜は〜〜、す〜〜は〜〜」

「そこで止めてください」

ちよっ、一夏流石に止めないでしょ。

「うっ」

息止めたよこの先生…。

「「……………」」

「…………ふはあっ!ま、まだですかあ?」

一夏、止めるタイミング見失ったな。
僕もだけど。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者ども」

スパパアン!!

相変わらずの威力。痛みは例えるなら自転車に引かれた感じ。え？
わからないって？

「千冬姉…」

「千冬さん…」

ズドン！！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなければ死ね」

この人ホントに教育者？この性格どうにかすれば彼氏なんて簡単に
できそうなのに。

「ふん。馬鹿な弟と馬鹿な教え子にかける手間暇がなくなれば、見
合いでも結婚でもすぐできるさ」

わお、読心術。教育者の前に本当に人か？

「そ、それですね！来ました！二人の専用IS！！」

——え？

「織斑、香我美、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は
限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

なんですと？

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

「ま、あんなならできさ、真琴。頑張んな」

ええと？

「え？え？なん……」

「早く！」

山田先生、千冬さん、篠ノ之さん、里乃の声が重なった。
アグレッシブな女性勢揃い、わお。

ごごんつ、と鈍い音と共にピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタ
イプの防壁扉は重い駆動音を響かせてその内側を晒す。

そこには2つの

『白』

が存在していた。

白、純白。何にも染まらず、何にも染まる白。

その色を纏ったIS2つが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが…」

「僕らの…」

「はい！織斑くんの専用IS『白式』と、香我美くんの専用IS『

アーンヴァル』です!!」

アーンヴァル。静かに鎮座するそれは、僕の存在を待っているように見えた。

まるで、永らく逢えなかった人を迎えるように。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。いいな」

せかされ、僕と一夏は自分のISに触れる。

「あれ……?」

何も、感じない。初めてISに触れた時の、あの意識が澄み渡るような感覚がない。
でも、

(わかる…)

理解できる。このアーンヴァルが何のためにあるのか。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

千冬さんの言うとおり、装甲を開いたアーンヴァルに体を任せる。受け止めるような感覚の後、体にあわせるように装甲が閉じた。

カチャカチャカチャ、と装甲のロック音が響く。そして訪れるあの温かい感覚。

初めから僕の一部だったようにアーンヴァルと僕が『リンク』する。

視界がまるで解像度の高いカメラのように一気にクリアーになる。
各種センサーが告げる数値はすべて理解できる。

「ん」

――戦闘待機状態のISを感知、操縦者セシリア・オルコット。
ISネーム『ブルー・ティアーズ』。

戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、真琴、
気分は悪くないか」

千冬さん、声が震えてる。ハイパーセンサーでやっと感知できる位
の震え。

心配してくれてるのかな？

「大丈夫、千冬姉。いける」

「僕も。問題ないです」

「そうか」

ほっとしたような声。

これもハイパーセンサーでやっと分かる位のブレだった。

それとなく、里乃を見る。見るといつても目を向ける必要はない。
なにせ自分の周囲360度全てが『見える』から。

「真琴」

「ん？」

「頑張んな。真琴ならできるさ」

「うん。里乃」

「何だい？」

「行ってきます」

「おう、行つてきな!!」

その言葉に頷き前を向くと、一夏が先にピット・ゲートに進んでいた。

「真琴！先に行かせてもらっぜ!!」

「了解！」

返事をする、一夏はピット・ゲートから飛び立っていった。さて、じゃあ僕『ら』もいこうか……!!

「行くよ、アーンヴァル！」

そう呼びかけ、僕はピット・ゲートから飛翔した。

【よろしくお願いしますね、マスター】

そんな声が聞こえた気がした。

第五話：訓練、飛翔（後書き）

次回、セシリア戦！！

第六話：Battle in the sky（前書き）

やっと戦闘に入った：

感想お願いしますm（
|
|
）m

第六話：Battle in the sky

「あら、逃げずに来ましたのね」

バトルフィールドに飛び立つと、オルコットさんがふふんと鼻を鳴らす。

まあ、それはいいとして。

僕はオルコットさんの身に纏うISを見る。

鮮烈なまでの青をメインカラーとした機体、『ブルー・ティアーズ』。

特徴はオルコットさんの背に浮かぶフィン・アーマー。そして腰部にある白い柱のようなスカートアーマー。

オルコットさんの手には全長二メートルはある長大なライフル。

『武装検索。六七口径特殊レーザーライフル』『スターライトmk?』が握られていた。

ISというのは元々宇宙空間での運用を前提に作られているので、原則空中に浮いている。

なので、自分の身長より大きな武器を扱うのは普通だ。フィールドの直径は二百メートル。

ISの出した情報だと、発射から目標^{ターゲット}への到達予測時間は、0.4秒。

既に試合開始の鐘はなっている。

いつ撃ってきてもおかしくはない。

「最後のチャンスをあげますわ」

腰に当てていた手を僕らの方に、ぴつと人差し指を突き出して向けてくる。

左手に持ったライフルは余裕の表れか砲口は下がっている。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝するというなら、許してあげないこともなくつてよ」

そう言つて目を細める。

「ー警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロック解除を確認。」

ISの情報を自分なりに理解する。

「そう言つのはチャンスとは言わないな」

「確かに。チャンスつて言うなら一発くらいあたってくれてもいいんじゃない？」

「そう？残念ですわ。それならー」

「ー警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。」

「お別れですわね！」

「「っ！！」」

キューイン！！

耳をつんざくような音と共に閃光が走る。

「うおっ!？」

「つく…!」

アーンヴアルのオートガードが作動し、僕の体を守ってくれた。一夏もオートガードを作動させ、一応無事だった。直撃ではない。しかし直後に訪れる衝撃に吹き飛ぶ。

「チイツー!」

瞬時に自動姿勢制御を行うアーンヴアル。

頼むからもっとデリケートに姿勢制御できない? 気持ち悪くなるんだけど。

ーバリア貫通、ダメージ46。シールドエネルギー残量、564。実体ダメージ、レベル低。

「初撃でこれか…一夏、無事!？」

「なんとかな…くそつ、俺が白式の反応に追いつけてないのか!」

僕の問いに一夏はそう応えたと左手を強く握った。

簡単に言えば、ISバトルは相手のシールドエネルギーを0にすれば勝ち、0になれば負ける。

今みたいにバリアを貫通する攻撃を受けると実体がダメージを負う。それは数値化されているシールドエネルギーと違い、破損箇所などは大なり小なり試合に影響する。

ちなみに、操縦者が死なないうつ、ISには『絶対防御』なる能力

がある。文字通り、いかなる攻撃も防ぐけど、これにはシールドエネルギーがかなり消費される。

先程の攻撃があたった箇所は二人とも肩だったから、『吹き飛んでも平気』というISの判断で、『絶対防御』は働かなかつたみたいだ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

直後放たれる雨のような射撃。

それら全てが寸分の違いなくこっちを狙ってくるため、ものすごい勢いでシールドエネルギーが削られ、アーンヴァルから伝わるアラートが絶え間なく鳴り響いていた。

「一夏！武装は！！」

「今探して……って」

「どうしたの！？」

「一個しかないんだが……」

マジですか……こっちも現在アーンヴァルにセットされている装備を確認する。

『近接大型ブレード』、『ハンドガン』

おかしい、接近戦装備しかない。

ハンドガンって……せめてアサルトライフルはなかったの？

「「ええい、ままよ！」」

素手よりか数段マシだ！一夏は近接ブレード一本を展開し、僕は大型ブレードを右手に、ハンドガンを左手に（双方名称未設定）を展開する。

一夏の手には片刃の、ブレードというより『刀』というほうがしくりくる武器が握られていた。対して僕の右手には僕の身長（166センチ。小さいと言ったやつ、表に出る）より頭二つ分位大きな両刃の剣が、左手にはハンドガンと言うわりにはハイテクそうな白をメインカラーとした、小さいブレードがついたハンドガンが握った。

よし、とりあえず一夏よりはリーチが長いハンドガンがある。これで支援できるか…

「一夏っ！僕がハンドガンで援護するから、一夏は近接戦に持ち込んで！」

「了解っ！頼りにするぜ、真琴」

通信を切ってオルコットさんを見る。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離装備とハンドガン一丁で挑もうだなんて…笑止ですわ！」

すぐさまオルコットさんの攻撃。

僕はそれぞれ身をひねって回避する。

眼前にあるのは二十七メートルという、圧倒的な距離。だが、そんなもの――

「「やってやるぞ」

すぐに詰めてやる。
激戦が、始まった。

「ーっく、なかなかやりますわねっ!!」

「そりゃ」

「どうも!!」

戦闘開始から二十七分経過。

何度が一夏がオルコットさんに接近してダメージを与えているけど、正直、どっちもどっちだ。
こちらのダメージは、

一夏のシールドエネルギー残量、132。

僕のシールドエネルギー残量、144。

対するオルコットさんのシールドエネルギー残量は、238。
幾らなんでもこれは無いでしょ…。

「わたくしとブルー・ティアーズを前にここまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

そう言つてオルコットさんは自分のまわりに浮かぶ4つの自立機動兵器を撫でる。犬か。

フィン状のパーツには特殊（BT）レーザーの銃口が開いている。
名前は面倒なことに『ブルー・ティアーズ』。

なんでも、その『ブルー・ティアーズ』（以後BTと呼ぼう）を積んだ実戦投入一号機だから、機体も同じ名前だそう。聞いてもな
いのにオルコットさんが今までの戦闘中に喋ってくれた。
説明サンクス。

「では、閉幕と参りましょう」

オルコットさんは笑みとともに右腕を横に振る。すぐさま、命令を受けたBTが二機多角的な直線機動で接近してくる。

「――オーケー。理解した。」

「一夏、下がって!!」

「っ!!!了解っ!!」

一夏が僕の方に下がった直後、

「そこ!」

僕の上に回ったB.Tの一機をハンドガンで撃ち落とす。
続けて、真下に回ったもう一機をブレードで切り落とす。

ズドン！！

派手な音と共にB.Tが爆散する。

「なっ……！？」

「今までの戦闘で、あなたのその装備の癖、何となく理解しました」
ブレードを切り払い、一夏の所に戻りオルコットさんを見る。

「わたくしの、癖？」

「そう。この兵器はあなた自身が毎回命令を送らなければ動かない。
そして――」

一夏に視線を一瞬向けると、僕の意図を理解してくれたのか、頷いてくれた。

さあ、行くぞ……

「その時あなたはそれ以外の攻撃が出来ない。意識を制御に向けているから……です……！」

言い切ると同時に僕と一夏は動き出す。
フォーメーションはさっきと同じ、一夏が前で、僕が後ろ。

「っ!!」

オルコットさんの間合いに入った瞬間、一夏はそのまま突撃する。
一夏を狙うように展開するBTは僕がハンドガンで撃ち落とす。

「真琴!!」

「了解!!」

一夏の横に並び、大型ブレードを構える。

ライフルの砲口は間に合わない。

確実に一撃を加えられるタイミング。
しかし――

「――かかりましたわ」

にやりとオルコットさんが笑った。

「っ!!」

嫌な予感がして、オルコットさんの腰部に広がるスカートアーマー。

ヴン――。

その白い柱のような突起が外れ、僕ら二人に向いた。
まさか――っ!!

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ!」

回避不可能。その突起から放たれたのはレーザーではなく、ミサイ

ルだった。

ドカアアアーン！！

赤いすら超えた白い爆発と閃光に僕と一夏は吞まれた。

「一夏っ…！」

「真琴…」

ピットで戦闘の様子をみていた箒と里乃は思わず声を上げた。
共に戦闘をみていた千冬と真耶も、黒煙に埋まった画面を真剣な面
もちで見る。

「ーふん」

しばらく画面を見つめた千冬は鼻を鳴らした。
その表情には安堵が浮かんでいた。

「機体に救われたな、馬鹿ども」

黒煙が唐突に吹き飛ばされる。

その中心には、二つの純白が存在した。

『真の姿で』――。

第六話：Battle in the sky（後書き）

次回、一次移行！！

第七話：RIDE ON（前書き）

一次移行です（^・^）ノ

感想待ってますm（| |）m

第七話：RIDE ON

ーフォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

（…これは）

意識に直接送られるデータ。

それと同時に目の前に現れるウィンドウ。

その真ん中に「確認」と書かれたボタンがある。

（一次移行…）

ボタンを押す。瞬時に膨大な量のデータが流れ込んでくる。

否、整理されている。

そして、変化が訪れる。

キイイイイン……。

高い金属音。でも、僕にとっては温かく感じられた。

隣を見れば、一夏も一次移行を開始している。

そして、僕の身を包むーいや、僕の体そのものであるISが光の粒子となり、弾けて、そして再び形を成す。

「これは……」

「おはよう、アーンヴァル」

僕はアーンヴァルに語りかける。一夏は自分のISを見て驚いている。

形成されたばかりの装甲はまだ少し光を放っている。

さっきまでの実体ダメージは嘘のように消え、その形はより洗練されたものとなっていた。

「まさか……一次移行「ファーストシフト」!？」

あ、あなた達、今まで初期設定だけで戦っていたっていうの!？」

フォーマット フィッティング
初期化と最適化の終了。それは、簡単に言えばこうだ。

『これでやっと、この機体は僕専用になった』。

改めて機体を見ると、最初のゴテゴテした凹凸は消え、純白の装甲はそのままに、脚には膝の部分にブレードがつき、背についていた翼は消え、腰の部分に所々尖った推進機スラスターが着いている。

頭にはまるでユニコーンの角のようにその先端を上に向ける、角のついたヘッドギア。

それがアーンヴァルの『始まり』の姿。

武装を確認する。

――近接武装、LS7レーザーソード、M8ダブルライトセイバー、
M8ライトセイバー

――遠距離武装、アルヴォPDW11、-9サブマシンガン、M4

9 ショットガン、LC3レーザーライフル

ー 特殊武装、ココレット

一気に武装が増えていた。とりあえず、LS7レーザーソードを右腕に、-9サブマシンガンを左手に展開する。

右腕には蒼い刃をもった白き剣が展開し、左手にはオレンジの、マシンガンを持つ。

一夏の方は、

ー 武装検索、近接ブレード『雪片式型』と一致。
を握っていた。

……さあて、行こうか。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

一夏が雪片式型を構える。

「俺も、俺の家族を守る」

「…は？あなた、何を言ってるー」

全く、仕方ないなあ…なら。

「なら、僕は一夏の作る絆を守るよ」

「ああ頼むぜ、真琴」

僕は一夏の背を、絆を守ろう。僕なりに。

「さて…じゃあ行くぜ」

「一緒にね…行くよ」

「「ダチ公」」

「だからさっきから何の話を…ああもう、面倒ですわ!!」

リロードを済ませた腰のBTが二機、飛んでくる。
射撃型より速い。でも……

（斬り捨てるのみ…!!）

一夏の前に出て右腕のレーザーソードを振るう。

斬!!

横一閃。両断されたBTはそのまま僕らを通り過ぎ、爆発した。
瞬時に高度を下げる。

「一夏っ!!」

「オオオオッ!!」

僕の上を通り過ぎ、一夏がオルコットさんへと肉迫する。
その手に握った雪片は蒼白の光を纏っていた。

「これで……!!」

「なっ……!？」

オルコットさんの懷に飛び込んだ一夏が、雪片を斬り上げる。

「終わりだ!!」

斬ッ……!!

そして、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者――織斑一夏、香我美真琴』

こうして僕は、初めての試合で勝利を掴んだ。

「よくまあ、持ち上げてくれたものだ。全く……」

試合が終わって、ピットに帰ってきた僕らに千冬さんはそう溜め息

をついた。

内心嬉しいんだろうな、何せ自分の弟が勝ったわけだし。

「しかしまあ織斑、お前は武器の特性を考えずによく突っ込んだものだな。あと一撃食らっていれば、沈んでいたのはお前だったぞ」

「……彘？」

「詳しくは後で教えてやる。明日からは二人とも訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

「……はい」

頷くしかない。僕らが未熟なのは事実だし。

「えっと、ISは今待機状態になってますけど、二人が呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んで下さいね。はい、これ」

ドスッ。

……なんだ、これは。何々、『IS起動におけるルールブック』……いや、どうみても『あなたの街のことなら』な電話帳ですね本当にありが（ry

うわぁ…読み終わるかな、これ。

「何にしても今日はおしまいだ。帰って休め」

「はい。じゃあ、一夏お先に」

「あ、ああ……」

千冬さんの言葉に今は従おう。疲れがすごい……

「今日はお疲れさん、真琴」

「うん。かなり疲れた」

寮への道を歩きながら里乃と話す。一夏と篠ノ之さんはまだアリーナにいる。

「いやあ、戦ってるときの真琴はカッコ良かったよ」

「僕より一夏の方がカッコ良かった気がするけど？」

「何言ってるのさ、真琴も十分カッコ良かったさ」

「わわっ!？」

里乃に肩を抱かれて頭を撫でられる。
うわ、うわわわ…!

「り、里乃!? 当たってるって」

「ん?」

里乃が自分の胸を見る。

ニヤリ

あれ？

「全く真琴は可愛いねえ〜」

「にやああ〜!？」

恥ずかしがることなく余計に当ててくる。
ああ〜うつ〜…。

「あ、そういえばさ」

「うあ？」

しばらく僕を撫でていた里乃がふと何かに気付いた。

「クラス代表、結局織斑と真琴のどっちなんだろうね」

「あ」

しまった、忘れていた。あ、でも。

「僕が副代表つてことにしちゃえば……」

「おお、なる程」

そうすればまた戦闘する手間を省ける。
千冬さんに言っておこう。

そして、翌日。

朝のSHRで山田先生が嬉しそうに宣言した。

「では、一年一組代表は織斑一夏くん、副代表は香我美真琴くんに決定です。あ、一繋がりでいいですねえ」

その宣言にクラスの子は大いに盛り上がっている。けど一夏は『なん…だと』とか呟いてる。

「先生、質問です」

お、一夏が挙手した。

「はい、織斑くん」

「なんで俺が代表になって、真琴が副代表になってるんでしょうか」

「それは、真琴くんが代表ではなく副代表として織斑くんのサポートをしたいと申し出まして…」

「私が許可した。だらしないお前だ、補佐役がいたほうが良いだろう」

「いや、千冬姉の方が結構だらしなー」

ズトン！！

「ぐおおあああ！！か、角おお！？」

「なにかいったか？」

「いいえ、何でもありません織斑先生」

うわあ、角で叩いたよ千冬さん…あの威力で角は痛いだろうな…。

「と言う訳でだ。クラス代表は織斑一夏。副代表は香我美真琴。異存はないな」

はーいと一夏を除いたクラス全員が一丸となって返事をした。団結力って時に怖いね。

こうして、再びいつも通りに時間が過ぎていった…。

第七話：RIDE ON（後書き）

セシリア戦、如何でしたでしょうか？

次回はIS授業です。

第八話：飛行と落下と武器（前書き）

—夏墜落事故（笑）のお話です（^・^）/
感想お願いしますm（ー）（ー）m

第八話：飛行と落下と武器

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、香我美、オルコット。試しに飛んでみせろ」

四月も下旬に入り、遅咲きの桜がその花びらを全てなくした頃。僕は今日も今日とて、鬼軍曹こと千冬さんの授業を受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開に一秒はかからないぞ」

せかされ、意識を集中する。

ISは一度最適化したらその後はずっと操縦者の体に何かしらのアクセサリーとなって待機している。

セシリアさん（名前で呼べと言われた）は左耳のイヤークラス。僕は首のチョーカー。一夏は右腕のガントレット。

……もはや防具だ。

とりあえず、言われた通りにISを展開する。

展開の方法はイメージ。首のチョーカーに指先で触れ、イメージするのは一枚の白い羽根。

（起きて、アーンヴァル）

そう心の中で呼びかける。

途端、チョーカーから光が溢れ、僕を包む。そして形を成して光が消える。

IS展開完了、と。

この間0・7秒。

体が軽くなる。各種センサーに意識がリンクし、視界がクリアになる。一度意識を空へ向けると、アーンヴァルを装備した僕の体は十数センチ、地面から浮いていた。

同じく、一夏とセシリアさんもそれぞれ『白式』と『ブルー・ティアーズ』を装備して浮かんでいる。

「よし、飛べ」

言われて、僕は即座に飛翔する。セシリアさんも同じく急上昇し、僕と同じくらいの高度で静止した。

一夏も遅れて上昇してくるけど…遅っ!?

「何をやっている。スペック上の出力ではブルー・ティアーズより白式の方が上だぞ」

千冬さんのお叱りを受けながら、一夏が僕らの所で静止する。

「つつたつてなあ…『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』って、分かりづらいぞ」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。真琴はどうなんだ?」

「僕は、セシリアさんとの戦闘の時の感覚を思い出してイメージするんだ。あの、体が軽い感じをね」

「セシリアとの戦い……む、何か掴めそうだぞ」

一夏が納得したように頷く。役に立てたなら良いけど。

「にしても何で浮いてるんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干涉の話になりますけども」

「わかった。説明してくれなくていい」

「そう、残念ですわ。ふふっ」

あの日の戦闘以来、セシリアさんは一夏に積極的に話しかけている。なんというか、一夏の気を引こうとしているような……。もしかして、あれか。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導して差し上げますわ。その時は二人きりでー」

「一夏っ！いつまでそんな所にいる！早く降りてこい！」

いきなり一夏の通信回線から怒鳴り声が聞こえた。いや、こっちまで聞こえる声って大きすぎるでしょ。

地上を見ると、山田先生がインカムを筈さん（一夏の友人ならそう呼んで構わん。本人談）に奪われておたおたしていた。可哀想に。

「ちなみに、それでも機能制限がかかっているんでしてよ。元々I

Sは宇宙空間での稼働を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

おお、分かりやすい。さすが優等生。

ちなみに、一夏に対する篤さんの説明は

『ぐっ、とする感じだ』『ドンっ、という感覚だ』
『ずかーん、という具合だ』

聞いてた一夏の顔は、『わけがわからないよ!!』になっていた。篤さんは本当にISを動かせるのかな？

まだ訓練機を使った実習も始まってないから、篤さんや他のみんなのレベルがわからない。

ちなみに、セシリアさんはそんな篤さんの説明に『アバウト過ぎますわね』とか『そんな曖昧な説明では一夏さんが理解できないでしょう?』とか突っ込んで言い争いしてる。
あれか、ライバルだからか。

「三人とも、急降下と急停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ」

「わかりました。それじゃ二人とも、お先」

二人より先に降りることにする。

二人きりにしてあげよう。

さて、急降下と…。

イメージは槍。投擲された槍。物騒だって?コレが一番しっくりくるの。

イメージをそのままに地上へ。

地面より少し手前で、体を傾け、姿勢を制御しながらブレーキ。

「完璧だな」

お褒めに預かり光栄です。千冬さん。

その後、セシリアさんも難なくクリア。

次は一夏だ。

体を傾けて急降下。

そしてそのまま――

「うわああ!？」

ズドオオオン!!

墜落した。

ってダメじゃん!!

死んではいけないけど、一夏の心はクラスメイトの笑い声に瀕死だろ
うな…

「くくつ、地面に、突っ込んだ……あはは」

里乃、あんまり笑わないであげて、一夏のライフはもうゼロよ。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けて
どうする」

「……すみません」

クレーターから一夏が上昇してくる。

ISのバリアのおかげか、白式には汚れ一つない。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

箒さんが腕を組んで一夏を睨みつける。

昨日教えたって……あの擬音の事？

箒さんも冗談言うんだ。

「貴様ら、何か失礼なことを考えているだろう」

失礼な。その通りです。だからその睨みつけは止めてください。

「大体だな一夏、お前という奴は昔からー」

箒さんのお小言が始まるかと思ったら、それを遮るようにセシリアさんが一夏の前に現れた。

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

セシリアさんだ。

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

安心したように微笑むセシリアさん。

なるほど…箒さんとセシリアさん、か。

一夏も罪な男だね。（お前が言うか）

「……ISを装備していて怪我などするわけないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしょ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりは数段マシですわ」

バチバチッ！！

最近疲れてるのかな…二人の間に火花が散ったような気が。
あとセシリアさん。鬼の皮を被った魔王なら後ろにいますよ。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端でやっている」
現れた魔王…もとい千冬さんに二人は押しのけられる。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになった
だろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始める」

言われて、一夏が横を向く。

そして右腕を突き出し、左手で右腕を握る。

そして、一瞬の光の後、右手には雪片式型を握っていた。

武装も空を飛ぶのと同じくイメージが必要。

でも、武装を手に握るイメージってどこの日常生活なのか。
軍隊か。

「遅い。0・五秒で出せるようになれ」

これはまた手厳しい…。一夏が一週間練習した成果なのに。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

続いてセシリアさん。

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。一夏のように光の奔流を出さず、一瞬光っただけ。

それだけでその手には《スターライトmk?》が握られていた。

速いな…。銃器はすでにマガジンに接続され、セシリアさんが視線を送るだけでセーフティーが外れる。

一秒以内に展開、射撃可能まで完了している。

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめろ。横に向かつて銃身を展開して誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいいな」

「……、はい」

反論の余地はあるんだけど、そこは千冬さん。
一睨みで黙らせる。マジで軍人か、この人。

「次、香我美。武装を展開しろ。何でも構わん」

「はい」

言われ、即座にイメージする。
蒼い、二つの刃ー

フォンツ

一瞬の明暗の後、僕の手には《M8ダブルライトセイバー》が握られていた。

真ん中の柄の両端から蒼い光刃が真っ直ぐに伸びている。剣^{セイバー}というより槍^{ランス}に近い。

「ふむ、及第点だな。この調子を維持しろよ」

「はい」

千冬さんから及第点をもらうという珍しい事が起きた。
まあ、いっか。

キンコーンカーンコーン……

「時間だな。今日の授業はここまでのだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

そういわれた一夏は『ですよね…』みたいな顔をした。
ふう、仕方ない。

篤さんも、セシリアさんもないみたいだし、僕が手伝おう。

「一夏、手伝うよ」

「マジか、助かるぜ。真琴」

「友達なんだから、当然だよ」

とりあえず、二人で穴を埋めるために体を動かした。

IS操縦をものにするのは、まだまだ先が長いようだ。

夜。IS学園正面ゲート前。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

そこには小柄な少女が体に不釣り合いなボストンバックを持って立っていた。

「待ってなさいよ……一夏」

そう呟いて少女は微笑んだ。

第八話：飛行と落下と武器（後書き）

次回、パーティーとセカンド幼なじみです（＾－＾）／

主人公IS紹介（前書き）

主人公のISについてです。参考程度にどうぞ

主人公IS紹介

name:アーンヴァル

仕様:第三世代機(?)

アビリティ:レールアクション

武装(現時点):

近接武装:LSフレイザーソード

M8ダブルライトセイバー

M8ライトセイバー

ジレーザ・ロケットハンマー

遠距離武装:

アルヴオPDW11ハンドガン

LC5レーザーライフル

-9サブマシンガン

LC3レーザーライフル(ランチャー)

M49ショットガン

特殊武装:

ココレット(ビット)

ビーハイヴ(誘導ミサイル)

機体コンセプト:高機動凡庸機

近々遠距離の全てに対応する武装を持ったハイレベルにまとまった

機体。一般的なISとは違い、元からこれらの武装が登録されている。

上記の他にも武装があるが、ロックがかかっている。稼働率の上昇と共にロックは解除され、新しい武装が使えるようになる。

白式と並ぶ機動力を持ちながら、ラファール・リヴァイブと同レベルの防御力をもつ。支援機としても有能。

単一仕様能力であるレールアクションは、空間に不可視のレールを敷き、その上を滑るように高速移動する。というもの。レールの敷きかたによっては多角的な移動も可能で、攪乱には持ってこいの能力。

ただし、発動には隙が生じやすく、しかも発動にはシールドエネルギーを大なり小なり消費するデメリットがあるため、乱発は出来ない。

現在は使用不可。

第九話：就任パーティーと中国代表候補生（前書き）

最後の方に鈴登場！

感想お願いします

m ((m

第九話：就任パーティーと中国代表候補生

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！そして香我美くんクラス副代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

ぱん、ぱんぱん。とクラッカーが乱射される。隣に座る一夏は、

『重い…皆の期待が重い』

とか、思ってるんだろうなあ…。

今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、我らが一組のメンバーは全員揃っていた。

各自飲み物を手に盛り上がっている。

「……………」

ちびちびと、手渡されたジュースを飲む。

「見事に真琴の思惑通りになったね」

「真琴…お前を恨むぞ」

「いや、やっぱりイケメンが代表だとみんな頑張るかなあ、って」

「イケメン？どこに居るんだ？」

「ダメだコイツ。早く何とかしないと」

天然でこれか……。

「箒さんとセシリアさん、苦勞するね…」

「…全くだ（ですわ）…む」

ハモっただけで睨み合い。おかしい、今度は龍と虎が見える。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

あれ？さっきから里乃に相づち打ってるのは二組の女子のような気が…。にしても、人数がおかしい。
明らか三十人以上は余裕でいる。

「人気者だな、一夏」

「…本当にそう思うか？」

「ふん」

あらら、箒さんはヤキモチ焼いちゃったみたい。一夏も鈍感だな…。

（お前もな）

「はいはい、新聞部です！話題の新入生、織斑一夏君と香我美真琴君に特別インタビューをしに来ました〜！」

オーと一同盛り上がる。里乃まで…うう。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

受け取って名前を見る。画数多いな…。テストの時、時間ロスしそう。

「ではではズバリ織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーをずいっと一夏に向け、無邪気な子供のように瞳を輝かせている。

新しい遊びを見つけた子供みたいな。

「えーと…」

頭を掻いて一夏はどもる。

まあ、唐突に決まったわけだし…。ごめん、一夏。

「まあ、なんというか、頑張ります」

「えー。もっといいコメント頂戴よ〜。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

えらく前時代的な台詞だね。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的」

貴女が言うか。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくから良いとして」

いや、全然よくないでしょ。

「次、香我美くん！コメント頂戴！」

「あう！？」

え？僕！？

一夏の時と同じようにずっとレコーダーが向けられる。
ちゃんとコメントとしないと捏造されるんだよね……。

「あの、えと、その……副代表になった香我美真琴……です。
み、みんなの期待にそえるよう、が、頑張ります！」

「「「「か「「「「」

「か？」

「「「「可愛いく！！」「「「「」

「え、ええ！？」

え、何？何なの！？

どうしてこうなった！

「織斑もだけど、真琴も大概だな。まあ可愛いのは事実だしな！」

「むきゅーり、里乃…」

里乃に何時ものように肩に腕を回される。

「おおー！熱々だね、二人とも！」

「んなつ！？」

黛先輩がそういうと、里乃は体を離れた。
どうしたんだろ？

「わ、わわわ私はそんなんじゃない！！！」

珍しく里乃が動揺してる。むう、どうしたんだろ？
しばらくして皆が落ち着きを取り戻すと、黛先輩は今度はセシリアさんにボイスレコーダーを向ける。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

とか言いつつ満更でもないでしょセシリアさん。さっきからずっと一夏の横に控えてたし。

「コホン、ではますわたくしがー」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい!」

「いいよ、適当に捏造しとくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななな……!?!」

黛先輩、それ核心ついてる。

ああ、でも一夏は気付いてないんだろうな…。（お前もな）

「何を馬鹿なことを」

一夏、それは援護か？

「え、そうかなー?」

「そ、そうですね! 何をもって馬鹿としているのかしら!?!」

あゝあ、セシリアさん怒らせちゃったよ。

「だ、大体あなたはー」

「はいはい、とりあえず三人ならんで。写真とるから」

「えっ?」

意外そうなセシリアさんの声。
ここは空気を読むか。

「注目の専用機持ちだからねー。あ。握手とかしてるといいかも」

「僕はいいですよ。セシリアさんと一夏で撮ってください」

「ええ、それだとなんかな」

「駄目…ですか？」（上目づかい）

「……」

パシヤッ

「よし、織斑君とセシリアのツーショットで撮るよ！」

黛先輩、貴女ちゃっかり写真とったでしょ。
まあ、いつか。悪用はされ…ないといいな。
目的は達したし、よしとしよう。
セシリアさんに目配せする。

（お膳立てはしたよ）

（…恩に着ますわ）

そんな声がその目線から聞こえた。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「無論、オ。ロン」

「でしたら今すぐ着替えてー」

「時間かかるからダメ。はい、さつさと並ぶ」

黛先輩は一夏とセシリアさんの手を引いて、そのまま握手させる。

「……………」

「？なんだよ？」

「べ、別に、何でもありませんわ」

セシリアさんって、ツンデレ…とかいう性格？

「……………」

「…なんだよ、箒」

「何でもない」

箒さんもツンデレ以下略。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと…」

「74・357です」

「香我美くん、正解っ！」

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。
って、

「何時の間に!？」

「何で全員入ってるんだ？」

恐るべき行動力で一組の全メンバーが撮影の瞬間に一夏とセシリアさんの周りに集結していた。僕も里乃にひっつかまれて集結させられた。

あ、篝さんも入ってる。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

口々にセシリアさんを丸め込むようなことを言っている。

うわあ、一夏競争率すごいな…（あなたもです）

「う、ぐ…」

苦虫を噛み潰してさらにすりつぶしたような顔をするセシリアさんを、クラスメイトはニヤニヤ顔で眺めてる。

黒い、黒いよみんな。

そんなこんなで、パーティーは十時過ぎまで続いた。

「織斑ちゃんと香我美くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「「転校生？」」

朝、席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。

「今の時期にか？」

「珍しいね。転入って確かかなり条件キツイ筈だよな」

今はまだ四月。入学ならまだしも、転入とは…。ここISS学園、転入にはかなり厳しい条件がある。試験は勿論のこと、国の推薦がないとできないようになっている。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「中国の…」

代表候補生といえば。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコットさん。
相も変わらず腰に手を当てている。

妙に似合うから不思議だ。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐ程のことでもあるまい」

「「いつのまに！？」」

一夏の背後に現れたのは篝さんだった。
忍者か。それとも、一夏ある所に篝さんあり、か。

「どんなやつなんだろうな」

「気になるところではあるね」

やはり、代表候補生というだけあって強いんだろうな。
でもまあ、他のクラスだし、あまり関わりはないかな。

「真琴は気になるのかい？」

「まあ、少しは」

「ふっん……」

里乃の質問に素直に答えたら、そのまま黙りこんでしまった。
なんでだろ。

隣を見ると一夏が叱咤されていた。

「今のお前に女子を気にしている暇があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。

何せ、専用機をもっているのはまだクラスでわたくしと一夏さん、真琴さんだけなのですから」

よし、空気を読むか。

一夏が口を開く前に僕は相槌を打った。

「確かに、セシリアさんの方が操作技術は上だろうから。一夏もその方がいいでしょ」

「あ、ああ」

（ナイスですわ、真琴さん！）

（でも放課後は僕も練習するけど、空気は読むよ）

「……………」

セシリアさんとアイコンタクトをとっていると、篝さんに睨まれた。
大丈夫だ、抜かりない。

「まあ、僕も放課後練習しないと。あ、里乃練習付き合ってくれ
る？」

里乃にアイコンタクト。気付いてくれたのか、小さく頷いた。

「ああ、構わないよ。そうだ、算もどうだい？」

「…！わかった、だが私は一夏の方が心配なんだが……」

「それなら織斑のほうに行きな、構わないかい？織斑」

「お、おう……」

よし、ごく自然な流れでフォロー完了！

（恩に着る、真琴）

（You are welcome）

ふう、一仕事終えた。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませ
んと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとみんなが幸せだよー」

セシリアさんを筆頭にクラスメイトが一夏に期待を口にする。そりや、優勝商品が学食デザートの半年フリーパスだからか。気付けば一夏の周りは女子で埋め尽くされた。

「モテモテだねえ、織斑は」

「里乃はいかないの？」

「私はあんまデザートとかに興味ないしな。それに……真琴の近くがいいし」

「ん？」

最後の方がよく聞こえなかった。

「いや、なんでもないんだ。なんでも…アハハ」

「変な里乃…」

何なんだろ、一体…。

疑問に感じながらも、一夏の方をみる。

「織斑くん、頑張ってるねー」

「フリーパスの為にもね！」

「今のところ専用機持つてるクラス代表は一組と四組だから、余裕だよ」

一夏が女子達の声に「おう」とだけ返事をした。

「ーその情報、古いよ」

唐突に、声が響いた。

教室の入り口を見ると、腕を組み、片膝を立ててドアにもたれた女子がいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

そういつてその女子は壁にもたれるのを止め、しゃんと立つ。

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。」

中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。

今日は宣戦布告に来たってわけ」

そう言い放ってその女子はふっと小さく笑った。

第九話・就任パーティーと中国代表候補生（後書き）

このペース、メインヒロインのシャルロットまで後どのくらいかかるのか……

第十話：宣戦布告と昼休み（前書き）

鈴登場！！

第十話：宣戦布告と昼休み

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

宣戦布告に来た、鳳鈴音さんに対し、一夏はそういった。

一夏、僕もそう思ったけど言っちゃダメでしょ。

「んなっ……！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

ほら、怒った。

こっちが素なのかな？

って、あ…。

「おい」

「何よ！？」

スパァン！！

聞き返した凰さんに痛烈な一撃が入った。

――鬼神降臨である。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん…」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、入り口を塞ぐな、邪魔だ」

「す、すみません…」

すぐごとドアから退く凰さん。
千冬さんが苦手なんだろうな…。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

二組へ向かって猛ダッシュ。速いな。

「っていつかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

中国代表候補生か…。どうも一夏の知り合いみたいだな。

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さを！？あの子とはどういう関係でー」

「さて、私は戻るか」

一夏がクラスメイトに集中砲火されている中、里乃はさっと席に戻った。ハヤクミンナキヅイター、鬼神が後ろにー

ズガガガガガン！！

「席に着け、馬鹿ども」

千冬さん、絶対人間辞めてるでしょ。

今の叩き、一秒に二人は叩いてたよ…。

あれか、

ナニカサレタヨウダか。

スパアン！

「あう！？」

「お前、失礼なこと考えていたろっ」

馬鹿な、バレただろう！？やはりナニカサレタヨー

「叩かれないのか？」

「すいません」

そんなこんなで今日もまた、ISの訓練と学習が始まった。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休み、開口一番篤さんとセシリアさんが一夏に文句を言っていた。

「なんでだよ…」

一夏が嘆息する。

実は二人とも、午前中だけで山田先生に注意五回、千冬さんに三回叩かれている。

千冬さんに至っては三回目は一夏がのた打ちまわった威力の『角』を使用した。

二人の末路は語るまでもないだろう…。

大体、千冬さんの前でばーっとするのは自殺行為だ。

ライオンの群れの中に突っ込むようなモノだ。

『私を殺せええええ!!』

と言ってるようなものだ。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

「真琴はどうする？」

「ん、僕も行くよ」

気になるしね。里乃も呼んで、みんなで移動する。この場合のみんな

なはその他クラスメイト数名もプラスされる。

券売機で焼きそばの券を買う。

何気にこの学食は美味しくて、今後の孤児院での献立に役立てようと毎日べつなメニューを買う。あ、食べ終わった後に隠し味とかについて学食のおばちゃんに聞いておかなきゃ。

「待つてたわよ、一夏!」

どーん、と僕らの前に立ちふさがったのは噂の転入生、凰鈴音さんだった。

先頭に立つ一夏は少しきょとした後表情を戻した。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行人の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

一夏の言葉に凰さんは道をあける。

その手にはお盆をもっていて、ラーメンが湯気を立てている。

「「のびるぞ（よ）?」「」

「わ、わかってるわよ!大体、一夏を待つてたんでしょ!何が!何で早くこないのよ!」

凰さんは一夏にエスパーになれとな。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりか。元気にしたか?」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ」

「どついう希望だよそれは…」

仲良さげに話す二人を見て僕の前に立つ箒さんとセシリアさんは…。

ドドドドド…！！

黒いオーラを纏ったスタンドを召喚していた。

一夏、逃げて〜！

そんな事は露知らず、一夏は出てきた日替わり定食を受け取った。

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

空いてるテーブル席を見つけた一夏は凰さんを含めた僕らを促す。それからすぐにテーブルにみんな着く。僕と里乃、それとクラスメイト数名は一夏と凰さんの座るテーブルの隣に。箒さんとセシリアさんは一夏の右隣に座った。凰さんは一夏の左隣。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ。ニユースで見たときびっくりしたじゃない」

あの様子…付き合い長いのかな？
む、この焼きそば、美味い。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやるの！？」

疎外感を感じてか、篝さんとセシリアさんが一夏にそう訊いた。スタンドを出して。

他のクラスメイトも興味津々とばかりに頷いている。

僕と里乃も同様に、焼きそばを食べ終わったのでそちらを向く。

「べべべ別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

「……………」

「……………」

ダメだこの一夏、鈍感過ぎる。

「？何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよ！-」

凰さんが怒る。うん、当然だよな。

凰さんも一夏狙い、っと……。

「幼なじみ……？」

怪訝そうな声でそう言ったのは箒さんだった。

あ、箒さんも一夏の幼なじみなんだから、知らないのは何故だ、って事か。

「あー、えつとだな。箒が引越していったのが小四の終わりだったろ？鈴が転校してきたのは小五の頭。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

箒さんの問いに一夏はそう答えると一口白米を食べた。

「んで、こっちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼なじみで、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

凰さんはじろじろと箒さんを見る。箒さんは負けじと見返す。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

その言葉の裏には、

『一夏をモノにするのは私なんだから！！引っ込んでなさいよ！！』

『やれるものならやってみろ、中華娘』

という意味があるのを僕は感じた。

「ンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代

表候補生、凰鈴音さん？」

「……………誰？」

ザクッ

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

ザクッザクッ

「な、な、なっ……………！？」

言葉に詰まりながらも怒りで顔を赤くしていくセシリアさん。さつきから心を抉るような効果音が響いていたから、相当怒ってるだろうなあ。

「い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

ザクザクザク！！

うわお、言い切った。嫌みなく言い切ったよ。

「へえ、面白い奴だね。あの凰って子」

隣で里乃がにいつと笑う。里乃はああいう、物事をハッキリいう人が好みらしい。友好関係的に。

「……………」

「い、言ってくれますわね……………」

箒さんは無言で箸を止め、セシリアさんは拳を握りしめた。対して凰さんは素知らぬ顔でラーメンをすすする。

「一夏」

不意に、凰さんが一夏に問いかける。

僕らはその様子をジュースを飲みながら見る。

「アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……………」

凰さんはどんぶりを持ってスープを飲む。

豪快だなあ。

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

顔は一夏からそらして、視線だけを一夏に向ける。

おっと凰さん、その言葉にはとんだオマケがついて来ますよ。

「そりや助かー」

ダン！！

篤さんとセシリアさんがテーブルを叩いた勢いのまま立ち上がる。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「あなたは二組でしょう！？敵の施しは受けませんわ」

はい、オマケであるツンデレ×2です。

顔がめっちゃ怖いです。後ろにはスタンドが待機してます。

隣で里乃が、

「バカな…スタンドだと！？」

とか驚いてる。

「あたしは一夏に言ってるの。関係ない人は引っ込んでよ」

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしても頼まれているのだ」

いつの間にそんな事が…。

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて何を図々しいことをー」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

付き合いの長さって関係あるのか？

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！それに何度もうちで食事を

している間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

「うちで食事？それならあたしもそうだけど？」

おっと、凰さんここで爆弾発言！

さらなる修羅場に突入だあっ！！

って僕は何をしてるんだ。

そういえば今更ながらに思う。一夏に惚れてる女性って大体仲が悪い状態から関係始まつてるような…。

「い、一夏っ！どういうことだ！？聞いてないぞ私は！」

「わたくしもですわ！一夏さん、納得のいく説明を要求します！」

思った通りに修羅場突入。しかしそれは次の一夏のセリフで霧散する。

「説明も何も……幼なじみで、よく鈴の実家の中華料理屋にいった関係だ」

その言葉に凰さんはムスツとし、篝さんとセシリアさんはホツとする。

流石一夏、修羅場をたった一言で終わらせた。そこに痺れも憧れもないけど。

「な、何？店なのか？」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自然なことは何一つありませんわね」

里乃と一部を除いたクラスメイトも同じように緊張と緩急を繰り返している。

心臓、大丈夫かな？

「親父さん、元気にしてるか？まあ、あの人こそ病氣と無縁だよな」

「あ……。うん、元氣ーだと思う」

む、家族関係はブロックワードか。

ちなみにウチの義父さんは病氣等とは無縁でかなり元氣である。今でも真剣ぶん回す位元氣だ。

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あそこ去年潰れたぞ」

「そ、そう……なんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

とそこで箒さんが割り込む。

「生憎だが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

箒さん、わざわざ『私と』を強調しなくても……。

「そうですね。クラス対抗戦に向け、特訓が必要ですもの。特にわたくしは専用機持ちですから？ええ、一夏さんの訓練には欠かせない存在なのです」

今度はセシリアさんが『欠かせない存在』を強調して言う。
何この言葉のドッグファイト。

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

スープを飲み干して、鳳さんは片付けに行き、そのまま学食を出て行った。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「一夏さん、わたくし達の有意義な時間も使っているという事実をお忘れなく」

その言葉に一夏はげんなりとした表情で溜め息を吐いた。
がんば、一夏。

第十話：宣戦布告と昼休み（後書き）

小説一巻終わるのに後何話かかるのか…

第十一話：訓練と淡き過去（前書き）

短くなってしまった…

第十一話：訓練と淡き過去

放課後の第三アリーナ。今日も僕は里乃と一緒に、一夏とセシリアさんのペアと離れて訓練することになったんだけど、今日は一夏の方一人増えていた。

「な、なんだその顔は……おかしいか？」

「いや、その、おかしいっていうかー」

「篠ノ之さん！？ど、どうしてここにいますの！？」

そう篝さんだ。しかもIS『打鉄』を展開している。

打鉄……日本産のISで定評のある第二世代型。安定した性能の防御型で、初心者にも扱いやすい。そのことから多くの企業並びに国家、IS学園においても訓練機として一般的に使われている。――以上、教科書からの説明でした。

「どうしても何も、一夏に頼まれたからだ。

それに、近接格闘戦の訓練が足りてないだろう。私の出番だな」

その言葉通り、打鉄のデザインは武者鎧という感じで、実際基本武装も刀を装備している。

篝さんが装備すると、正に戦国の女武将のようだ。

「くっ…。田並さんに訓練機の使用許可が下りた時に警戒しておけば……」

セシリアさん、聞こえてるよ。

「では一夏、始めるとしよう。刀を抜け」

「お、おう」

箒さん、やる気凄いな…邪魔しちゃ悪いし、こっちも離れて始めるかな。

「里乃」

「あいよ」

一夏達から離れた所に立つ。

基本的に僕らが訓練するときにはバトルフィールドを半分に分けて使う。

反対側では一悶着あったのか、セシリアさん・箒さんvs一夏という、地獄が出来ていた。

「あっちもあっちでやってるねえ……んじゃ、こっちも始めようか」

「ん」

里乃は箒さんと同じく打鉄を装備して、刀を展開する。

僕は使い勝手のいい《M8ライトセイバー》を展開する。

アーンヴァルは装備済みだ。

「では」

「尋常に」

「「勝負!!」」

同時に叫ぶと、お互いに相手に向かって飛ぶ。

「っはあ!!」

「せつ!!」

キン!!

刃を当てて交差する。
そのまま上へと飛翔する。

「はあ!!」

「速いつ!?!」

先に飛翔した里乃に追いつく。
スピードなら負けない!
ライトセイバーを横風ぎに振るう!

「っちい!!」

「っふ!!」

敵ISにシールドダメージ。残り516。

流石防御型、硬い。

横風ぎの勢いをそのままに居合いの構え。

瞬時に里乃は体勢を立て直し刀を逆袈裟に振るう！

「っらあー!!」

「疾っ!!」

「疾く風」

イメージは疾風。素早く剣を振り抜く!!

斬!!

「つく…」

「あいたた…」

互いの攻撃はシールドに当たってダメージを与えた。

シールドダメージ増加、残り496。

敵ISシールドダメージ、残り369。

一度距離を開ける。

「全く、真琴は強いね…なんだい、さっきの一撃。一気に二百近くもってかれたよ」

「ISの近接格闘戦は一撃の重さでダメージが決まるからね、習った剣術をそのまま使ったほうが効率が良いんだ。里乃だって十分強いよ、ホント」

里乃は本当に強い。普通にセシリアさんと渡り合えるんじゃないかな？

「ははっ、煽てても何も出やしないよ。さ、続きと行こうか」

「わかった」

さて、戦闘はまだまだこれからだ――！！

「ふう、今日はこれ位にしようか」

「だね。あゝあ、後もうちょいだったのに」

もう日がくれた頃、僕らは訓練を終えた。結果は僕のギリギリ勝利。やっぱり近接格闘で防御型に挑むのはしんどい。硬いし。

里乃が防御力にもの言わせて突っ込んできた時は流石にヤバかった。反対側では地獄から生還（誤字にあらず。あれは死ねる）した一夏がぶっ倒れていた。

「一夏、お疲れ様。先に上がるよ」

「お、おう…」

一夏にねぎらいを言って、僕と里乃は一度解散した。はあ、早くシヤワー浴びたい…。

時間は過ぎて夜、夕食を済ませた僕と里乃は部屋で談笑していた。

「にしても真琴は本当に強い。剣術軽く習ったなんて嘘じゃないかい？」

「ホントに軽くだよ…。軽く千冬さんにボコられただけ」

「うわあ…」

あの時は酷かった。竹刀だったから良かったけど、真剣だったら二

分に一回は首が飛んでた。

「てつきり小さい頃からやってたものだったけど…なる程、織斑先生にシバかれたんなら頷ける」

「あはは…まあ、小さい頃、剣術やってたのかもね」

「かも？」

「あ、何でもない、何でも……」

しまった、空気をよまずに言ってしまった。

「ああ、ごめん。なんかマズいこと聞いたみたいだね…」

「いや、いいよ。気にしてない」

結局、気まずい空気のまま僕らは就寝した。
ああ、気まずい…。

――翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は『クラス対抗戦日程表』。

一回戦の組み合わせは、一組、織斑 一夏対二組、凰鈴音だった。

第十一話：訓練と淡き過去（後書き）

次回、凰鈴音対一夏！！

第十二話：クラス対抗戦と謎の存在（前書き）

ー夏対鈴です（＾－＾）／

第十二話：クラス対抗戦と謎の存在

五月に入って数日。

今日はクラス対抗戦の初日だ。

第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と凰さん。

噂の新生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされている。会場入りできなかつた生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞することになった。

僕や里乃、それと会場に入り損ねたセシリアさんと篤さんは、山田先生に頼んで観察室で試合を見ることにした。

凰さんのIS、その名も『シェンロン甲龍』。セシリアさんのブルー・ティアーズ同様、アンロック・ユニット非固定浮遊部位が特徴的な機体だ。

肩の横に浮いた棘付き装甲の姿をしたそれが、やたらと攻撃的な自己主張をしている。

（にしても、シェンロンで…あの有名バトル漫画を思い出してしまふ…。よし、今度から「こうりゅう」って呼ぼう）

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、一夏と凰さんは空中で向かい合う。

その距離たったの五メートル。

一夏と凰さんが開放回線で言葉を交わしている。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

セシリアさんとの戦闘を見てわかったんだけど、一夏は真剣勝負では絶対に手を抜かない。話を聞いたら手を抜かれるのも嫌らしい。まあ、当然と言えば当然だ。

勝負とは全力でやるものだ。全力で戦うことで初めてそこに意味を持つ。って義父さんが言っていた。

「一応言つとくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。『シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる』」

その言葉は脅しとかではなく、事実だ。

聞いた話だと、IS操縦者に直接ダメージを与える“ためだけ”の武器も存在するらしい。

無論、そんなチート武器は競技規定違反だし、何より命に危険が及ぶ。

だけど、

『殺さない程度にいたぶることは可能』

という現実は、変わらない。

そして、代表候補生クラスはそれが可能なだろう。

僕と一夏がセシリアさんに勝ったのは、本当に奇跡だったのかもしれない。

…そして、奇跡は二回と続くことはない。

『それでは両者、試合を開始して下さい』

ピーッと鳴り響くブザー、試合が、始まった。

ガギンッ！！

という音と共に、肉迫した鳳さんの一撃を一夏が《雪片式型》で防ぐが、吹き飛ばされる。

すぐに一夏は三次元躍動旋回をして、鳳さんを正面に捉えた。
あの技術…確か、

「わたくしの教えた技術ですわ…」

セシリアさんが教えたものか。

「ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。けどー」

鳳さんが手にした巨大な青龍刀をまるでバトンのように回す。両端に刃のついた、ダブルセイバーの流れを汲むそれは縦横無尽に鳳さんの手によって自在に角度を変えながら一夏に斬り込んでいく。高速回転している分、一夏も捌くのに精一杯のようだ。

でも、距離を開くのも危ない気がする。

そう思った途端、一夏が距離を開けようとした瞬間。

「甘いっ！！」

鳳さんの肩のアーマがスライドして開く。

中心の球体が光った瞬間、一夏が見えない何かに『殴り』とばされた。

「『なっ！？』」

何が起こったんだ！？

攻撃を食らった一夏が慌てて体制を戻そうとする。だけど、当然ながら凰さんの攻勢は止むことはない。

「今のはジャブだからね」

にやりと不適な笑みを凰さんが浮かべる。

ジャブのあとは、ストレートと相場が決まっている――！！

ドンッ！！

「ぐあっ！」

目に見えない拳に殴られて、一夏が地表に打ち付けられる。

む、ダメージがいきなり七六食らっている。これは、かなり、まずいな…。

「なんだあれは…？」

先程の攻撃を見た箒さんが呟く。

それに答えたのはセシリアさんだった。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰

で生まれる衝撃それ自体を砲弾化してうちだす、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

「ようするに、空気砲って奴か」

「ーまあ、その解釈で大丈夫ですわ」

里乃の言葉に、セシリアさんはがつくりと肩を落とす。

まあ、ハイテクな兵器がドラ。もんのアイテムと同列に扱われたらこつもなるか…。

（さて、どうなるか…）

モニターに映る一夏は防戦一方だ。

相手の衝撃砲、《龍砲》ら砲身も砲弾も見えない。あげく、衝撃砲を発生させる球体は動きに制限が無い。それ故に死角が小さい。その操縦者である鳳さんの技術も高く、基礎技術の全てを高いレベルで習得している。

どこかで先手を打たないと…この勝負、負けるな。

一夏の握る《雪片式型》を見て、先週の出来事を思い出す。

「『ーー』バリア無効化攻撃』？」「」

聞き返した僕らに、千冬さんは小さく頷いた。

セシリアさんとの戦闘の後、千冬さんの『あと一撃食らっていたら、負けていたのは織斑だった』発言についていろいろ考えていた。

試合時のIS活動記録を見ても、出てきたのはあの攻撃を使った瞬

間、一夏のシールドエネルギーが極端に減ったこと位だ。

思い悩んでいると、僕らの様子を見て呆れた千冬さんが説明しに来てくれた訳である。

「《雪片》の特殊能力が、それだ。相手のバリア残量に関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与える事が出来る。そうすると、どうなる？篠ノ之」

「は、はいっ。ISの絶対防御が発動し、大幅にシールドエネルギーを削ぐことが出来ます」

「その通りだ。私がかつて世界一の座にいたのも、《雪片》のその能力による所が大きい」

さらっと言った千冬さんだが、それはかなり凄いことである。

三年に一度行われるISの世界大会『モンド・グロッソ』。

その第一回大会で優勝したのが、何を隠そう千冬さんなのだ。

初代大会優勝者の師を持つとは、僕はつくづく恵まれていると思う。

「けど、そんな『当たったら即死』の攻撃、デメリットがないほうがいいよね。
つか、まさか」

「流石だな、香我美。お前が気付いた通りだ」

「どういう事だ？真琴」

「詰まるところー《雪片》はその特殊能力を使う際、自身のシールドエネルギーを転化してあの青い刀身を形成している。ってこと」

「あー、なる程」

一夏が合点がいったという表情をする。

「つまり、欠陥機だ」

つて、ええ〜…

「欠陥機！？今、欠陥機って言ったよな！？」

ズドン！！

一夏、教師に対する言葉遣いは気を付けようね…。

「言い方が悪かったな。『ISはそもそも完全していないのだから欠陥もない』。ただ、他の機体よりちょっと攻撃特化になっているだけだ。

大方、拡張領域も埋まっているだろう？」

「そ、それも欠陥だったのか……」

「いや、そうでもないよ一夏。多分だけど、本来拡張領域用に空いている処理を全て《雪片》に振っているとしたら、威力は現行のISの中でトップクラスだよ」

「そうなんですか？織斑先生」

「ああ、香我美の言った通り、《雪片》の攻撃力は現行ISの上を行っている」

（そういえば、織斑先生のISも装備が《雪片》一本だったな…）

それで最強の座についたのだから、どれだけ人間離れしてるのか思
い知らされる。

いろんな意味でぶっ飛んでるな、千冬さん。

「だいたい、お前のような者が、射撃戦闘などできるものか。
一つの事を極める方が、お前には向いているさ。なにせ……私の弟
だ」

それから一夏の訓練はもっぱら近接戦闘と急加速急停止に絞られた。

（あとは気持ちで負けないことだよ、一夏）

普通に考えて、一夏と凰さんの実力差は歴然としている。

その実力差を『何か』で埋めるなら、それは、心だ。
気持ちで負けていないなら、いずれ一筋の光明を差す。

「頑張つてよ、一夏」

そう呟いてモニターを見ると、一夏の目つきが強くなっていた。
一夏の気概に押されたのか、凰さんはなんだか曖昧な表情を浮かべ
た。

「凰の奴…押されたな」

千冬さんがモニターを見てそう言った。

凰さんが青龍刀を構え直す。

一夏は衝撃砲が砲火を吹く前に距離を詰めようと加速姿勢に入った。
あれは…

「『瞬時加速』……!!」

篤さんが声を上げる。先週一週間を費やして一夏が身につけた技能だ。その名の通り、一瞬で加速するその技能は、出しどころさえ間違わなければ代表候補生クラスと渡り合える。

瞬時加速と同時に、『雪片式型』のバリア無効化を展開し、一瞬で鳳さんへと迫る――!!

ズドオオオオンッ……!!

「っ!？」

「なんだ!？」

「一体なんですか!？」

鳳さんに刃が届く寸前、突然大きな衝撃がアリーナ全体を揺らした。鳳さんの衝撃砲ではない。範囲も威力も桁違いだ。

しかもステージ中央からはもくもくと煙が上がっている。どうやらさっきのは『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通入ってきた衝撃波らしい。

「ツチ、山田先生、何が起きた!？」

「アリーナの遮断シールドが破られ、何者かがフィールド侵入!」

キーボードを操作しながら山田先生が千冬さんに答える。その間に一夏と鳳さんに先程の何かが攻撃を放つ。

ISにその攻撃を解析させると、嫌な答えが出てきた。

「ビーム兵器…、セシリアさんの《スターライトmk?》より出力が上か」

「なんですって!？」

セシリアさんが驚嘆の声を上げる。

あれは一撃食うだけでもヤバイぞ…

そんな馬鹿げた威力のビームが煙を晴らすかのようにビームを連射する。一夏と凰さんがそれをかわすと、その射手たるISがふわりと浮かんできた。

「なんなんだ…あれは」

それは、異形のISだった。

第十二話：クラス対抗戦と謎の存在（後書き）

次回、VS無人機戦です！！

第十三話：灰被りの巨砲（前書き）

この話して小説第一巻は終了です。

第十三話：灰被りの巨砲

「なんなんだ…あれは」

現れた異形のIS、深い灰色をしたそのISは手が異常に長く、つま先よりも下までのびている。しかも、首がない。肩と頭が一体化しているような形をしている。

何より特異なのは、その『全身装甲』だった。

通常のISは部分的にしか装甲を形成しない。

何故なら必要がないからだ。

防御はほとんどシールドエネルギーによって行われている。

それ故、見た目の装甲というのはあまり意味がない。

勿論、防御特化型ISで物理シールドを搭載しているものもあるけど、それでも肌が一ミリも露出していないISというのは聞いたことがない。

そしてその巨体も、通常のISではないことを物語っている。

腕を含めた全長は二メートルを超え、そのアンバランスな姿勢を制御するためののか、全身にスラストアークがついている。頭部には剥き出しのセンサーレンズがバラバラに並び、腕には先のビーム砲口が左右合計四つある。

「……？」

そんなISを見て、ふと何かが引っかかる。

そんな考えを吹き飛ばすように山田先生が声を上げた。

「織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

どうやら通信で一夏達に呼びかけたようだ。
心なしか、いつもより威厳がある。

その山田先生の言葉に一夏が返した答えは、

『ーいや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます』

否定だった。

まあ、正解といえば正解だ。

あのISは遮断シールドを軽々突破してきた。ということは今あそこで誰かがあれの相手をしなければ、観客席にいる人間が漏れなく蒸発する可能性がある。

「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったらー」

ぶつり、と言葉の途中で通信が切れる。

おそらく敵ISが攻撃をしかけたからだろう。

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！？」

山田先生、ISのプライベート・チャンネルは声に出す必要ありませんよ…。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

そういつて千冬さんが入れたのは…塩だった。

「…あの、織斑先生、それ塩ですけど……」

「……………」

ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を容器に戻す。千冬さん、やっぱり一夏が心配なんだ。にしても、何で塩があるの？

「何故塩があるんだ」

「さ、さあ…？でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど…」

「……………」

「あつ！ヤッパリ弟さんのことが心配なんですね！？だからそんなミスをー」

「……………」

山田先生もう止めて！それ以上は千冬の怒りを買っただけだ！！

「あ、あのですねー」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？あ、あのそれ塩が入ってるやつじゃ…」

「どうぞ」

有無を言わさぬ千冬さんの声に、山田先生はコーヒー（微塩）を受け取り、

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔だ…真性の悪魔がいる。

山田先生…尊い人を失った…。（死んでない）

「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、——これを見る」

ブック型端末の画面を数回叩いて、僕らに見えるように画面を向ける。

画面に映っているのは、ここ第二アリーナの現在のステータスだった。

「遮断シールドがレベル4に設定……挙げ句、扉の全ロック。あのISの仕業、ですか？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうことも出来ない」

落ち着いたように話す千冬さんだけど、その手は苛立ちを隠さず、せわしなく画面を叩く。

「先生、政府に助勢は？」

「無論やっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

そう言いながら、益々苛立つ千冬さんは眉をぴくりと動かす。その様子を見たセシリアさんは、頭を押さえてベンチに座った。

「はあ…。結局、待っていることしかできないんですね」

「何、どちらにしてもお前は突入部隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!？」

千冬さんとセシリアさんの会話をよそに、モニターに映る現在の戦闘の様子を見る。

(あのISの動き……妙だな)

敵ISの動きを見ると、所々違和感を感じる。

そう、まるで予め組み込まれたプログラムにそうように動いている。『機械的』に。人間だったらもう少し動きに『やわらかさ』がある。

そんな事を考えていると、セシリアさんの次の言葉に意識が傾いた。

「あら？篠ノ之さんはどこへ……」

「っ！？」

振り向くと、先程までいた篝さんが見当たらない。まさか……！

「織斑先生っ！！」

「ツチ、面倒な事を…篠ノ之を連れ戻してこい、すぐにだ！！」

「はい！！セシリアさん、里乃、行こう！！」

「え、どこへですか！？」

セシリアさんの言葉に僕は直ぐに答える。

「里乃は中継室へ！！僕とセシリアさんはピットへ！！」

「了解だよ、真琴！！」

「ああもお、仕方ありませんわね！！」

僕らは直ぐに観察室を出て、走り出した。
間に合ってよー！！

「一夏あっ!」

ピットに向かう途中、アリーナ全体に響いた声を聞いて内心舌をならす。

（間に合わなかったか…）

あのISを観察してわかったことがある。

『機械的な動き』をしていること。

そしてもう一つ。それは、『対象の攻撃意識の有無で行動する』こと。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」

今の声で恐らく敵のISは篝さんに気付いた。

「一夏!」

プライベート・チャネルを開いて、一夏を呼ぶ。

『真琴か!?』

「急いで中継室を守って!! 篝さんと里乃が危ない!!」

『わかった!!』

通信を即座に切る。

「真琴さん、一夏さんは大丈夫ですよ?」

「『ああ、大丈夫だ』」

「え?」

「一夏なら、大丈夫だ。さっさと行くぞ、セシリア」

「え?ええ?」

『俺』はピットへと足を更に急いだ。

side 織斑一夏

「男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」

その声を聞いて、俺は中継室にいる筈を見る。

肩で息をしていて、表情なんて怒っているような焦ってるような不思議な様相をしていた。

『一夏!』

突然、真琴から通信が入る。

「真琴!!」

『急いで中継室を守って!! 篝さんと里乃が危ない!!』

「わかった!!」

突然のことなのに、不思議と俺はその言葉に素直に頷けた。

「……………」

「――まずい!

敵ISが中継室へと砲口のついた腕を向けた。

「鈴、やれ!!」

「わ、わかったわよ!」

すぐにさつき鈴に言った作戦を敢行する。

最大出力の衝撃砲を構えた鈴の射線上に躍り出る。

「ちょ、ちよつと馬鹿! 何してんのよ!?! ときなさいよ!」

「いいから撃て!!」

「ああもう!! どうなっても知らないわよ!」

衝撃砲のエネルギーを受けると同時に『瞬時加速』を作動。

「――オオオッ!!」

更に、バリア無効化攻撃、名を【零落白夜】を展開する。
白いエネルギー刃が《雪片式型》から現れる。

そのまま、圧倒的なスピードで敵ISへと突っ込む――！！

（俺は…千冬姉を、箒を、鈴を、関わる人全てを――守る！）

斬ッッ！！！！

必殺の一撃は敵ISの右腕を切り落とした。

だが、その反撃で左拳をモロに受け、さらに接触面から熱源反応。
ゼロ距離でのビームをぶち込むらしい。

「――夏っ！」「――」

箒と鈴の叫び。

――大丈夫だって、鈴。考えてがあるって言っただろ？

「……狙いは？」

俺は視線をずらして敵ISの背後の観客席を見る。

『寸分違わず』

『完璧ですわ！！』

刹那、幾つもの閃光が敵ISを撃ち抜いた。

s i d e o u t .

『狙いは?』

その言葉が聞こえた瞬間、僕とセシリアさんは答えた。

「寸分違わず」

「完璧ですわ!!」

言い切ると同時に一斉射撃。

セシリアさんはブルー・ティアーズの四機同時狙撃。

僕はブルー・ティアーズと同じビット（一夏曰わくこの方が呼びやすい）であるココレットと、LC3レーザーライフルを一斉に発射する。

それら全ての攻撃が敵ISを撃ち抜いた。

そう、『遮断シールドはさっきの攻撃で破壊した』。

ボンッ!!と小さな爆発を起こして、敵ISが地上に落下する。

シールドバリアが無い状態で僕らのレーザー攻撃を一斉に浴びれば、ひとたまりもないだろう。

（人には予測できて機械には出来ない。
伊達に発想の自由さが長所じゃない、ってね）

そう。人間は狡猾に裏をかく。機械には出来ない発想で。

「ギリギリのタイミングでしたわ」

『何、セシリアと真琴ならできると思ってたさ』

全く確信じみた感じで一夏が答える。

あらら、セシリアさん顔赤くなっちゃったよ。

僕は一夏の所に向かう。

「お疲れ様、一夏」

「ああ、何にしてもこれで終わー」

――敵ISの再起動を確認！警告！ロックされています！

「まだ動くのかよ!?!」

残った左腕。それを最大出力形態に変形したISが地上から僕らを狙っていた。

「一夏っ!?!」

「応っ!?!」

次の瞬間、迫り来るビームを僕が防ぐ。

ガガガガ！！

「今だ！！」

ビームが当たったと同時に、一夏が射線上から飛び出て敵ISへと斬り込む。

斬！！

その一撃をもって、漸く敵ISは沈黙した。

夕方、あの後すぐに倒れて保健室に運ばれた一夏にお見舞いをした僕と里乃は、二人で寮への道を歩いていた。

「今日はお疲れさん、真琴」

「ホントにね… 篤さんが居ないって気付いた時はホントに焦った」

あの時はかなり焦ったなあ… 思わず口調も戻ったし。

「ごめんな、私がもう少し早くついてれば…」

「いや、こっちこそゴメン。里乃のこと危険な目にあわせちゃって」

「そんなことないって。真琴が何とかしてくれるって信じてたし」

「むう…」

そう真つ直ぐ言われると照れるな…

同時刻、IS学園地下。

「どうだった、例のISは」

強化ガラス越しに今日一夏達によって撃破されたISを見ながら、千冬は傍らにいる真耶に問う。

「はい。あれは――無人機です」

「織斑と香我美の憶測が当たったか…」

「はい…。どのような方法で動いていたかは不明です。織斑くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れいました。修復は、無理かと」

「コアの方は？」

「…それが、登録されていないコアでした」

「そうか。やはり、な…」

そう呟いて千冬は目を細める。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだーな」

強化ガラス越しに無人ISを見る千冬の顔は、まるで戦士のようだった。

「ふいー、食った食った」

「相変わらずよくたべるね」

僕の作った料理で夕食を取ったあと、僕らは適当に寛いでいた。

「いやあ、真琴のつくる料理はホントうまいねえ」

「そう言って貰えると、嬉しいよ」

自分の作った料理が美味しいと言われるのは純粹に嬉しい。

「ん？どうかした、里乃」

「な、なんでもないよ！？」

どうしたんだろ、ぽけっとこっち見て。
少し気になった所で、ノックがした。

「あのー、田並さんと香我美くん、いますか？」

この声、山田先生か。
がちやりとドアを開けて入ってくる。
やっぱり、山田先生か。

「どうかしたんですか、先生」

「あ、はい、お引っ越しです」

「「はい？」」

引っ越し？誰が？

引っ越しセンターのダンボールなんてないよ？

「…先生、主語を入れてくんなきゃわかんないよ」

「あ、す、すいません！」

里乃の言葉に山田先生は頭をさげる。いや、そんな謝らなくても…。

「えっと、お引越しするのは田並さんです。香我美くんの方だけ何とか調整が付いたので、今日から同居しなくてすみますよ」

つまり一夏は篤さんとまだ一緒、と。ガンバ篤さん。チャンスはある。

「えっと、それじゃあ私も手伝うので、すぐにやつちやいましょう」

「うええ？今からですか？」

里乃がベッドの上で口を三角にして愚痴る。

「はい。もう部屋の方が空いてるので。空き部屋を作らないようにしないとイケないんです」

まあ大方、空き部屋にイタズラされないようにとかだろう。
ここじゃ、そんなことないと思うけど。

「はあ、しゃあないなあ。真琴と一緒に部屋、結構楽しいのにな
…」

頭を掻きながら里乃が立ち上がる。

「まあ、たまに遊びに来てよ。お茶くらいは出すよ」

「遊びに来てオッケーなの！？」

「うん、里乃と喋るの楽しいし」

そついうと、里乃は俯いちゃった。何故。

「……よっしゃあ！先生、すぐにやつちやいましょうやあ！」

「は、はいっ！」

突然復帰した里乃にせかされて山田先生がびつくりする。

「遊びに…オッケー…ふ、ふふふ」

よく聞こえないけどそんな事を呟きながら作業を開始する里乃。

そこから作業はたったの三十分で終わった。

「うん…」

同居人が居なくなった部屋で、一人唸る。

なんというか、話し相手がいないというのは寂しいものがある。

「…仕方ない、寝よう」

こうしてても仕方ないし、今日はもう寝よう。
疲れとか溜まってるし。

久しぶりに一人で寝るのは、なんだか少し寂しく感じた。

第十三話：灰被りの巨砲（後書き）

次回は、真琴の休みの日です（＾－＾）／

第十四話：香我美真琴の休日（前書き）

この話で何人が神姫を出してみました。
わかるかな…？

第十四話：香我美真琴の休日

六月初頭、日曜日。

僕は久々に家である、『青柳の里』に帰ってきた。

「くくくくくく」

現在僕は子供達に昼ご飯を作っている所だ。

メニューはカレー。結構な人数がいるので、コレが一番手取り早い。

「おゝおゝ、帰ってきて早々、ガキ達に飯つくるたあ殊勝だな」

キッチンの入り口からこつちを覗き込んできたのは、青柳の里の院長であり、僕の義父でもある、『香我美 栄治』だ。

「義父さん…見る位なら手伝つてよ」

「じゃあねえなあ…ガキ共の食う量はハンパねえしな」

そういつつ頭を掻きながら僕の隣に立って野菜を刻み始める。

短く切り上げた髪と紺色の甚平とあいまって、一流の料理人にも見える。実際はくくたらなんだけど。

「真琴兄いゝ！！」

「おっ、と」

カレーをかき混ぜていると、足元に明るい緑髪の女の子が突撃してきた。

「真緒」

「にゃゝ、今日のご飯は何なのだゝ？」

名前を呼ぶと猫のような返事を返したこの子は、『唯崎 真緒』。猫のような吊り目に、口元は常にゐな感じ。更には猫好きで、猫のように気まmana。正に猫の子。

「今日はカレーだよ」

「にゃあゝ…ゝ」

頭を撫でてやると気持ち良さげに声を上げる。
前世は確実に猫だな。

「あゝ！真緒ったらこんな所にいた！！」

「にゃ！？」

新たにキッチンに現れたのは、真緒と同じ位の身長の高黒髪の女の子。

「凜、どうしたの？」

「真琴兄さん、どうしたもこうしたも真緒が部屋を散らかしたままどっかに消えたんです！やっと見つけた…」

「まったく、またかよ…」

義父さんが食器を洗いながら溜め息を吐く。
さっきの通り、真緒は正に猫のような子だ。故にやるだけやったら
放置というか散らかしっぱなしで。

それを毎度注意するのが、姉である『唯崎 凜』。この子は妹が猫
っぽいのに対し、犬っぽい。

何事にも一生懸命で、しっかり者である。

姉といい、妹と言い、ホントに小学生か？

「おい、真緒。今から部屋かたしてこい。じゃねえと飯抜きにすっ
かな」

「真琴兄いのご飯が…食べれない？」

……………今すぐマッハで高速で音速で光速で片付けてくるにやあゝ

！！」

義父さんの言葉に真緒はすぐにキッチンから消えた。義妹よ、光の
速さは流石に無理だろう…

「まったくもう、真緒ったら。私が注意したらダメな癖に…」

「久々の真琴の飯だ。楽しみなんだろうよ」

凜がぶんすかと怒ると義父さんがかっかつと笑った。

この感じ、久しぶりだなあ…。IS学園に入ってからまだ二ヶ月しか経
ってないのに、僕はそう感じた。

昼食をみんなと食べた後、適当に座敷で座って寛いでいると、隣に誰かが座った。

「……瑠璃？」

隣をみると淡い銀髪の子がこちらを見ていた。

『吹雪 瑠璃』。青柳の里で僕の次ぐ最古参の子。淡い銀髪を切りそろえ、いつも地味な色の服をきている。僕が長男なら瑠璃は長女の立ち位置にいる。

クールな感じとは裏腹に世話好きで家族思いの子だ。

「お久しぶりですね、義兄さん」

「そうだね。って言っても二ヶ月ちよつとだけど」

「人は一年を短く感じ、一日を長く感じる生き物ですよ」

そう言つて瑠璃は中庭で遊ぶ義弟、義妹達を見る。ここは孤児院だ。故にここに来るのは決まつて親に捨てられた子供だ。僕の場合はよくわからないけど、隣に座る瑠璃も、中庭で遊ぶみんなも、親に捨てられた子供だ。中にはまだ赤ん坊の時にここに置いてかれた子もいる。

「ふふ……」

「ん？」

唐突に瑠璃が微笑んだ。口元に手を当てて、中庭を見ながら。

「いえ…なんだか、この穏やかな時間が楽しくて」

「うん、そうだね…こんな穏やかな時間は、見てるだけで楽しいよ」

「……私は、義兄さんの隣にただで楽しいです……」

「ん？何？」

「い、いえ！何でもございませぬ！！」

急に顔を赤らめて…風邪か？

「あー！！瑠璃義姉さんが真琴義兄さんといちゃついでるゝ！！」

「「え？」」

唐突に中庭からこつちを指差して義妹の一人、『浅見 藍音』が叫んだ。

「あ、藍音！？い、いいいちゃついでるなんてそんな…」

瑠璃の言葉など露知らず。中庭で遊んでいたガキンちょ勢揃い。義兄さんは義妹達が元気育って嬉しいです。

「瑠璃義姉さん、抜け駆けはダメなのです！！」

「麗音！？」

「瑠璃義姉えばかりズルいよね」

「ルノまで!？」

「こうなったら…」

「おしおきにやゝ!！」

「きゃあー!！」

義妹義弟の突撃に瑠璃が飲み込まれる。
瑠璃、ガンバ!!

「ふいゝ、今日は楽しかったな…」

時刻は六時過ぎ。僕は帰ってきた寮の自室でベッドに寝ころんでいた。

結局あのあと、子供達にもみくちやにされた瑠璃を助け出し、そのままみんなと遊んだ。

相変わらず元気がよくて、疲れ知らずなやつらだった。

「あ、そういえば」

携帯を開いてカレンダーを見る。

そろそろ学年別トーナメントが行われるんだった。

全員強制参加の、一週間に及ぶISのトーナメント戦。

一年は先天的才能評価、二年は成長能力評価、そして三年は実戦能力評価をつける。

特に三年は大掛かりで、企業からのスカウトマンはもちろん、各国のお偉方が見にくるらしい。

なんというか、桁外れな学園に来たものだ…。

「まあ、何にせよがんばるか。専用機まで用意してもらつて一回戦負けとか笑えないし」

先月のクラス対抗戦は、あの無人ISのせいで中止。

そのことに関する箱口令まで敷かれた。

直接戦闘をした、僕、一夏、セシリアさん、鈴さん（一夏の友達なら名前でも別にいい。鈴談）に至っては、誓約書まで書かされた。

「無人機、か…」

あんな技術、今のところどの企業も発表していない。
ま、

「考えても仕方ない、か…」

とりあえず夕飯を食べよう。

今日のメニューは何かな…。

第十四話：香我美真琴の休日（後書き）

次回、噂と転校生！！

やっと…あの二人が登場！！かも？

第十五話：二人の転校生と着替え（前書き）

やっと…やっとシャルル出せたー！！
里乃はここから空気になるます。

第十五話：二人の転校生と着替え

月曜日の朝。今日も今日とていつも通りの日常が来る。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

そう思っていた時期が僕にもありました…。

「「ええええええっ！？」「」」

いきなりの転校生紹介にクラス中が湧く。

そりゃそうだよね…。いつも通りHRやって授業、な所に山田先生の爆弾投下。

湧かない方がおかしいよね。

（というか、何故このクラスに…？普通は分散させる筈…）

疑問に思っていると、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきが止まる。それもそうだ。

だって、そのうちの一人が…男子だったから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、デュノア君（でいいのか？）がにこやかな顔でそう告げて一礼する。

僕を含めてクラス全員、ザ・ールド。

「お、男…？」

ザ・ールドから解放された誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

人なつっこそうな顔に、礼儀正しい立ち振る舞いに中性的な顔立ち。髪は濃い金髪で、首の後ろで束ねている。一言で例えるなら、『貴公子』。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああー！！」

皆さんは、ソニックウェーブをご存知だろうか？書いてそのまま音速の波。

それが今、僕の目の前で起こった。

誰だ、高速の壁こえた人。

「男子！三人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！」

「香我美君と同じ美形！！守ってあげたくなる系の！！」

「地球に生まれて良かった～～！！」

そこまでいくか。

隣のクラスや他の学年がまだ誰も覗きに来ないのは、HR中だからだろう。教員の皆さん、お疲れ様です。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬さんがボヤク。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

山田先生の声に、全員がもう一人の転校生を見る。

銀の長髪。そして目を引くのが左目の眼帯。医療用のものではなく、戦争映画かマフィア系の映画でしかみたことがない黒い眼帯。

開いている方の右目は赤いが、そこに宿る温度は絶対零度に等しい。印象は確実に『軍人』。その身長は小さいが、体から放つ冷たい気配がそう見させない。

「……………」

当の本人は口を開かず、腕組みをした状態で教室の女子達をくだらなそうに見る。しかしそれは一瞬で、今は視線を千冬さんに向けていた。

……なんか、妙な感じだな。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬さんの言に敬礼する転校生にクラス一同、

（。□。）こんな感じになる。

敬礼…軍人でイメージはあながち間違いないみたいね。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑と呼べ」

「了解しました」

そう答える転校生は正に軍人のように背筋を伸ばす。

にしても『教官』、か…。千冬さんは一体何をやってきたんだ？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスメイト全員沈黙。続く言葉を待っているみたいだけど、ボーデヴィツヒさんは口を閉ざしてしまった。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

ボーデヴィツヒさんの返事に山田先生が泣きそうな顔になった。
哀れな…後で飲み物奢ろう。

そんなことを考えていると、一夏とボーデヴィッヒさんの目があっていた。

「！貴様がー」

ボーデヴィッヒさんが一夏へと近づく。
っ！

ガタッ！！

バシン！！

「……貴様」

「生憎、友達が殴られるのを黙って見るほど僕は温厚じゃないんでね」

一夏が平手打ちを食らう寸での所でボーデヴィッヒさんの手を掴んで止める。

「…私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

一夏を見ながらボーデヴィッヒさんはそう言い放つ。

「ふん……」

僕が掴んだ手を離すと、空いている席に座って、腕組みをして目を閉じ、微動だにしくなる。

「……………」

あの、目。一体、何が…。

「あー…ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！！」

手を二回叩いて千冬さんが行動を促す。

腑に落ちないことが幾つかあるけど、そうも言ってられない。

このままクラスにいれば女子と一緒に着替える事になる。それはマズい。かなりマズい。

急いだ方がいいな…。確か今日は第二アリーナ更衣室が空いてる筈。

「おい織斑、香我美。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

つと、そうだった。

「君が織斑君？はじめまして、僕はー」

「ああ、自己紹介は後！ね、一夏」

「ああ。とにかく移動が先だ。急ぐぞ！」

「了解！！さ、行こう」

説明すると同時に行動。僕はデュノア君の手を取るとそのまま教室を出る。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習の度にこんな感じだから、早めに慣れてね」

「う、うん……」

？さっきとは違って落ち着かなそうだ。

「どうかした？」

「い、いや、何でもないよ！？」

「そう？」

とりあえず階段を下りて一階へ。速度を落とさず走る。何故かって？

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君と香我美君と一緒に！」

「「ちい、邪気が来たか！！」」

HRの終了、それ即ち女子の波の到来を意味する。各学年各クラスから情報先取の尖兵が駆けだしてくる。

波に飲まれれば最後、質問攻めの後に遅刻、そして魔王千冬さんの特別カリキュラム（調教）が待っている。

転校初日にデュノア君にそんな目にあわせるわけにはいかない……！！

「いた！！こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！！」

つく、前門の虎後門の狼か……！！

「織斑君の黒髪と香我美君の淡い金髪もいいけど、濃い金髪っていいわね」

「しかも瞳はエメラルド!!」

「きゃああ!!見て!香我美君とデュノア君!手!手繋いでる!」

「日本に生まれて良かった!ありがとうお母さん!今年の母の日は河原の花以外のをあげるね!!」

いや、今年以外もちゃんとしたのをプレゼントしてあげて。

「な、なに?何でみんな騒いでるの?」

状況が飲み込めないのか、デュノア君は困惑顔で訊いてくる。

「そりゃ男子が俺たちだからだろ」

「だね……」

「……?」

何故「意味が分からない」って顔をするんだ?

「珍しいんだろうね。IS操縦できる男って、今のところ僕達しかないんだし」

「あっ!ーああ、うん。そうだね」

「そんなことより、早く行くぞ。そろそろやべえ」

「そうだね」

時間も迫ってる。今はこの包囲網を突破するのが最優先だ！！

「一夏！！」

「応よ！！」

「「いざ、参る！！」」

デュノア君の手を引いて空いていた廊下を一夏を前に疾駆する。

「しかしまあ助かったよ」

「何が？」

「女子だけの学園に男二人はつらいからね。いろんなことに気を配らなくちゃいけないし。一人でも多く男がいてくれるのは心強いよ」

「全く同意見だ」

「そうなの？」

「「え？」」

デュノア君はそうではないと？うゝむ、良く分かんないな。

「まあ、何にせよこれからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼

んでくれ」

「僕は香我美真琴。真琴で構わないよ」

「うん。よろしく一夏、真琴。僕のことシャルルでいいよ」

「ん、わかった、シャルル」

「よろしくな、シャルル」

さて、何とか校舎外に出た。
まだ油断は出来ないな。

「よし、到着!!」

いつも通りの空気が抜ける音を響かせてドアが開く。
第二アリーナ更衣室到着。ミッションコンプリート…。

「って一夏、時間ヤバイよ!!」

「マジか!?!すぐに着替えちまおうぜ」

時計を見るとかなりギリギリだった。

というかあのISスーツってかなり着づらいんだよなあ。

早急に着替えを済ませる為に僕は制服とシャツを一気に脱ぎ捨てる。
一夏も似たような感じた。

「わあっ!？」

「「?」」

どうしたんだろ？

「どうしたの？早く着替えないと、ヤバイよ？」

「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、その、あっち向いてて…ね？」

「?いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気は無いが…ってシャルルはガン見だな」

「み、見てない!別に見てないよ!？」

両手を突き出して、慌てて顔を床に向けるシャルル。なんでこんな反応初々しいんだ?不思議な人だなあ。

「まあ、本当に急いだ方がいいよ。初日から遅刻はシャレになんない所かあの人はシャレにしないから」

というかシャレを聞くほどの余裕がある千冬さんが想像できない。

「……………」

なんだろう、視線を感じる。

「シャルル?どうかした？」

「な、何かな？」

気になって視線を向けると、シャルルはこっちに向けていた顔をそらして、ISスーツのジッパーを上げた。

「着替えるの早いね。なんかコツとかあるの？」

「い、いや、別に……って真琴はまだ着てないの？」

僕はちょうどISスーツのズボンをはいた所で止まっている。上半身？裸だよ。

「これ着る時に裸にならなくちゃいけないのが面倒なんだよね。引つかかって」

「ひ、引つかかって？」

「真琴って引つかかるようなものあったっけ？」

「一夏！！そのネタはもういいよ！！」

「いや、マジで真琴は男か疑わしい時がたまにあるからな」

「ううゝ……」

「……………」

気のせいか、シャルルが顔を赤くしてる。変なの。

「よいしょ、と。……よし。一夏、行ける？」

「ああ」

「んじゃ、行こっか」

「う、うん」

着替え終わって更衣室を出る。

雑談を交わしながらグラウンドへと向かった。

第十五話：二人の転校生と着替え（後書き）

次回、山田先生との模擬戦！

第十六話：模擬戦（前書き）

就活忙しい……

第十六話：模擬戦

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい!!」

一組と二組の合同実習なので人数はいつもの倍。出てくる返事も妙に気合いが入っていた。

「くっつ…何かというとすぐに人の頭を…」

「…一夏のせい一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

少し前にあった一悶着のせいで千冬さんに頭を叩かれたセシリアさんと鈴さんは涙目になりながら頭を押さえている。
というか鈴さん、目に光がないと怖いです。

あれか、前に真緒が言ってたヤンデレって奴か？

「今日は戦闘を実演してもらおう。――凰！オルコット！」

「なぜ私まで!?!」

諦めるが吉だよ、セシリアさん。千冬さんに理屈や道理、果ては摂理は通用しない。

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出る」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

このままじゃ操縦にまで影響しかねないな…よし。

「二人共」

『なに?』

『なんですか?』

プライベート・チャネルで二人を呼ぶ。

「頑張れば、一夏にいい印象与えられるかもしれないよ?」

『……………!』

途端に二人の顔が変わる。うわあ、食いつき良いなあ…。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるにはいい機会よね!専用機持ちの!」

会話に「一夏」を出すだけでこの変わり様。一夏、恐るべし。

「それで、相手はどちらに?わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが(ここで鈴さんを潰せば…)」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ(ここでセシリアを消せば…)」

二人共、言葉の裏がただ漏れです。
ていうか物騒だよ。

「慌てるなバカども。対戦相手はー」

キイイン……。

嫌な予感。とりあえず里乃とシャルルの手を引いて待避。

「え？どうしたんだい、真琴」

「急に、どどどうしたの？」

「上」

「え？」

「あああーっ！ど、どいてくださーい！」
一夏以外が全員避けると同時、謎の飛行物体・山田先生が一夏に衝
突した。

「のおおおー！？」

そのまま一緒に吹き飛んで、数メートル転がってから止まった。

「……………」

「ね？」

「助かったよ、真琴……」

「どういたしまして」

さて、一夏の方は……あ。

「あ、あのう、織斑くん……ひゃん！」

「……え？」

状況を簡潔かつ分かり易く説明しよう。

一夏が山田先生に覆い被さって胸触ってる。

諸君ならお気づきだろう。この光景をもし、一夏に思い馳せている女性が見ているとしたら……？

答えは簡単です。

バスン！！

「……ハッ！？」

判決。

「ホホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……………」

死刑。

因みに今の一撃はセシリアさん《スターライトmk?》である。

というか、今まで以上のスピードでIS起動しなかったか？

「……………」

ガシーンと鈴さんが近接武装《双天牙月》を連結する。確かあの状態って投擲可能だったはず……つか、鈴さん。無言っぽいけど、

「…イチカイチカイチカイチカイチカイチカイチカ…」

って聞こえてるから！？怖いから！！

「…………ふん！！！」

「うおおおっ！？」

ためらいなく首狙いで投げたよ…あれか、生首にして抱くのか。――
夏を誠くんにするのか。

すんでのところで一夏はかわすけど、勢い余って倒れてしまう。
そこに《双天牙月》がブーメランと同じように返ってくる。

「はっ！」

ドンッドンッ！！

短く二発、銃声が響く。

弾丸は的確に《双天牙月》に当たり、軌道を変える。

銃を撃ったのは、山田先生だ。

両手でマウントしているのは、五十一口径アサルトライフル《レッ

ドバレット》。アメリカ・クラウドス社製実弾銃器で、実用性、信頼性の高さから多くの国で採用されているメジャー・モデル。

にしても山田先生、仰向けの体勢を僅かに起こした状態でブレなく撃ち落とすとは…凄いです。

「……………」

セシリアさんと鈴さんを含んだ生徒全員、啞然。あの無表情のボー・デヴィツヒさんですら一瞬眉をぴくりと動かした。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……………」

体を起こして山田先生が恥ずかしげに答える。

うゝむ、山田先生に射撃について教えてもらおうかな…。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの、二対一で…………？」

「いや、さすがにそれは……………」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

千冬さん、何故ちらつと僕を見たんですか。まさかやらせるつもりですか？

千冬の言葉にセシリアさんと鈴さんが再び闘志を漲らせる。

ん…慢心、か？

「では、はじめ…！」

号令と同時にセシリアさんと鈴さんが飛翔する。それを確認してから山田先生も空中へと飛んだ。

「手加減はしませんわ…！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

嘘つけ、鈴さん。あれは本気でしよう。

「い、行きます！」

山田先生、目が変わったな…。

セシリアさんと鈴さんが先制攻撃をするが、あっさりと山田先生は回避した。

「さて、今の間に…：…そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつはい」

空中の戦闘を見ながらシャルルが説明を開始する。それを横に聞きつつ戦闘を見る。

山田先生の使用するIS『ラファール・リヴァイブ』。直訳で『再誕の疾風』。第二世代機でありながらスペックは総じて高い。それに武装を入れるスペースが大きく、戦術に応用が利く。

山田先生の武装は、銃器メインの遠距離タイプか。

てか、セシリアさんと鈴さん、良いように誘導されてるな……

「…終わるぞ」

千冬さんの言葉のすぐ、誘導されたセシリアさんが鈴さんと激突、そこに山田先生がグレネードを投擲。

爆発の後、煙の中から二人が地面に落下した。

「くっ、うつ……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……。何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわー！」

ああ、不毛な争いが繰り広げられてる……。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できたらう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんがそう言う。

「ふむ、時間が少し余ったな……。よし香我美」

「嫌です」

「だが断る」

「……………」

ダメだ、千冬さんに勝てない……。

「香我美、山田先生と戦え」

いや、死ねと申すか。

でも拒否権なんてないしな…

「はあ…はい、わかりました」

「五分で勝て」

「無理です!!」

なんて無茶を仰る…。

仕方ない、やるか。

皆から離れてアーンヴァルを起動する。

（行くよ、アーンヴァル）

「…お手柔らかにお願いします」

起動してすぐに山田先生と高度を合わせる。
頭を切り替え、戦闘に集中する。

「お願いします」

「それでは、はじめ!!」

「!!」

号令と同時に僕は《・9サブマシンガン》をコールしてトリガーを引く。

山田先生は《レッドバレット》をコールして弾を避けつつ撃つてくる。

（射撃精度、やはり高いな…）

下手に撃ち合えば確実に負けるな…。なら。

「行け！！」

多弾頭誘導ミサイル《ビーハイヴ》をコールし、全弾発射する。

「つく…」

幾つかが山田先生にあたり、爆煙を散らす。

この一瞬、山田先生のロックが外れた。

（その一瞬で…）

瞬時に加速して煙の中へと突っ込む。

ビット《ココレット》をコールして山田先生を囲う。

更に《M8ダブルライトセイバー》をコール。

「そこ！！」

「残念、ハズレです」

リーダーが回復した山田先生がココレットを撃つ。
その瞬間、山田先生の背後を取る。

「はっ！！」

「くう！」

山田先生が振り向いて《レッドバレット》を構えるが、そこに僕はいない。あるのは投げられた《M8ダブルライトセイバー》。

本命は……

「こつちです！！」

振り向いて背ががら空きの所にコールした《M37レーザーソード》を振るう！！

斬！！

「ぐっ！？」

即座に上昇して爆煙から抜ける。

「コール」

《LC3レーザーライフル》

ガコン！！

と重量感ある音ともに白く長大な、ライフルとは名ばかりの巨砲を
右脇に抱えるように構える。ランチャー

チャージは既に完了。

山田先生が晴れた爆煙の中からライフルを構える。
弾種を検索―《29mm徹甲弾》。

威力、アーンヴァルが一発でレッドゾーン突入です。

「「シュート!」」

ドオン!!

ドンッ!!

同時に青白いレーザーと赤い閃光を放つ弾丸がぶつかる。
だが!!

「レーザーは、実弾より強し!!」

弾丸はそのスピードを落とす、レーザーに飲まれる。そのままレーザーは山田先生に向かい…

「きゃああ!!」

山田先生にダメージを与えた。

「おっ、と…」

瞬時加速を使って落下する山田先生を抱き止める。

「撃った僕がいうのもなんですけど、大丈夫ですか? 山田先生」

「え、あ、だ、大丈夫です!!」

顔が赤いな、風邪かな？

「本当に五分でやるとはな、いやはや恐れている」

地上について山田先生を下ろすと、千冬さんがそうやってきた。

「アーンヴァル（この子）の武装のおかげですよ。それと、連戦で山田先生の体力が少なからず減っていたのもありますし」

今回勝てたのは本当にまぐれだ。山田先生がこっちの武装を把握した上での戦闘だったら五分もかからず負けてたのはこっちだ。

「それだけ言えるのならまあ及第点だな」

おお、千冬さんが褒めてくれた。

「香我美くんは強いですよ、本当に!」

「ありがとうございます、山田先生」

「…織斑くんといい、香我美くんといい、ズルいです」

「?」

はて、ズルなんてした覚えが無いんだが？

第十六話：模擬戦（後書き）

次回は講習会です！！

感想お待ちしております！！

第十七話：操作実習とお姫様抱っこ（前書き）

最近、時間が無さ過ぎる…

第十七話：操作実習とお姫様抱っこ

「さて、余興はこれ位にして。専用機持ちは織斑、香我美、オルコット、デュノア、ボーデヴツヒ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

先の模擬戦から少し落ち着いた頃。
千冬さんがそう言い終わるや否や、僕と一夏とシャルルに一気に二クラス分の女子が詰め寄ってきた。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「香我美くん、わかんないところ教えて」

「え、えと、その……」

…この場合どうすればいいの？
助けて千冬もん！！

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグランド百周させるからな！」

おおっ、本当に助けてくれた。
つか千冬さん、グランド百周で十分死ねるのにIS背負わせるとか。

千冬の一言で、バラバラな動きをしていた女子たちが一瞬で移動して、それぞれの専用機持ちグループへと分かれた。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

お疲れ様です、千冬さん。

溜め息を漏らす千冬さんにバレないように、各班の女子は小さい声でお喋りをしていた。

「……やったあ！織斑君と同じ班っ。名字のおかげね……」

「真琴、よろしくな！」

「……うー、セシリアかあ……。さっきボロ負けしてたし。はあ……」

「……凰さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ……」

「……デュノア君！わからないことがあったら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！……」

それぞれがそれぞれ笑顔で話す。僕の班には里乃がいる。

時に思う。女子のＩＳスーツ、どこからどうみてもスクール水着だよな。

視線を横にズラすと、ボーデヴィツヒさんのグループが居た。

「……………」

うわあ、一切会話無し。まあ雰囲気と視線が完全に『話しかけるな。撃つぞ』みたいな殺伐とした感じだからだろうな。

ボーデヴィツヒさんのグループの女子の皆さん、頑張ってください。

かくして、ISの操縦訓練が始まった。

「それじゃ、出席番号順にISの装着と起動。それと、歩行をした
いと思います。一番目はえと、かなはら哉原さん」

「あ、は、はい！」

少し慌てた様子の、前髪で顔の上半分が隠れた女子が控えめに手を
上げた。

「えと、哉原 ういか初華…です。よ、よろしく願いします！」

「そんなに改まなくてもいいですよ」

「はうっ」

「?なんか顔が真っ赤になったぞ？」

「どうかしました？」

「い、いえ!?!なんでも、あ、ありません!?!」

「?」

「……天然女キラーだね」

「??？」

里乃が何か呟いたけど……よく聞こえなかった。

離れたところでは一夏とシャルルが女子たちに右手を出して頭を下げられていた。

「里乃、あれ何？」

「ああつと……あれは少し前の告白……」

スタタタアアン……！

「……いったああつ……！」「……」

うわあ、マシンガン出席簿アタック……。

「……なんだけど、時と場所を考えないとああなるよ」

里乃の言葉に僕は頷く。

「……やる気があつてなによりだ。それならば私が直接みてやろう……」

だってシャルルのグループの女子の背後に阿修羅を凌駕する存在がいたから。

「では教育してやろう」

「「「ひいつ」「」」

皆さん、生きていたらまた会いましょう…！

「…ええ、では哉原さん。早速やりましょうか」

「は、はい」

振り返ると僕のグループ全員冷や汗。

ちなみ僕も冷や汗。

これはもう、あれだ。忘れよう。

さっきの光景を見たからか、哉原さんは素早い動きでISのステータスを確認している。

僕らのグループの訓練機はラファール・リヴァイヴだ。

「哉原さんはISに何回か乗ったことあります？」

「はい、授業で何回か…」

「ん、なら大丈夫ですね。じゃあ早速やりましょう」

「は、はい！」

「あんまり焦らずに。落ち着いて下さい。何かあればすぐに助けますから」

「あ、あつう…」

ありゃ？また顔が真っ赤に…風邪なのかな？

こうして、訓練は難なく進んで最後。
やる人は里乃なんだけど…。

「あちゃゝ、真琴、これどうするんだい？」

「ええと…」

僕と里乃はISを『見上げる』。

里乃の前にやった人（弓山さんだったかな？）が次の人の為にISをしゃがませるんだけど、それを忘れちゃったみたいで…現在ISは絶賛立ちっぱな状態なわけで。

「ん…」

二人して横を見る。

一夏が箒さんをお姫様抱っこして立ちっぱのISへ運んでいた。

「やるしかないか」

「だね…じゃあ真琴、頼むよ」

「…了解」

アーンヴァルを装着して、里乃を抱きかかえる。そのままラファール

ル・リヴァイヴの搭乗口へと運ぶ。

「なんか、恥ずかしいね、コレ」

「僕も恥ずかしいよ…はい、ついたよ」

「むう、よかったような寂しいような…」

なんとか里乃をラファールに乗せ、起動させる。

その後は特にこれと言ったアクシデントは無く、訓練は終わった。

第十七話：操作実習とお姫様抱っこ（後書き）

次回、お昼休みの悪夢！！

第十八話：お昼だよ！全員集合！！（前書き）

更新する暇が無さ過ぎる…！！

第十八話：お昼だよ！全員集合！！

「どうしてこうなった」

「ん？」

昼休み、僕らは屋上にいた。

普通、高校の屋上といえはいわゆる大人の事情で入ることは許されないんだけど、IS学園ではそれが無い。

むしろ入ってオツケー。屋上庭園といっても差し支えない整理された芝生と花壇。

所々にベンチとテーブルが用意されて、晴れた日の昼休みは女子たちでよく賑わう。

個人的にも、ここは気に入ってる。

とはいえ、今日はみんなシャルル目当てで学食に行ったのか、屋上には僕ら以外誰もいない。

ザ・貸し切り状態。

「天気がいいから屋上で食べるって話しただっただろ？」

「そうではなくてだな……！」

一夏の言葉にちらりと篝さんが視線を向ける。

そこには、セシリアさん、鈴さん、僕、そしてシャルルだ。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが…（真琴、どうにかならないのか…！！）」

（ごめん、篤さん。流石にこの人数を出し抜くのは…）

（くっ……！）

僕のアイコンタクトの答えに篤さんは拳を握り締める。

その手には包みにくるまれた弁当箱を握っていた。

さて、これまでの会話で理解したと思うけど、説明しよう！

どうやら篤さんは一夏と『二人きり』でお昼ご飯を食べる為に誘ったわけだけど。

そこは一夏。見事な鈍感スキルで僕らを誘って篤さんの作戦を破壊して、今に至るわけです。

そして、作戦を破壊された篤さんに追い討ちがかかる。

セシリアさんと鈴さんの手元に視線を送ると、それぞれバスケットとタッパーを持っていた。

篤さんのまわりに負のオーラが漂いだした。

「はい一夏。アンタの分」

そう言つてタッパーを一夏に放る鈴さん。

「鈴さん、食べ物投げない」

「う…わ、わかったわよ」

食べ物を粗末にすると、呪われるよ。僕に。

「おおっ、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

一夏が開けたタッパの中身は酢豚のようだ。

この漂う匂い…かなり美味いだろうな。

「コホンコホン。…一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければお一つどうぞ」

「なにをいれた」

セシリアさんがバスケットを開くと中にはサンドイッチが入っていた。

おかしい。何がおかしいって、普通サンドイッチからカスタードクリームが匂いつてする？

しないよね？

するんですよ、この、バスケットの隅にあるタマゴサンドから…！！

「何って…『いろいろ』ですわ」

セシリアさんの一言にシャルル以外全員が顔を青くする。恐らく、そのいろいろの中には通常のサンドイッチでは使わない材料が入っているだろう。

「?どうかしまして?」

「いや!どうもしていない!-!」

セシリアさんの言葉に一夏が慌てて反応する。

皆さんお気づきだろうが、敢えて、敢えて！！言わせてもらいます。ここにいらっしゃるイギリス代表候補生セシリア・オルコットさんは、

料理が全く全然完全に、出来ません！！

一応、形はそれなりに整ってる。

しかし入っている調味料や材料各種は、それ本来の材料ではない。何故、おにぎりのなかに生レバーが入るのか。

前に一夏と一緒に食べた時、二時間はトイレから出れなかったよ…。

「はつきり言わないからずるずるいつちやうのよ。バーカ」

はい、鈴さん正論です。本格的に料理教えた方がいいかも…。

いつか絶対死人がでる。料理名は『死に直結』デス・コネクトに決定。

「ええと、本当に僕が同席してもよかったのかな？」

僕の隣でシャルルがそう言う。

シャルルはとんでもなく遠慮深い性格のようで、さっきだって、僕らのクラスに押し寄せて来た女子たちに、

『僕のようなものの為に咲き誇る花の一時を奪うことは出来ません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってしまっているのですから』

と、丁寧に丁寧に重ねた対応で引き取らせたのだから。

流石にあんな台詞は僕には言えない。言ったら死ぬ間違いなく死ぬ。まあ、そんなこんなで落ち着いた状況で一夏が僕とシャルルを誘い、それに乗じてセシリアさんと鈴さんがついてきて、この状況になっ

た。

里乃も誘おうと思ったんだけど、他のクラスの女子数人に、

『お姉さま〜！〜！』

とか言われながら抱き付かれ、どこかに連行された。

「まあ、男子同士仲良くしようよ。できる限り僕と一夏も協力するよ。ね、一夏？」

「おう、なんでも聞いてくれ。――IS以外で」

「格好つかないなあ……」

「一夏はもうちょっと勉強しなさいよ」

一夏の締まらない返事に鈴さんが呆れた感じで言う。
そんな様子を見て少し笑ってしまう。

「クス、まあこんな感じで賑やかな面子だから。シャルルもすぐ仲良くなれるよ」

「あ、ありがとう。真琴って優しいね」

「どういたしまして。これからルームメイトになるだろうし、仲良くしようね」

「真琴、部屋割りもう決まったのか？」

「いや、普通に考えて僕の部屋でしょう。男だし」

「『『『え?』『』『』」

「おいこら、なんだその反応は」

「『『『男だったの?』『』『』」

「僕は男だアアア!見て分かるでしょ!?!」

「『『『いや全然』『』『』」

「即答!?!」

シャルル以外全員からの集中砲火に心がボロボロです…。

一体、僕のどこが男っぽくないんだ…。(全部です)

そんな妙な賑やかさを持って昼食が進む。

一夏と鈴さんは酢豚、僕とシャルルは購買のパン。セシリアさんも自分の食べる分はしっかり購買で買ってきたようで、サンドイッチは一夏が全て食べるハメになりそうだ。

「なんだか、楽しいね。真琴」

「ん?」

飲み物を買ったために席を外した僕とシャルルは屋上への廊下を戻っ

ていた。

「こんな風に誰かと賑やかに過ごすの久しぶりで…」

「そうなんだ…。僕としては、あんまり変わらないような気がするよ」

「え？」

「家でもこんな感じで賑やかだったし。IS学園に入っても、一夏やみんなに会ったおかげで賑やかなのは変わらないから」

「変わらない？」

「うん。変わらない。賑やかで楽しい日常だよ」

ずっと続けばいいのに…。そう思うのはダメなのかな？

「フフ、真琴なんだかおじさんっぽいよ？」

「あはは、10人近い弟妹のお守りをやってると、こうもなるよ」

あの子達、元気にやってるかな？瑠璃と義父さんがいるから、まあ心配はないだろうけど。

「10人って…大家族だね」

シャルルが驚いた表情で見てる。

「うん、大家族だよ。その分、賑やかで、面白いよ」

「家族の事聞いてもいい？」

「いいよ、そうだな…まずは義父さんから話そうか……」

シャルルに家族について話しながら僕は屋上に戻った。

そしたら。

「……………」

一夏が死んでいた。

ああ、食べたんだね。セシリアさんの『アレ』を。

プライベート・チャンネルを開いて、一夏に聞いてみよう。

『今回の中身は？』

『何故…BLETSサンドの中にバニラエッセンスが……』

何をどうすればそんなのが入るんだ…！？

『…一夏、ご苦勞様』

『…ああ』

一夏、あんた男だよ。鈍感だけど。

その後、僕らは談笑しながらお昼ご飯を食べて、午後の授業に望んだ。

第十八話：お昼だよ！全員集合！！（後書き）

次回、相部屋と自機考察！！

感想お願いします！！

第十九話：夜の談話と武装（前書き）

感想をどうかお願いしますm（
—
—
）m

第十九話：夜の談話と武装

「それじゃ、改めてよろしくね。シャルル」

「うん。よろしく、真琴」

夜。夕食を終えた僕とシャルルは部屋に戻ってきた。食堂では、質問攻め（主にシャルル）にあい、それを適当なタイミングで切り抜けてきた。

当初の予想通り、シャルルは僕と同室になった。同室なのが判明したとき一夏は「いいな…男」とか言った後、箒さんに殴られて自室に連行されてった。

それで今は食後の休憩をとっている。

「シャルルは日本茶飲める？」

僕が給湯スペースから聞くと、シャルルはベッドに腰掛けながら答えた。

「飲んだことがないからなんとも言えないかな…。とりあえず、一杯頂戴」

「了解」

答えを聞いて、お茶を淹れる。
学校で支給されるインスタントのお茶。シャルルの口に合えばいいけど…。

「はい、どうぞ」

「ん、ありがとう」

お茶の入った湯呑みを受け取ってシャルルは一口飲む。

「ふう…紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「気に入ってくれて何よりだよ。なんなら今度抹茶でも点てようか？」

ちなみにセシリアさんは日本茶が苦手みたい。どうも色が緑なのが引つかかるらしい。

あの色がいいのに…。

「抹茶ってあの畳の上で飲むやつだよ。特別な技能がいるって聞いたことがあるけど、真琴はできるの？」

「一応ね。中学の時は茶道部だったし。まあ、シャルルに出すのは気軽に飲める略式のものにするよ」

「へえ、真琴ってすごいね。じゃあ今度飲ませてよ。一度飲んでみたかったんだ」

「うん。わかった。そうだ、シャルルこっち来て日が浅いよね？なんなら近くの町案内しようか？」

「本当？うれしいなあ。ありがとう、真琴」

シャルルのキラースマイルに男とわかってても一瞬心臓が跳ねる。
この微笑みを見たら女子は卒倒するだろうな…。

「い、いや、まあ、僕も欲しい本があったから、ついでだよ」

「ふふつ、ありがとう」

うぐつ、見透かされてる…。

なんと言つかシャルルの今の笑みは瑠璃に似ているな。

と、とりあえず話題を変えよう。じゃなきゃ何かに負けそうな気がする。

「えつ、と…シャワーの順番とかどうする？」

「あ、僕が後でいいよ。真琴が先に使って」

「ん、わかった。でも、先に使いたいときは言うてね。それと、遠慮とかしなくて大丈夫だからね。同じ部屋同士、仲良くしたいし」

「うん。ありがとう」

つ、く……あ、危なかった。何故だ、シャルルは男なのに一瞬精神が揺らいんだ…！！大丈夫か僕…！？（多分ダメです）

「そう言えば、真琴と一夏はいつも放課後にISの特訓してるって聞いたけど、そうなの？」

「うん。僕や一夏は他のみんなから遅れてるから、地道に訓練して、ISの使い方に慣れるようにしないと」

今日はシャルルが引越しがあつたので、放課後の訓練は抜けてきた。

また明日から再開しないと…。一日のたるみを戻すには最低三日必要とも言つし。

「僕も加わつていいかな？何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「ん、それはありがたい話だよ。よろしくお願いするよ」

「うん。任せて」

シャルルは微笑みながら頷いてくれた。

頼もしいな、公私共に。

その後、遊びに来た里乃とトランプで三人で遊んでから、ぐっすり眠りについた。

「やっぱり実弾の方がいいのかな…」

「でもレーザーの方がリロードの心配がないっていうメリットがあるよ」

「うん…」

シャルルが転校してきてから五日経ち、今日は土曜日。IS学園では土曜日の午前は理論学習、午後は自由時間となっている。

とはいえ土曜日はアリーナが全解放なので殆どの生徒が実習をしている。僕らも同じく、シャルルと軽く手合わせをしたあと、一夏と一緒にIS戦闘について話していた。ちなみに現在の話題は僕の武装について。さっきまでは一夏の戦闘方法について。

「真琴の武装の殆どって確かレーザーだよな」

「うん。しかも、武装が予めインストールされてて、バスのロット拡張領域が一夏の白式同様空いてないんだ」

「俺の場合は『零落白夜』で真琴の場合は武装か…」

一夏の白式は、ワンオフ・アビリティー…つまり能力…の演算処理の為に、僕のアーンヴァルは元からインストールされている武装の為に、拡張領域、つまるところ空き容量がないんだ。

僕の場合は武装プラスワンオフ・アビリティーの演算処理。

その為、これ以上武装は増やせない。

まあ、武装が豊富だからいいと言えいいんだけど…。

「ただレーザー兵器って燃費悪くって…」

そう、燃費がかなり悪い。セシリアさんのブルー・ティアーズもレーザー兵器を搭載してるけど、あれは《スターライトmk?》を除いたらかなり省エネなのだ。

それに比べてアーンヴァルの武装のレーザー兵器は…

「高火力かつ高燃費。まともな燃費はライトセイバー位だよ」

めちゃくちゃエネルギーを持ってかれる。

使いどころを間違えば一瞬でエネルギーが切れてかなり隙ができる。

「白式以上に癖があるんだね、真琴のアーンヴァルは」

シャルルも思わず苦笑い。

「真琴…ドンマイ」

一夏も苦笑い。

これは酷い。

「ねえ、ちょっとアレ…」

「ウソっ、ドイツの第三世代機だ」

「まだ本国でトライアル段階って聞いてたけど…」

急にアリーナがざわつきはじめて、僕らは会話を一時中断し、注目の的を見た。

「……………」

そこにいたのはもう一人の転入生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒさんだった。

第十九話：夜の談話と武装（後書き）

最近忙しすぎて更新がままなりません、よろしく願います！！

次回、シャルルの正体！！

第二十話：黒と本性（前書き）

ついにシャルルの本性がつ
…！

第二十話：黒と本性

「……………」

突然アリーナに現れたのは、転校初日に一夏を叩こうとした、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒさんだった。その身には漆黒のISを纏っている。

「おい」

ボーデヴィツヒさんがオープン・チャンネルで一夏に声を飛ばしてきた。

「……………なんだよ」

気が進まないといった態度を全面に出して一夏が返事をする。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

……ボーデヴィツヒさんて、もしかして戦闘好き？

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

眼光鋭くボーデヴィツヒさんが一夏を睨みつける。

離れたこの距離からでもわかる程、その目には怨恨が籠もっていた。…まるで、『あの時』の『俺』みたいだな。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」

微妙にヤンデレ入ってない？ボーデヴィツヒさん。

そんな視線を受けても、一夏はやる気がない意志をしめした。

「また今度な」

「ふん。ならば――」

ガコン！！

「戦わざるを得ないようにしてやる！！」

言うが早いか、ボーデヴィツヒさんはその漆黒のISの左肩に装備された実弾砲を撃つ。

はあ、仕方ない。

「！！」

斬！！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を開始しようとするとは……ふざけるのも大概にしてよ」

ゴトンと、一夏の前に出た僕の両脇でボーデヴィツヒさんが放った大型の実弾が落ちる。

理由は簡単。弾を斬りました。

え？簡単じゃない？そんな馬鹿な。

弾を斬るのに使った《LSフレーザーソード》を露払いの要領で振るう。この剣、右腕に直接着けて使うから使い勝手がいいんだよね。

「貴様……」

「……一夏に戦闘意志は無い。なら退くのが道理、でしょう」

これで引いてくれればいいんだけど。

「初心者が…私の前に立つな」

イラッ

「まわりを見ずに、無理やり戦いを申し込むような人には丁度いいでしょ。ドイツ代表候補生さん」

「「……………」」

ボーデヴィツヒさんが睨みつけてくるがそこまで怖いとは思わない。義父さんの魔王モード（キレた状態）の方がもっと怖い。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナのスピーカーから声が響く。騒ぎを聞きつけてやってきた教師だろう。

「…………ふん。今日は引こう」

興が削がれたのか、ボーデヴィツヒさんはISを解除してアリーナゲートへと去っていった。

ふう…何とかなった。騒ぎを連絡してくれた人、本当にありがとう。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

一夏に様子を聞くと、戸惑いながらも答えてくれた。

「真琴、すごいね…。さっきのどうやったの？」

「どつて言っても…弾の先端から縦に切ったとしか」

シャルルがさっきの弾斬りについて聞いてきたけど、本当にそうとしか言えない。

「それだけでも充分すごいよ。真琴って一体何者？」

「普通の高校生で、男だよ」

「「ダウト」「」

「男であることを否定された！？」

そんなに僕は男っぽくないのか…？（その通り）

…まあ、無事に済んだし、良しとしようかな。

そんなこんなので、アリーナの閉館時間が迫っているのもあって、今日の訓練は終了した。

「ふう、終わった終わった」

ISスーツを着替え、アリーナを出た後、一夏と僕は呼び出しを受け、山田先生から渡された書類を書いていた。内容は、ISと操縦者の正式登録について。署名するだけの簡単なものだったのでそこまで時間はかからなかった。

「うーん…っと、疲れた」

そして現在、僕は寮の部屋へと戻っている。

「ただいま」

ドアをあけ中に入ると、シャワールームから水音が聞こえる。

「シャワー使ってるのか…あ、そう言えば昨日ボディークリームが切れたって言ってたっけ」

確か予備がクローゼットの中に……よし、あった。

ボディークソープを手に取り、シャワールームのドアを開ける。

ガチャ。

…ガチャ？

おかしいな、すでに僕はシャワールーム（洗面所兼脱衣所）に入っている。なのになんでドアをあける音が。

あ、シャルルがボディークソープの替えを探しにきたのか……。そう思い、後ろのドアから視線を前に向け――

「……………」

たらシャルルに似た女子がいました。

格好？裸ですよ。

はっはっはっ、シャルルに双子の妹がいるとは思わなかった…………

「ま、真琴……？」

「……………」

んなわきやないでしょおおお！！

「え、えっと……替えのボディークソープ」

「あ、うん……」

とりあえず、ボディークソープを渡す。

「じゃ、僕はこれで」

「あ、うん……」

ボタン。

「……………」

ベッド横の壁の前に立つ。
やることは一つ。

「なにしちゃってんの俺ええええ!!?」

ガンガンガンガンガン!!

高速で頭を壁に叩きつける。

口調が元に戻ってるけど構うものか……!!
今はこの煩悩を消し去るのみ!!

ガンガンガンガンガン……!!

ガチャ…。

「あ、上がったよ…って真琴、どうしたの？」

「煩惱を殺すのと同時に懺悔を込めて頭をぶつけまくった」

シャワーから上がったシャルルの声に、僕は振り向いた。

「……………」

そこには、れっきとした女子がいた。

「……………」

「え〜と…、お茶でも飲む？」

「う、うん…」

とりあえず会話成立。

「はい、お茶」

「あ、ありがと…」

シャルルにお茶を渡し、自分のベッドに腰掛け、僕もお茶を飲む。

ずず…

「「ふう……」」

お互い落ち着いた所で僕はシャルルに質問をはじめ。

「さてと、落ち着いた所で聞くけど、なんで男のフリを？」

「それは、その…実家のほうからそうしろって言われて…」

「実家…つまり、デュノア社から？」

「そう。僕の父がその社長。その人からの直接の命令なんだよ」

質問する度に、シャルルは表情を曇らせている。

「命令って…親でしょう？なんでー」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

ーその一言はとても重い一言だった。

愛人とその子、その意味はとても重い。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときに父の部下がやってきたの。」

それで色々と検査をする過程でIS適応が高いことがわかって、非公式だったけど、デュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは辛そうに話す。言いたくなければ止められるそれを、健気に喋ってくれた。

検査…という言葉聞いた時、覚えの無い風景が見えたけど、今は無視する。

その後も、シャルルの生い立ちの話しは続いた。

話を聞いた結論。

「シャルル」

「なに？」

「親父さんをぶん殴らせろ」

「え！？」

シャルルの親父さんをぶん殴りたくなった。

つまる所、シャルルは男装をしてIS学園に入り、白式とアーンヴアルのデータを盗んでくるように命令されたらしい。

自分の会社がヤバいからって子供を利用するとはな……

「とまあ、こんなところかな。でも真琴にバレちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デユノア社は、まあ…潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「……………」

「なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソついてゴメン」

シャルルはそういつて頭を下げる。

それを見て自分でも気付かぬ内に声を出していた。

「いいのか、シャルルはそれで」

「え……？」

「それでいいのか？いいわけねえだろ。親がなんだ。親が手前のガキの自由を奪う権利なんざねえんだよ」

「ま、真琴……？」

シャルルが戸惑った声を上げる。

でも止まらない。久しぶりに俺はキレてるから。

「確かに親がいなけりやガキは生まれてこねえさ。だがな、そんな理由で親が子に何をしてもいいなんて道理はねえだろうが……！生き方決める権利は誰にもある。

それを、たかたが生んでやったって理由で邪魔するいわれなんざ無えだろうが……！」

俺には義父がいるだけど義父は俺にやりたいように生きろとそう言った。それと同時に、『親は子の未来を決めるんじゃない。子の作る未来をサポートする為に居るんだ』とも言った。

シャルルの父親はその言葉とは対極の事をしている。それが許せなかった。

「真琴……一体どうしたの？」

「…………ごめん、熱くなっちゃって」

「うっん、心配してくれてるんだよね、ありがとう」

「礼を言われるような事じゃないよ。それよりシャルルはこれからどうするの？」

「まあ…時間の問題かな。フランス政府もこのことを知ったら黙ってないだろうし、僕はよくて牢屋行きじゃないかな」

「シャルルはそれでいいの？」

「良いも悪いも、僕には選ぶ権利がないから仕方ないよ」

そう言つて微笑むシャルルの目は諦観の色を浮かべていた。それを見て、僕はある事を思い出した。

「…………選択権なら、ある」

「え？」

「特記事項第二十一。本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されない。

——つまり、この学園にいれば向こう三年は大丈夫。その間に何か方法を見つければ良い」

「あ……」

「『選択に必要なものは、十全たる時間と、十全たる思考である』。義父さんからの受け売りだけどね」

別に急ぐ必要はない。のかり三年の間は安全なのだから。

「真琴、よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

「僕は勤勉なのさ」

「そうだね。ふふっ」

やっとシャルルが笑った。その笑みはさっきまでの暗さが無くて、歳相応の笑みだった。

「やっぱりシャルルは笑顔が似合うよ」

「え？そ、そうかな…」

「うん、可愛いと思うよ」

「……ズルいよ」

「え？」

「な、なんでもない！」

何か呟いたシャルルだけど…なんていったんだろ？

第二十話：黒と本性（後書き）

次回、夕食と噂！！

第二十一話：ご飯と噂（前書き）

長らく間が空きました。 すいません m | | m

第二十一話：ご飯と噂

「ただいま。夕飯持ってきたよ」

「あ、おかえり真琴」

「ん。はい、これ。焼き魚定食だけど、大丈夫？」

「うん、ありがとう。いただくよ」

そう言ったシャルルにトレイを渡す。

あの後、夕飯をどうするか話しをしたのだけど、シャルルが胸を隠す為に使っているコルセットを部屋にある洗濯機にかけてしまったので、僕が食堂からもってくる事になったのだ。

「……！」

と、僕からトレイを受け取ったシャルルの表情が固まった。

「どうかした？」

「えーと……」

そこで、僕の視界にある物が映る。トレイに置かれた、箸だ。

シャルルを改めて見ると箸を気まずそうに見ている。なる程、そういう事か。

「もしかして箸、苦手なの？」

「う、うん。練習はしてるんだけどね…」

そう言って箸を取り、魚の身をほぐした。のだけど。

「あ…」

ぼろっと魚の身をつまもうとして落とす。
しまった、気付いておくべきだった。

「ごめん。スプーンでももらってくるよ」

「ええっ？ い、いいよ、そんな。なんとかこれで食べてみるから」

「そうは言っても、箸じゃ食べづらいでしょう？ 遠慮しないで」

「で、でも……」

食い下がるシャルル。

シャルルは少し遠慮深いなあ。

「シャルルは遠慮深すぎ。もうちょっと他人に甘えてもいいと思うよ。遠慮ばかりしてたら損だよ」

「うう…」

「と言ってもいきなりは難しいだろうし、まずは僕に頼ることからはじめたらどう？ ……話は少しズレるけど、色んな事情ひっくるめて僕はシャルルの味方をするから。だから、存分に頼って」

それぐらいしないと、男じゃない。

…おい、誰だ今『男？バカな』とか言った奴。

「真琴…」

しばらく迷っていたようだけど、なお高まる食欲の主張に観念したように口を開いた。

「じゃ、じゃあ、あの…」

「うん？」

「え、えっと…、その……真琴が食べさせて」

「っ！？」

予想外の言葉に僕はビクリする。

一瞬、世界が止まったように思えた…。

そこにシャルルが顎を引いた上目遣いで言葉を重ねてきた。

「あ、甘えてもいいって言ったから……」

ば、バカな…追加攻撃だと……！？

し、しかし…。

「そ、そうだね。わかった。そうしよう」

あの遠慮深いシャルルがやっと言い出したお願い。
叶えずして男は語れないっ！！

（でも、その上目遣いは反則だよ……）

そんな、雨に濡れる捨て犬のような眼差しを向けられたら、誰だつてそのお願いに答えなくなるじゃないか……！

これを断れる存在がいるのならそれはきつと勇者か魔王の称号を持つてゐるだろう。

シャルルから箸を受け取り、さつき落としていた鱈の身を摘む。

「じ、じゃあ、その……あーん」

「あ、あーん」

年下の子供にあーんをした事は数あれど、同年のしかも美少女にあーんをしたことなんて一切ない。

シャルルを見ると、顔が少し赤い。

「美味しい？」

「う、うん」

「そ、そう」

「じゃあ、その、次はご飯がいいな……」

「う、うん」

言われて、一口分くらいの量の白米をつまんで、受け皿の手を添えてシャルルの口元に運ぶ。

「はい、あーん」

「あむ……」

……何この可愛い小動物。落ち着かないんですけど。母性がかなり刺激されまくりです。

「つ、次は和え物がいいな」

「わ、わかった」

結局、最後まで僕が食べさせることになって、食事が終わると気恥ずかしさもあって二人ともベッドに入った。
ああ、恥ずかしい。

「……………に……………イプの」

幻視する。

「……………土の……………夕を……」

そして理解する。これは夢だ。

暗い、闇の中。

「……はり……では……のか」

声が聞こえる。

男のような、女のような。歪んだ声。

ゴポ……

淡い水音。

それと同時に意識が引っ張られるような感覚。覚めるのか。夢から。

また。

忘れる、いや、覚えていないのだろう。

「もうすぐだ」

この、

「造られし天使よ……!!」
アンネ

キオクを。

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜日の朝、教室に向かっていた僕と一夏は廊下にまで聞こえる声に目をしばたかせた。

「なんだろう？」

「さあ？」

僕の隣にはルームメイトのシャルル（男装モード）がいる。

「本当だつてば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際できー」

「俺がどうしたって？」

「「「きゃああっ!？」」「」」

一夏を筆頭に教室に入ると、挨拶代わりに悲鳴が返ってきた。

「で、何の話なの？一夏の名前が出てたみたいけど」

「ああ、それは学年別トーナメントで優勝したら織斑と付きーむぐ！？」

「りいいいのおおおさああん？余計な事は言わなくて結構ですよ……」

「口は災いの元って事、教えてあげようか……？」

「むぐー……！？」

鈴さんとセシリアさんはうふふと笑いながら里乃を連れ去っていった。その流れに乗ってか、集まっていた他の女子達も同じように自分のクラス・席へと戻っていった。

「……なんなんだ？」

「「さあ……？」」

一夏の問いに、僕とシャルルはそうとしか答えようがなかった。

第二十一話：ご飯と噂（後書き）

更に更新が遅くなるかもしれません……

次回、盗み聞きと黒き雨！！

第二十二話：暴虐と怒り（前書き）

来週更新出来ないかも：感想お願いしますm（
|（
|）m

第二十二話：暴虐と怒り

「真琴、今日も放課後特訓するよね？」

「うん。今日使えるのは、ええと…第三アリーナかな」

廊下をシャルルと並んで歩きながらこれから向かう先を決める。

一夏は篤さんと一緒に課題を提出しに行って居ない。まあ、後で合流するし、大丈夫か。

「第三アリーナは今日は確か使用する人が少ないから、模擬戦しやすいだろうし」

「ん。じゃあ、行こっか」

なんだかんだでISの実力「稼働時間だから、今日みたいな日は積極的に起動させなきゃね。」

僕たちがアリーナに向かっていると、そこに近づくにつれ、言いようのないざわつきが伝わってきた。

「妙に騒がしいというか、慌ただしい感じだね…」

「シャルル、こっちで様子を見よう」

シャルルを連れて観客席に向かう。

「誰かが模擬戦してるみたいだね。でもそれにしては様子がー」

ドゴオオンッ！

「！？」

シャルルの言葉を遮るように轟いた爆発音に驚いて視線を向けると、煙の中から影が飛び出してくる。

「鈴さんにセシリアさん！？」

現れたのは鈴さんとセシリアさんだった。

鈴さんとセシリアさんのISは見た限りでもかなりのダメージを受けている。

ところどころが破損し、一部のアーマーに至っては完全に失われている。そんな二人の視線の先には、

「……………」

静かに佇む、無傷の漆黒のIS『シュヴァルツエア・レーゲン黒き雨』を纏ったボーデヴィツヒさんがいた。

「一体何を…」

しているんだ？と言う前に、鈴さんとセシリアさんがボーデヴィツヒさんへと向かっていった。

どうやら二対一の模擬戦みたいだけど…。

「追い込まれてるのは鈴さんとセシリアさんの方だよ」

「…うん」

代表候補生である二人が何故、圧されているのか。その理由はすぐにあらわれた。

「くらえっ!!」

憤激の声と共に、鈴さんのIS『甲龍』の両肩のアーマーから衝撃砲《龍砲》が放たれる。

しかしボーデヴィツヒさんは回避しようとせず、ただ右手を突き出した。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

そう言ったボーデヴィツヒさんの手前で、《龍砲》の一撃は『消え去った』。

「停止結界…」

シャルルが呟いたその一言を聞いて、その言葉の意味を思い出す。

停止結界…難しく言えば慣性停止結界。

この地球上に存在する全てのものには慣性が働いている。

停止結界はその慣性の動きを完全に停止させる、『慣性停止力場』を展開し、敵の攻撃を無効化するものである。

…以上、千冬さんの講義から抜粋。

そんな、使いこなせば十二分な驚異となる力を使って、ボーデヴィッヒさんは二人を追い詰めていく。

そして、鈴さんとセシリアさんの決死の反撃を無傷で受けきったボーデヴィッヒさんが二人に宣告した。

「終わりか？ならば――私の番だ」

言うと同時に瞬時加速で地上に移動、鈴さんを蹴り飛ばし、セシリアさんに至近距離からの砲撃を当てる。

「……………」

もう既に二人のシールドエネルギーはあとわずか。既に模擬戦としては終了してもいいエネルギー残量。

なのに…

「……………」

吹き飛ばされた二人の体をワイヤーブレードで捕まえて、さらなる暴虐を加える。

プチリ

「ああああっ！！」

その全身に『ボーデヴィッヒ』の拳がたたき込まれる。
僅かなシールドエネルギーは直ぐに減って機体維持警告域を超え、

操縦者生命危険域へと到達する。

ギギギ…

これ以上のダメージは生命に関わるというのに、尚ボーデヴィツヒは手を止めず、淡々と『鈴』と『セシリア』を殴蹴し、ISアーマーを破壊していく。

ギリギリギリギリ…

そして、

「……………」

ボーデヴィツヒが愉悦に口元を歪めた瞬間、

ブチンッ！！

『俺』の中で何かが切れた。

「…シャルル」

「ま、真琴……?」

「織斑先生を呼んで来い」

「え、え?」

「……………じゃないと、色々壊しそうだ」

「ど、どうしたの真琴!?!」

困惑するシャルルを無視してアーンヴァルを展開。即座に《LS7
レーザーソード》を装着。

「…邪魔くせえ」

バリア貫通モードで観客席のバリアを切り裂いて突破する。

そして加速。

鈴とセシリアにボーデヴィッヒの手が触れる刹那、

ヴォーン!!

「っ…貴様」

「……………止める」

停止結界を発生させる事なく、《LS7レーザーソード》の刃をそ

の目先に向けて、ボーデヴィッヒの動きを止める。

「貴様もー」

「黙れ。そして退け。じゃねえと……」

怒りを込めた視線を向ける。

「…………消すぞ。三下」

第二十二話：暴虐と怒り（後書き）

次回、散会とペア組み！！

第二十三話：散会とペア（前書き）

そろそろ新武装出したいな…

第二十三話：散会とペア

「貴様…」

「……………」

ボーデヴィツヒが敵意を持った視線を向けてくる。なるほど、回答がそれなら…構わないな。

「……………」

ヴォーン…！

「チッ」

レーザーソードを一閃。それをギリギリでボーデヴィツヒはバックステップで避ける。

「ま、真琴…」

「あなた、なんで…」

「一夏じゃなくて悪かったな。無事…ではないか」

背中越しに聞こえる鈴とセシリアの声に答える。と、

「邪魔だ…！…！」

ドンッ！！

距離を取ったボーデヴィツヒから、カノンが放たれる。が。

「ハア……」

斬！！

無駄弾だな。

前回同様、カノンの弾を斬る。

「そこまでだ、ボーデヴィツヒ。止めておけよ」

「何……？」

「模擬戦は終了だと言った。それとも、規定違反を起こしてまで貴様は戦いたいのか？」

「……………」

俺の問いに、ボーデヴィツヒが黙する。
これで退かなければ戦うしかないが……。

「香我美の言うとおりだ」

ふと、静まり返ったアリーナに声が響く。

「織斑先生」

こちらに歩いてくる千冬さんは俺の声に嘆息で答えると、口を開い

た。

「模擬戦をやるのは構わん。イーが、アリーナのバリアまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

それまで黙っていたボーデヴィツヒは素直に頷いてISを解除する。
… なんとかなったか。

「香我美もいいな？」

「異存ありません」

「……それと、よく耐えた」

「……………」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！！」

千冬さんがその場にいた全ての生徒に向けて宣言して、その場は落ち着いた。

「「ふう……」」

あれから一時間、夕方の日が差し込む中、僕とシャルルは中庭にある自販機で買ったコーヒーを飲んでいた。

「いやあ、一時はどうなるかと思ったけど、千冬さんのおかげで助かった」

「あの…真琴」

「ん？」

「さっきの真琴、口調とか色々と変わってたけど…」

「……………」

うつむ、やっぱりそう来るか。

まあ、シャルルになら話しても大丈夫か。

「あれはまあ、何て言うか、本来の僕の口調だよ」

「本来の…？」

「そう、本来の。感情がハイになるといつもあんな感じになるんだ」

義父さん曰わく、口調の変化は僕自身の何かのスイッチとかなんとか。

その所を説明しようとした時、地鳴りが聞こえた。
…ん？地鳴り？

トトトトトトトツ……！！

「な、何の音？」

「段々近付いて来てるよね…？」

「「……………」」

沈黙。

「「ははは、そんなまさかー」」

「香我美くん！！」

「デュノア君！！」

言い切る前に中庭に現れたのは多人数の女子生徒だった。

その人数の多さは、さっきまで広く感じていた中庭が狭く見えるレベルだ。

そんな大人数の女子生徒らに囲まれ、逃げ場のない僕らに女子生徒達が手を伸ばしてくる。

「な、なに？なんなんでしょう……あう、ひたひゃんだ（舌噛んだ）

」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「『これ！』」

状況が飲み込めない僕たちに、バン！と女子生徒一同が出してきたのは、学内の緊急告知が書かれた申込書だった。
うう、舌痛い…。

「えつと…」 今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする」

「『なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』ー」

「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！！」

そして再び一斉に伸びてくる手。
やばい、メツチャ怖い。

「『私と組んで！！』」

なんでいきなり学年別トーナメントの仕様が変更されたか理由はわからないけど、今こうしてやってきているのは全員一年の女子。学園内で三人しかいない男子ととにかく組もって魂胆なんだろう。でも。

「え、えつと…」

シャルルは実際は女子な訳で。誰かと組むのは非常にマズい。正体がバレる可能性が高くなってしまふ。

シャルルを見ると、困り果てた表情をしていたが、それも数秒で、直ぐに表情を元に戻した。

相変わらず、遠慮深いなあ…。まあ、お助けしますか。

「すいませんが、僕はシャルルと組みますから諦めて頂けないでしょうか」

ハッキリとそういうと、

「まあ、そういうことなら…」

「他の女子とくまれるよりはいいし……」

「織×香我からシャルル×香我……じゅるりそ」

最後のは少しアレとして、とりあえずみんな納得してくれたようだ。女子達は各々仕方ないと口にしながら中庭から去っていった。

「ふう…なんとかなった」

「あ、ありがとう、真琴」

「ん？何が？」

「ペアを組むって言うてくれて」

「気にしないで。事情知ってるの今のところ僕だけだし、それに…」

「それに？」

「シャルルと組んでみたいって思ってたから。本心からね」

「……………!!」

答えるとシャルルが顔を赤くした。
熱でもあるのかな。

「あ、あ、ありがとう……………」

「? You are welcome」.

何故かお礼を言われたのでとりあえず応えた。
なんなんだろう？

第二十三話：散会とペア（後書き）

次回、blackrain・whitesun!!

主人公専用技名をどうしようか…

第二十四話：blackrain・whitesun（前書き）

長らくお待たせしてすいません（――）m
ラウラ戦、前編です。

第二十四話：black rain・whitesun

6月も最後の週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色に変わる。その慌ただしさは予想より遙かに凄く、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場整理、来賓の誘導を行っていた。

それからやっと開放された生徒達は急いで各アリーナの更衣室へと走る。因みに、僕、シャルル、一夏は例によってこの無駄に広い更衣室を占拠している。

今頃、反対側の更衣室では女子生徒の方々がぎゅうぎゅう詰めで大変だろう。

すいません、女子生徒の皆さん。

「しかし、凄いなこりゃ……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見ながら、一夏が呟いた。モニターには普通観客席から隔たれた場所に座る各国政府関係者、研究所員、企業エージェントなど……凄まじい顔ぶれが一同に座っていた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「まったく、ご苦勞な事で」

自分にとって果てしなくどうでもいい話だったので適当に返事をすると、シャルルには僕の考えが筒抜けなのか、くすつと笑われた。

「真琴はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「…バレバレみたいだね」

以前の騒動の時に見た、あの目。

『自身が強者であることに愉悦する』あの目が、とても気になっている。…まあ、理由については何となくわかっているけれど。

「確かめたいから、ね。あの目の理由を」

そう。確認したい。あの瞳の理由^{ワケ}を。

「彼女は、おそらく一年のなかでは現時点での最強だと思う」

「わかってるよ。でも、シャルルと一緒にだから、安心して戦える」

ペアを組むと決まってから、同室であることも手伝って、僕とシャルルはかなり親しくなった。

お互い、何をしたいとかが分かるようになった。
いわゆる以心伝心というやつだ。

「…真琴はやっぱりズルいよ」

「え？」

でもたまに、シャルルが何を言いたいのかわからない場合がある。
今みたいに。

一夏も首を傾げてる。

「よし、準備完了。シャルル、そっちは？」

「僕も大丈夫だよ」

お互い既にISスーツへの着替えは済んでいる。僕はアーンヴァルの武装チェック。シャルルは相変わらぬ男装用スーツ（ボディアインの肉付きを男のそれに見せる仕組みらしい。ハイテク過ぎる）の確認をそれぞれ終えた。

「そろそろ対戦表が決まる筈だよな」

という理由か知らないけれど、突然のペア対戦への変更がなされてから今まで使っていたシステムが正しく機能しなくて、本来なら前日にはできてるはずの対戦表も今朝から生徒達が手作りの抽選クジで作っていた。

ご苦労様です。

「一年の部、Aブロック初戦なんて運がいいね」

ようやくモニターに現れた対戦表に出た僕とシャルルのペアの対戦順はなんと、一番最初だった。これは運が良い。

「え？どうして？」

「待ち時間に色々考えなくて済むしね。テンションが丁度上がってるこのタイミングで戦えるのは僕にとっては良いから」

「ま、こういうのは勢いが肝心だからな。出たとこ勝負って奴さ」

残りを一夏が代弁すると、シャルルが笑みを浮かべた。

「ふふつ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、ちょっと考えがマイナスに入っていたかも」

なんともシャルルらしい考え方だ。

まあ、そんな緊張を解せたようでは何よりかな。

「お、対戦相手が決まったみたいだぞ」

トーナメント表が新しく更新される。僕も思考を中断してそこに表示される文字を見た。

「ーえ？」

「……早速か」

そこに出てきた文字を見て、シャルルはぼかんとした声をあげ、僕は嘆息を吐いた。

一回戦の対戦相手はボーデヴィツヒさん、そして篤さんのペアだった。

アリーナのバトルフィールド。静寂に包まれたその場所で、僕はボ
ーデヴィツヒさんと対峙する。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

そう嘲笑するボーデヴィツヒさんの後ろには箒さんが真剣な面持ち
で立っている。

「それは何よりで。こっちも同じ気持ちですよ」

返す僕の後ろにはシャルル。
試合開始まであと、

五秒。

「お互い」

四、

「全力を賭して」

三、

「「お前を」」

二、

「完膚なきまで」

一、

「絶望するまでに」

――開始。

「叩きのめす」

その言葉と同時に、僕はボーデヴィツヒさんに突っ込む。

AIC対策なら、練ってある。

小剣《M8ライトセイバー》を展開し、

「はあ!!」

槍投げの要領で投げる!!

「無意味だな」

しかしそれはボーデヴィツヒさんの展開したAICによって止められる、が。

「それはどうかな？」

「何……っ!？」

疑念を口にしたボーデヴィツヒさんはしかし途中で言葉を止め両手

を左右に向けた。

ドンッ！！

その手の先には浮遊するビット《ココレット》があった。

「これには驚いたな……では私の番だ！！」

そう言ったボーデヴィツヒさんのIS『シュヴァルツエア・レーゲン』からワイヤーブレードが全八本、多角的に曲がりながら頭上から降り注いでくる。

「まあ、でも」

ダブルブレード《M8ダブルライトセイバー》、展開。

「叩き落とせば問題ない！！」

ガガガガガガッ！！

言うが早い。

迫るワイヤーブレードらを《M8ダブルライトセイバー》を踊るように振るって全て叩き落とす。

「何だと！？」

「さて、行くよー！！」

右手に《M8ダブルライトセイバー》を、左手にはハンドガン《ア

ルヴォPDW11》を構え、ボーデヴィツヒさんに再度突っ込む。
けれどそれは、

キン！

「私を忘れてもらっては困る」

「それは失礼しました」

ボーデヴィツヒさんへの追撃を遮るようにIS『打鉄』を纏った箒
さんが現れ、斬り結ぶ。
でもね、

「それなら僕も忘れられないようにしなきゃね」
こっちにだって相棒がいるのさ。

「なに！？ぐっ……！！」

横合いから現れたシャルルが物理シールドを構えて箒さんに突撃し、
そのまま僕から引き離す。

「……………」

「……………」

遠近程よい間隔でお互いを睨む。

戦いは擬似的な一対一。戦場は僕が望んだ形となった。

さて。行くか。

「行くぜ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「来い、香我美 真琴」

本当の意味での戦いが、始まった。

第二十四話：blackrain・whitesun（後書き）

次回、Rafarlangel！！

第二十五話：Rafarlangel（前書き）

ラウラ戦、中編です。

第二十五話：R a f a r i a n g e l

「……………っ！！」

一瞬の静寂の後、ボーデヴィツヒさんは右肩のカノンを、僕は《L Cフレーザーキャノン》を構え同時に放つ。

ドンッ！！

同時に放たれた閃光はぶつかり合い、爆発を起こし、煙を巻き起す。

「ボーデヴィツヒさん」

「何だ」

煙の中、僕はボーデヴィツヒさんに話しかける。お互い、姿は見えない。まあ、ISのロックは外れてないけど。

それだけあれば十分か。

「前に言ってたよね。『停止結界の前では如何なる攻撃も無意味だ』って」

「確かに言っただけ。だからどうした」

「今からその言葉を『無意味』にするから」

「何だと…?」

体を低く構える。足を大きく開き、左手を下に構える。

右手は体と水平に伸ばし、その手に大剣《LS9レーザーソード》を構える。

イメージは弓。ギリギリまで弦を引かれた弓の如く。

さあ、行ってみようか。アーンヴァルのワンオフアビリティ…

「よく見ておいてね。まあ……」

——【rail action】発動——

「見られればの話だけどね」

煙が晴れるその刹那、僕は、

「消えた!?!」

「ここだよ」

ボーデヴィツヒさんの背後に立っていた。

「しまっ…」

「遅い!!」

振り向く前に横一閃を放つ。

斬!!

「つく!?!」

即座に腕でガードしたボーデヴィツヒさんを吹き飛ばす。

派手な土煙を上げて漸く止まったボーデヴィツヒさんがこちらを睨みつける。

「貴様……………!」

「さて、続きといこうか」

「ここからは僕も参加させてもらつよ」

そこに、シャルルが現れる。

「篤さんは?」

「先にお休み中」

シャルルの視線を辿ると、篤さんが片膝をついてダウンしていた。

「流石シャルル、やることが早い」

「その言葉は試合に勝ってから、ね」

両手に持っていたアサルトライフルを捨て、シャルルは新たに武装を呼び出す。ショットガンとマシンガンがそれぞれ形を成した。

「さて……………」

ジャコッ!!

二人で武器をボーデヴィツヒさんに向ける。
その切っ先と銃口は寸分変わらずボーデヴィツヒさんを狙う。

「「ここからが本番だよ」」

「シャルル!!」

「了解!!」

迫り来る八本のワイヤーブレードをそれぞれいなし、シャルルに援護を頼む。
即座にマシンガンがボーデヴィツヒさんに放たれ、僅かならから隙をつくる。

「駆けるよ、アーンヴァル!!」

ビット《ココレット》、《リリアヌ》計四つを放ちつつ、小回りが効く《M8ライトセイバー》を握り、ボーデヴィツヒさんへと一気に迫る。

「っ邪魔だ!!」

シャルルの弾幕をAICで止めながらボーデヴィツヒさんがカノン砲を撃ってくる。

「っ…!!」

かすりはしたが何とか体を捻って避ける。

「もらった!!」

そこにワイヤーブレードが二本迫ってくる。
やばいかな…なあってね。

「ところがギッチョン!!」

ピシュン!!ピシュン!!

先に放っておいた《ココレット》二機がワイヤーブレードを撃ち落とす。そして《リリアーヌ》は……

「そこ!!」

ドンッドンッ!!

「ぐっ!?!」

ボーデヴィツヒさんの頭上と足下に配置済みと。

「シャルル！！コンビネーション、行くよ！！」

「了解！！飛ばしていくよ！！」

怯む間すら与えないように連携を繰り返す。

シャルルが遠距離からライフルやアサルトライフルを用いて弾幕を張る。

「くっ……」

「足元注意！！」

「なにっ…ぐあー！！」

弾幕の防御に集中しているボーデヴィツヒさんに大剣《LS9レザースード》で足払いを放ち、体を浮かせる。

「しまっ……」

「香我美流剣技 昇風！！」

浮いたボーデヴィツヒさんのから空きの背中に一撃を叩き込み、打ち上げる。

「まだまだ！！」

打ち上がるボーデヴィツヒさんに《リリアヌ》で追撃を撃ちつつ、レールアクションを発動し、一気にボーデヴィツヒさんの上に移動

する。

「天使の如く舞い……」

「速っ……」

《LC7レーザーキャノン》展開。

「発射!!」

ドオツ!!

「ぐあああ!?!」

空中からレーザーキャノンで落下させる。
落下地点の少し手前ではシャルルがシールドを構えている。

そして、ボーデヴィツヒさんが地面に接触するほんの数秒の所で僕はレーザーの放出を止めると同時、シャルルのシールドの装甲が弾け飛びその姿を現す。

現代兵器の中でもトップクラスの破壊力を持つその兵器の名は、

――六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》――グレー・スケール通称、

「『盾殺し』……!」

ボーデヴィツヒさんが驚愕に目を見開く。

「そして――」

《灰色の鱗殻》を振りかぶり、シャルルは僕の言葉の続きを言った。

「疾風の如く貫くッ！！！！」

その言葉が放たれるのと同時に必殺の一撃がAICを展開しようとしたボーデヴィツヒさんに直撃した。

イイン……

「！！！！！」

ボーデヴィツヒさんはその目を集中して狙いを澄ましたーが、外した。

そして、

ガコン

「全弾突っ込むよ」

ズガガガガガン！！

「ぐ……あああ！！！」

絶対防御以外の防御を完全に無視した連撃が放たれ、ボーデヴィツヒさんのシールドエネルギーを喰らう。

そして、

「はあっ！！」

ズガンッッ！！

気合いの声と共に最後の一発が撃ち込まれ、ボーデヴィツヒさんを壁まで吹き飛ばす。

ボーデヴィツヒさんのシールドエネルギーはほぼゼロ。試合は決まったと言ってもいい。

――だが次の瞬間、異変が起きた。

第二十五話：R a f a r i a n g e l（後書き）

次回、ラウラ戦・後編、白の一撃！！

第二十六話：白一閃（前書き）

ラウラ戦、終了です。

感想、お待ちしております

第二十六話：白一閃

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……！！）

暗い世界の中、ラウラ・ボーデヴィツヒは激昂する。

（私は負けられない！負けるわけにはいかない……！！）

名などただの識別記号、生まれた場所は母の胎内などではなく、鉄の子宮。

存在意義はただ勝利、優越、超越……そして、兵器。

それ故に、その身は人の扱いに準せず。

体は弄くりまわされ、片目は完全な兵装とされた。

しかして与えられた称号は――『出来損ない』。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

その身は、心は闇の中にあった。

しかし、たった一人の存在によって始めて光を見た。

織斑千冬。

（私は……）

己を強くしたその存在の強さに惹かれ、そうなりたいと願った。

故に問うた。

その解答は、優しい笑みと共に返され。

「あいつらを見てみると、わかるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

違う。

「今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来ることがあるなら会ってみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつらに――」

優しい笑み、気恥ずかしそうな表情。
それは――

（違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）

だから――許せない。教官にそんな表情をさせる存在が認められない。否、みとめるわけにはいかない。

だから――

（敗北させると決めた。あれを、私の邪魔をするあの男を、香我美真琴も織斑一夏も、私の力で、完膚無きまでに叩き伏せると――！）

だからこそ、こんなところで負けるわけにはいかない。香我美真琴、

倒す対象はまだ動いているのだ。

動かなくなるまで、破壊しなければならない。

そう、だからこそ――

（力が、欲しい）

その願いに答えるモノが闇の中、蠢いた。

『――願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲するか……？ ？』

是非も無し。

解は一つ。

――力を、よこせ――

「あああああつ……！！！」

突然、ボーデヴィツヒさんが身を裂かんばかりの絶叫を発する。と同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、近くにいたシャルルが吹き飛ばされた。

「シャルル！！」

「大丈夫！……でも、一体何が……。ー！？」

「っ！？」

僕もシャルルも目を疑った。その視線の先では、ボーデヴィツヒさんが……そのISが変形していた。いや、変形とかそんなものじゃない。

装甲は全てぐにやりと溶け、ボーデヴィツヒさんを包み込む。

闇が、ボーデヴィツヒさんを飲み込んでいった。融合ともいえる。

「なんなんだ、一体……」

僕は無意識にそう呟いていた。多分、これを見ている全ての人間がそう思ったに違いない。ISはその原則として、変形が出来ない。ISがその形状を変えるのは『初期操縦者適応』と『形態移行』の二つだけ。

パッケージ……つまり追加装備による多少の部分変化はあっても、基礎形状が変化するのはまずない。有り得ない。そう言ってもいい。でもその有り得ない事がいま目の前で起きている。

変形とかそんなワードで括れない、粘土人形のようなそれ。

シュヴァルツェア・レーゲンだったものは完全にボーデヴィツヒさんの体を飲み込むと、気味の悪い鼓動を繰り返し、ゆっくりと地面へと降りていく。

そしてそれが地面に降りると、ビデオの早送りのように高速で形を成していく。

そして、そこに立っていたのは、黒い全身装甲のISのような『何か』。その手には、僕が、恐らく一夏も見間違っ誤がない武器があった。それは――

「《雪片》……！」

千冬さんがかつて振るった刀。それに酷似していた。

「……………」

僕は無意識に《LS7レーザーソード》を構えた。

「――！」

刹那、黒いISが僕の懷に飛び込んでくる。

居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、刀剣接触距離から放たれる、必殺の一閃。
ブレードレンジ

この太刀筋…千冬さんの！？

「ちっ！」

ギン――！！

《LS7レーザーソード》でなんとかいなして攻撃を逸らす。間髪入れずに右逆袈裟斬りが飛んでくる。

（くそっ……武装展開する暇も、距離を取る隙もない……！！）

轟ッ！！

「ぐっ、がつー！！」

放たれる横一閃に防御態勢を取る暇も無く吹き飛ばされる。

地面を大きく削りながら漸く止まると、そこには筭がいた。

「真琴……」

なんだ、心配してくれてるのか。
そりゃありがたい。

「いっつつ……ああ、クソツたれ」

体勢を立て直しながら機体の損失をチェックする。

――シールドエネルギー残量、残り143。

――腰部スラスター、脚部、腕部装甲一部破損。――状態、イエロ
ー。

「やりすぎだな……無理させて悪い、アーンヴァル」

立ち上がって黒いISを見る。

黒いISはアリーナの中央から微動だにしない。攻撃意志とかに反
応して行動するようだ。

「あれは一体……」

「あれは、千冬さんの攻撃パターンをまんまトレースしてきやがっ

た。ああクソつたれ、苛つく」

「真琴……」

「それにな。あんなわけわかんねえ力に振り回されてるラウラも気に入らねえんだ。あの頃の俺を見てるようで、ムカつく。だから」

力は、強さは、攻撃力じゃない。
それは暴力だ。

「だから『助ける』。俺が親父にしてもらったようにな。親父みたいな事は出来ねえだろうが、親父に似たことは出来るだろうよ」

「だが、お前の機体のエネルギーは……」

「それが問題なんだよな」

箒の意見はごもつともだ。あの黒いISも多分さほどエネルギーは残ってないだろうが、それでも一撃叩き込まなきゃ意味がない。しかも、デカい一撃を。今のアーンヴァルにはそれが出来ない。

アリーナのスピーカーからは緊急放送が流れ、観客席から来賓、生徒が避難している。

教師部隊ももうじきここに来る。

「まったく……面倒くせえな」

「だがどうするというのは、エネルギーはどのみち――」

「無いなら他から持ってくればいい。でしょ？真琴」

「シャルル……！そういうことか……！」

さっきの電撃から持ち直したのか、シャルルがやってくる。

「普通のISなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「ナイスだぜ、シャルル。早速やってくれ」

「けど……！」

びしっとシャルルが俺に指を指して言う。珍しく、その言葉は強かった。

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「はっ、言われずとも負けないさ。負けらんねえしな」

「じゃあ、負けたら明日から真琴は女子の制服で通ってね」

「……………わ、わかりましたあ」

結構ガチな目をしたシャルルの言葉にスイッチが切り替わる。

ああ……これは負けられないな。

「じゃあ、はじめるよ。……リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギー流出を許可」

「……………」

リヴァイヴから伸びたケーブルがアーンヴァルの腕にと繋がれ、エネルギーが流れ込んでくる。
湧き上がってくる力の奔流。この感覚…

（初めてISを動かしたときと同じ感じだ……）

全ての感覚がクリアーになり、世界を全て感じられるような感触。

「……………」

これなら、行ける。

「完了。リヴァイヴのエネルギーは残量全部渡したよ」

その言葉通り、シャルルの体からリヴァイヴが光の粒子になって消える。アーンヴァルのエネルギー残量を見ると、これから僕がやる事に十分なエネルギーが溜まっていた。

「真琴、頑張れよ」

「一夏の分も、ね」

篤さんの言葉に応えながら前に出る。

「真琴っ！」

「ん？」

シャルルの声に振り向かずに戻すと真剣な声音で言ってきた。

「死なないで。絶対、死なないで」

「当たり前でしょ。まだ僕はみんなと一緒に居たいんだ。だから…」

「……」

「信じて待つて。それが、僕の強さになる」

l r a i l a c t i o n s t a n d b y l

「もう、強さを見誤ることはない。本当の強さを僕は知ってる。誰かを救い、守る為に強くあり続ける人を、知っているから。」

なら、僕も。

誰かの為に強くありたい。

「じゃあ、行ってきます」

「う、うん！行つてらっしゃい、真琴！」

言葉を交わして、僕は、最後の一撃の為に、

l r a i l a c t i o n s t a r t l

疾駆した。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ!!」

懐に入り、一回転しながら黒いISの刀を弾き飛ばす。
そして、その回転からの一撃を……

「君は」

天上に向かって、

「君になれ!!!!」

斬り上げる!!

「一刀両断・白」

斬ッッッ!!!!!!

「ぎぎ……ガ……」

ジジッ……と紫電が走り、黒いISが真つ二つに割れる。

そして、気を失うまでの一瞬であろう間にボーデヴィッヒさんと目が合った。眼帯が外れ、あらわになった金色の左目と。

まるでひどく弱った捨てられた子犬のような眼差しのように、僕は思えた。

助けて欲しいと、言っているように見えた。
だから。

「……………助けるよ。君を」

力を失って崩れるボーデヴィッヒさんを抱き止め、僕はそう呟いた。
それが聞こえたかどうかは、ボーデヴィッヒさんだけが知るところだろう。

第二十六話：白一閃（後書き）

次回、黒氷融解！！

第二十七話：黒氷融解（前書き）

やっと、執筆ができる……！！

第二十七話：黒氷融解

「一つ忠告しておくぞ。あいつらに会うことがあれば、心は強く持て。あいつらは未熟者のくせにどうしてか、妙に女を刺激するのだ。油断していると惚れてしまうぞ?」

そんな風に言う教官はひどく嬉しそうで、それでいてどこか照れくさそうで、なんだか見ているこちらがモヤモヤとした。

だから、――いまならわかる。あれはそう、ちょっとしたヤキモチだったのだ。それでつい、あんなことを訊いてしまった。

「教官も惚れているのですか?」

「弟と弟子に惚れるものか、馬鹿め」

ニヤリとした顔で言われて、私はますます落ち着かなくなる。教官にこんな顔をさせるその男たちが――羨ましい。

そして、出会ってわかった。戦って、理解した。

強さとは――何なのか。

その解は無数にあるのだろう。

そして、その解の一つに、出会ってしまった。

『強さっていうのは、思いなんだよ、きっと。

こうありたい、ああなりたい、守りたい、救いたい…そんな色々な
思いこそが、強さなんじゃないかな』

……そう、なのか？

『わからない。この答も複数の内の一つに過ぎないから。…でも、
さ。

思いが…自分のやりたいことすらわからない人は、きっと強弱以前
に歩き方を知らないんじゃないかな』

……歩き、方…。

『そう。どこに向かうか、何を成すか、さ』

…何を成すか…。

『そ、やりたい事は好きなだけやれば良い。遠慮や我慢なんて、す

るだけ損だよ?』

そして、そいつは――その男は――笑みを浮かべて言った。

『刺激があるから、人生は楽しい。遠慮や我慢だらけの人生なんて、人生にあらず、だよ』

――では、お前は……、お前はなぜ強くあろうとする?どうして強い?

『全然。僕は全然強くないよ』

断言。その言葉に私はぽかんとしてしまう。
あれだけの力を持って尚、強くないと言う。
理解できない。

『けれど、もしも僕が強いつていうなら、それは……』

――それは……?

『守りたいから。家族を、友達を。守りたいからだよ』

――。

『未熟者でも、何でも、守りたいんだ。』

僕はお節介な偽善者だけど、それでも守りたい。ただ、それだけ』

――たったそれだけで……。

『言っただでしょ？思いは、強さなんだよ。だから守りたいって意思が僕の強さ』

――それは、まるで……あの人のようだ。

『だから、さ……。君も守るよ、ラウラ・ボーデヴィッヒ』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『守る』

その一言に、私は――ああ、そうか。
これが……。

――香我美、真琴。

ああ、これは、確かに。

惚れてしまいそうだ。

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末での確認の上――』

ピ、と誰かが学食のテレビを消す。僕は豚骨ラーメンを食べながらそれを見ていた。

時間は夜、あの試合から半日以上が経過している。

「やっぱり、シャルルの予想どおりになったね」

「そうだねえ。あ、真琴、七味取って」

「はい、七味」

「ありがとう」

「当事者なのにのんびりしてんな……」

うつさい、一夏。

ついさっきまで教師の皆様からの事情聴取のせいで夕飯食べる時間が削られたんだから仕方ないでしょう。

「ふう…、ごちそうさまでした。学食といい寮食堂といい、料理がうまいな…こんどレシピ習おうかな…ん？」

視線を感じてそちらを見ると、落胆した様子で一夏の事をガン見する女子一同が。

「…優勝…チャンス…消え」

「交際…無効…」

「どして うった!!」

バターつと数十名が泣きながら走り去っていった。最後の、何故アラクネ語？

「どうしたんだろうね？」

「さあ…？」

「わからん」

三人ともちんぷんかんぷんだ。
女心ってよくわかんないな。（嘘つけ）

「……………」

女子の波が去った後に、一人だけ呆然と立っている姿を見つける。
一夏ラヴァーズNo.1の箒さんだ。
顔が、（。□。）みたいな感じで妙に笑える。そんな箒さんに一夏が近づいた。

「そう言えば箒。先月の約束だがー」

「!?!」

いや、何、今のMGSな音。

「付き合ってもいいぞ」

「!。――、なに？」

「だから、付き合ってもいいって…おわっ!？」

突然、弾けるように動いた箒さんが一夏の制服の襟首を掴み上げる。
今の動き…少ししか見えなかったよ!？」

「ほ、ほ、本当、か？本当に、本当に、本当なのだな!？」

箒さん、一夏死にかけてるって。タップしてるの気付いて。

「お、おう」

「な、何故だ？理由を聞こうではないか……」

顔色が青から土気色になりかけていた一夏を離し、腕組みをして咳払いをする篤さん。

まあ、話の概要はある程度理解したけど……結果はなんとなく、解る。

「そりゃ幼なじみの頼みだからな。付き合っさ」

「そ、そうか！」

「買い物くらい」

「……………」

ビキッ！！

ほらね、一夏だもん。

篤さんがバーサーカーモード入っちゃったよ。

「……………だろうと……………」

「お、おう？」

一夏、今からでも遅……………いな。
諦めて制裁をくらってください。

「そんなことだろうと思ったわ!!」

ドスンッ!!!!!!!!!!

「ぐっはあ!!」

腰と腕にひねりを加えた強烈な正拳が一夏の鳩尾にヒットする。
うわあ、内当てとかえげつないな…。

「ふん!!」

ドゴンッ!!

とさらにつめく一夏の鳩尾に追加攻撃でつま先がヒット。
一夏よく耐えるな……。あれ常人だったら内臓終わっちゃう威力だよ。

「ぐ……っ……」

ずかずかと去っていく篤さんを見ることがもなく一夏が崩れ落ちる。
いや、あれを受けて数秒たってるだけで凄いんだけどね。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「右に同じ」

「な、なに？どどういう意味だ、それは」

「「さあね」「」

一夏の言葉にシャルルと一緒に視線を逸らす。

鈍感も、ここまでくると凄いな……。

第二十七話：黒氷融解（後書き）

次回、第二十八話波長とお風呂！！

第二十八話：波長とお風呂（前書き）

長らくお待ち致しました m (| |) m

第二十八話：波長とお風呂

「そう言えば、ちょっと聞きたい事が」

「うん、なに？何でも聞いて」

回復した一夏を見送ってから再び食事を再開した僕はシャルルに気になってた事を聞いてみた。
「というか、シャルルが試合終わってから今に至るまで機嫌がかなりいいんだけど、どうしたんだろ。」

「ISで会話つてできるの？えと、プライベート・チャネルとは違う、なんか二人だけの空間、みたいな感じの会話なんだけど」

「うん？うん……何か聞いたことはある気がする。IS同士の情報交換ネットワークの影響だつて言われてるんだけど、操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉が起こるつて言う、あれかな」
「たぶん、それ。でも、波長……かぁ。なんかよくわからないな」

「ISはよくわからない現象や機能がかなりの数あるよ。作った篠ノ之博士は全機能を公表してない上に現在も失踪中だし、前に何かのインタビューで自己進化するように設定した部分があるから、本人も全部を把握するのは難しいつて言ってた気がする」

「自己進化つて……」

「凄いなIS。」

「それじゃ、喋れたりしない以外、人と似てるじゃないか。」

そんな事を考えていて、ふとシャルルの視線に気づく。気のせいか、視線に棘を感じる。

「……真琴、二人だけの空間で会話って、もしかしてボーデヴィツヒさんと？」

「う、うん、そうだけど……」

「ふーん。そう」

あ、あれ？シャルルが不機嫌になっちゃった……。何で分かるかっていうと、まあ、訓練の賜？でも、なんで急に不機嫌になったんだろ？

「あ、香我美君にデュノア君。ここに居ましたか。さっきはお疲れ様でした」

「山田先生こそ。ずっと手記でお疲れでしょう？」

「いえいえ、私は昔からあいつた地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。何せ先生なんですから」

エヘン、と胸を張る山田先生。

即座に視線を逸らした。何故か？聞かないで。

「……………」

「…真琴のスケベ」

ボソツとしたつぶやきだったけど、僕には確かに聞こえた。

「え、ええっ？ちょっと待ってよシャルル！誤解だつて！」

「ふん。どうだか」

うう、なんでこんなに機嫌悪いの？

僕なんかマズイことした…？（しちゃいました）

「？　どうかしました？」

「い、いえ。なんでもないです」

「そうですか。それよりも、朗報です！」

山田先生。お願いですからその天然発生大量破壊兵器を動かさないで下さい。

……辛いですから。

「なんとですね！ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「……………！！　ほ、本当ですか！？」

「はい。今日は大浴場のボイラー点検があつたので、もともと生徒達が使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、それなら男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

マーベラス！ブラボー！素晴らしい！

やっとお風呂に入れる！

最後に入った実家のお風呂から一体何日待ったことか……

「……………ん？」

「……ちょっと、待とうか。『男子三人』……？」

ちらりとシャルルを見ると、案の定固まっている。

ヤバイ。かなりヤバイ。

シャルルの性別は女性。しかし諸事情により、いまは男性で通している。

さて……どうする？

「え、えーと……」

「どうしたんですか？ほらほら、二人とも早く着替えを取りに行つて下さい。織斑君が先に行つてますから、鍵は明日辺りに返してくださいね。では」

そう言つて山田先生はすたすたと食堂を去つていつてしまふ。

「……………シャルル」

「う、うん。困つた……ね。どうしよう。と、とりあえず着替えを取りに部屋に戻るうか」

「そうだね……。一夏が先に入ってくれたのが唯一の救いだよ」

これで一夏も同時に入る事になったら本気でマズかった……。

とにかく、僕とシャルルは部屋へと戻つた。

その間、風呂上がりの一夏に遭遇した事で一応の危機が去つてとりあえず安心した。

第二十八話：波長とお風呂（後書き）

次回、入浴と呼び名

第二十九話：入浴と呼び名（前書き）

長らくお待たせ致しましたm（| |）m
感想、待ってます

第二十九話：入浴と呼び名

皆さん、日々如何にお過ごしでしょうか？

忙しい方もいらっしゃるかと思います。どうか、どうか暇な人は

「……………」

「……………」

この状況を何とかして下さい……………！

あの後、ろくな対策を練る暇すらなくこの大浴場に來た僕達は現在、脱衣場にて背中合わせに沈黙している。

マズイ、不味すぎる。僕はお風呂にとっても入りたい。しかしてシャルルと一緒に入るとか言ったら只の変態だ。

いや、まあ、一度、その……………は、はは裸を見ちゃったけど、それとこれとじゃ別物だ。

当然だけど、年頃の女子が男に肌晒しちゃダメだよな。

そして僕も、女子の裸を見てしまうような事態は極力避けたい。

義父さんは『減るもんじゃない』なんて言うけど、減るんです。主に女性としての尊厳とかが。後、僕の社会的地位も。

そも、妹達を守る長男がそんなこととしてどうするか。

「え、え〜と……………シャルル？」

「はっ、はい!？」

何故、敬語? いや、今はおいといて。
とりあえずお互いに顔を合わせて会話をする。
よし、後は何とかしよう。

「シャルルも今日は疲れたでしょう? 先に入っていいよ。僕はここ
で適当に時間潰してから、頃合い見て部屋に戻るから」

「え? 真琴はどうするの?」

「一緒に入るわけにはいかないでしょ。また入る機会はあるだろう
し、今回はシャワーで我慢するよ」

男は時に我慢が必要。今がその時だと思う。
シャルルの為だと思えば別段苦でもない。

「い、いいよ。それなら僕が脱衣場で待つてる。その……お風呂つ
てそんなに好きじゃないし。でも真琴は好きなんだよね?」

「好きだよ」

無論でしょ!

僕は食事かお風呂かと聞かれたらお風呂を即選択する。まあ、食事に料理作りを加算するなら話は別なんだけど——って、なんでシャルルは真っ赤になってるの?

「どしたの?」

「な、なんでもないよ!？」と、とにかく、真琴はお風呂にどうぞ!

僕のことは気にしないでいいから、ね？」

う、ぐ……

「……いいの？」

「う、うん」

「じゃあ入る！ありがとねシャルル！この恩は必ず返すよ！」

こうまで言ってくれてるのに断るのは無粋というもの。

据え膳食わねばなんとやら。

僕のテンションは一言で表すと、

『ヒヤッハー！最高にハイって奴だぜエエエ！』

こんな感じになった。

とりあえずシャルルの視界に入らない位置に移動して、一気に服を脱いで髪を結っている紐をほどく。

よし、パージ完了。

「じゃあ、お先に」

「う、うんつ。ごゆっくりっ」

シャルルに声を掛けたのだけど、何故かきこえない返事が返ってきた。

どうしたんだろ？

以下、僕の発狂シーンなので中略！
って酷い！

「ふにゃあああ………」

ああ、生き返る……。――

浴槽に肩まで浸かりながらそんな事を思う。

「はふうう」

リラックスのせいか、眠くなってきた。いや、溺れて死んでしまうからマズイ。

カラカラカラカラ……

（……………気のせいか、今脱衣場の扉が開いた音が聞こえたような……………）

まさか、シャルルが……？

……………

（ハハハ、そんな、まさか（ハハ））

ぴたぴたぴた。

「お、お邪魔します………」

「っ！！」

ガッツ！

あまりの衝撃に思わず壁に後頭部を強か打ち付けてしまった。
湯気の中から現れたのは、

一糸纏わぬ姿のシャルルだった。

流石にタオルは当ててるけど、所詮は薄手のスポーツタオル。
あまり意味はなかった。

「えあ、あう、あうあゝ！？」

「……あ、あんまり見ないで。真琴のえっち……」

「うう、ごめん！」

慌てて体を回れ右。

あれ、なんで僕は謝って、いや何でこんなことに……！？

「え、えと、シャルル？確かに僕も入浴勧めたけど、それは僕が入らない場合の話であってね？つまりなにが言いたいかというと——
何故に、入ってきたのシャルル？」

僕の脳内、絶賛混乱中。いや自覚はしてるんだけど収まりようがない。

「ぼ、僕が一緒だと、イヤ……」

ゴフッ……！

「いやそういうわけじゃないけど！」

い、今の……威力がデカイ。

イヤじゃない、僕だって健全たる男だ。
興奮しないと言えは嘘になる。

でも、流石にこの状況はまずいと思う。

「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。——め、迷惑なら上がるよ？」

「い、いや、だったら僕が上がるよ。もう十分堪能したし」

「ま、待って！」

「っ」

急に大声で呼び止められ、僕は浮かした腰を止めた。

「そ、その、話があるんだ。大事なことから、真琴にも聞いて欲しい……」

「わ、分かった……」

シャルルの言葉に幾分か冷静になった僕は浮かした腰を戻して、シャルルと背中合わせに座った。

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「前って言うと……学園に残るって話？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだっ
て思える居場所を見つけられてないし、それに……」

「そ、それに？」

「……………」

何故か、返ってきたのは沈黙だった。

会話が止まって、浴場が静まりかえっている。

ぴちゃーん。

「きゃあっ！？」

「どど、どつしたの！？」

いきなりの可愛い叫び声に僕までビックリした。

「す、水滴が落ちてきて……ビックリしただけ」

「そ、そう……」

「……………」

再びの沈黙。

時折天井から落ちる水滴の音が妙に大きく感じられた。

ちやぶ……。

「？シャルル？」

湯船の中を動く水音が聞こえて、僕は視線を向けてしまう。

「こ、こっち見ちゃダメ！あっち向いてて！」

「う、ごめん！」

慌てて視線を戻して壁に向ける。
と。

ぴとっ……

と、僕の背中にシャルルの手が触れてきた。

「しゃ、シャル——」

そのまま、手は僕を後ろから抱きしめる。

背中にシャルルの体が密着して、僕の心臓は口から飛び出んばかりに跳ねた。

「真琴が、ここにいろって言ってくれたから。そんな真琴がいるから、僕はここに居たいと思えるんだよ」

「そ、そっか……」

僕にとっては当たり前前の事を言っただけ、それが少しでもシ

ヤルルの助けになったのなら嬉しい。

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ……？」

「そう。僕のあり方。真琴が教えてくれたんだよ？」

「そ、そうなの？」

「そうだよ。ふふっ、真琴って自分に関することはどこまでも鈍感だね。憎たらしいくらい」

「あう……ごめん」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕のことはこれからシャルロットって呼んでくれる？ふたりきりのときだけでいいから」

「それが、本当の……」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかったよ——シャルロット」

「ん」

嬉しそうにシャルル改めシャルロットが返事をした。

それはまるで子供のように無邪気さで、あのいつもの屈託のない笑みが容易に想像できた。

何となく、シャルルとの距離が近づいた。
そんな気がした。

第二十九話：入浴と呼び名（後書き）

次回、第三十話：転校生（？）と嫁宣言！？

第三十話：転校生（？）と嫁宣言！？（前書き）

原作二巻終了です

第三十話：転校生（？）と嫁宣言！？

翌日。

朝のホームルームにシャルル……もとい、シャルロットの姿がなかった。

『先に行つてて』と言うから、食堂で別れたんだけど、何かあったのかな。

あらためて教室を見渡すと、シャルロットの他にボーデヴィツヒさんもないかったけど、まあ、昨日の負傷で休んでるんだろう。

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生は何故かフラフラとしている。朝からどんなダメージを受けたんだろう。

目覚まし時計が電池切れで遅刻しかけた、とか？

「織斑君、香我美君、何を考えているのかはわかりませんが、私を子供扱いしようとしているのはわかりますよ。先生、怒ります。はあ……」

先生、言葉と態度が一致してないですよ……。
でも、スイマセン、先生。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、既に紹介は済んでるといいますが、ええと……」

転校生……？

何となく嫌な予感が脳内に走った。

クラス中がざわめく中、山田先生がその『転校生』を呼んだ。

「じゃあ、入って下さい」

「失礼します」

この声……、予感的中だよ……。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしくお願ひします」

ぺこり、スカート姿のシャルロットが礼をする。

僕を含めたクラス全員がぼかんとしたまま、頭を下げ返す。
一夏に至ってはロボットのようなかクカクな動きをしてる。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はあ……また寮の部屋割りの組み立てが……」

山田先生のテンションが低い理由はそこにあったのか。
つて。

……………ま、マテヨ？

「え？デュノア君って女……………？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「つて、香我美君、同室だから知らないって事は——」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ってたわよね！？」

「織斑君！昨日の二人の様子は！？」

「風呂に入る前に会った時に二人とも顔が赤かったぜ」

「一夏あああっ！？」

なんて事を言っちゃってんのー！！

一夏の発言に教室が喧騒に包まれ――

ガチャン。

――て……………メツチャ嫌な予感。

恐る恐る後ろを見ると…………。

「まああゝおおとオオ……………」

――鬼神（里乃）が居ました（＾Ｏ＾）／

なに、あの赤黒いオーラ、波動なの？殺意の波動なの！？

「ええと…………里乃さん、質問が」

「何だい？」

「その持ち上げてる物はなんでしょう?」

「机」

「それで何をしよう?」

「真琴を……………プチッと」

「ですよねえ……………って理不尽な!!」

「問・答・無用おお!!」

怒涛の檄と共に里乃キャンノン（机）が飛んでくる。

——うん、死んだね、これ。

今日の夕刊一面総取り確定だね。

『高校一年生男子、クラスメイトにより殺害。

死体は原形を留めておらず、同じクラスの生徒は口々に悲しみの声を漏らす』

「スイカ割りでした」「やられたマ・オでした」「砕けたメ・トスでした」

「メ・トス入れたコーラでした」

死因は確実に圧死だね♪（キラッ）

我ながらキモ——

ガッシャアアアン!!

「……………」

ああ、里乃まだ怒ってるよ、理由が分からないけど。
——ってあれ？僕、生きてる……？僕生きてる！？

「……………ふう」

間一髪、僕と里乃キャノン（机）の間に割って入ったのは、

——なんとあのボーデヴィツヒさんだった。

その体には『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏っている。
僕をスイカ割りにする予定だった机はAICによって止められ、今は床に無惨に落ちている。

「助かったよ、ありがとう。ボーデヴィツヒさん。ISはもう治ったの？」

「……コアはかるうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した。それと、ラウラで構わない」

「あ、うん。ラウラ——むぐっ!？」

「んっ……」

いきなり、いきなりだ。

いきなり僕はボーデヴィツヒ……もといラウラに胸ぐらを掴まれ、そのまま引き寄せられ、そして——唇を奪われた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

青天の霹靂。え、なに、どういう事？

わけがわからないよ！

僕を含めた全員が呆然とするなか、ラウラが唇を離して声高らかに宣言した。

「お前は、私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「え」

[illegible]

この宣言の後、僕はかなり酷い目にあっただけど……思い出したく無いので省略！！

第三十話：転校生（？）と嫁宣言！？（後書き）

次回、第三十一話：デレ黒兔？

第三十一話：侵入者は兎？（前書き）

かなり間をあけた癖にこの体たらく……スイマセン

第三十一話：侵入者は兎？

「ん……………」

朝、か……………」

閉めたカーテンの間から差す朝日が、長い微睡みから意識を覚醒させる。

枕横に置いてある携帯で時刻を確認。

五時三十分。

いつも通りの時間だ。

「ん……………」むにゃ」

隣のベッドでは幸せそうな顔でシャルルが寝ている。

山田先生に懇願して部屋を変えないように、『秘密裏』に話し合いをしたらしい。

ふに……………」

「……………」

さて、そろそろ起きて顔を洗って……………」

ふにふに……………」

「ん……………」

「……………」

よし、現実逃避は止めて……。

「何でここに居るんでしょうか、ラウラさん……？」

「む……朝か」

「朝か、じゃないでしょう！なんでここに居るの！？そして何故裸！？」

即座にベッドから降り、ラウラに布団を被せる。この間およそ五秒。

「順に答えよう。日本ではこういった起こし方が一般的と聞いたからだ。何故裸なのかと言えば、夫婦とは包み隠さぬものだと言いたからだ」

「その知識を吹き込んだ人は一体誰なの？」

確実に真緒と話が合うだろう……

「しかし、効果はてきめんのようだな」

「？」

「目は覚めただろう」

「当たり前でしょ……」

これで目が覚めない人がいたらその人はよほど低血圧か鈍いかのどちらかだよ。

「しかし、朝食までにはまだ時間があるな」

一度束ねた後ろ髪をふぁさつと散らす。

朝日を受けて輝く銀髪が、とても綺麗に見えた。

（にしても、先月のトーナメントからちよくちよくこういうことするから困ったな……）

今回みたいな過剰なヤツを除けば別にいいんだけど……この前みたいに入浴中に現れるのは勘弁してほしい。

「……………」

うーん、どうしたものか。

「どうした？って急に頭を撫でるな！うう……………」

ま、いつか。

「やっぱりラウラの髪って気持ちいいね」

「あ、あう……………」

ラウラの髪はなんて言うか……絹糸の束を触ってるみたいで癒される。

そして頭を撫でると毎回ラウラは大人しくなる。

「ふう、落ち着いた……………」

「と、突然頭を撫でるな！びっくりするだろう……………」

「その割には大人しく撫でられてたよね」

「うつ……」

「とりあえず、服を着て。そろそろ皆起きてくるから。その後、朝御飯食べに行こうか」

「う、うむ……」

ぽん、と頭を軽く叩くとラウラは布団を頭まで被ってベランダから出ていった。

その様はまさしく布団妖怪。

「ふう、一難さった……」

「おはよう、真琴」

「……………」

一難去つてまた一難……昔の人は良いこと言うな……

「…………おはよう、シャルロット」

「何か言うことは？」

「ごめんなさい」

不機嫌なシャルロットには即謝罪。これ、テストに出ます。

「……」

時間が過ぎ、現在一年生寮食堂。
なんだかんだで僕、シャルロット、ラウラの三人で朝食を取っている。

メニューは僕が焼魚定食、シャルロット、ラウラはパンとコーンスープ。

んゝ久々にパンも良いかも。

「ん、欲しいのか？」

僕の視線に気付いたラウラが「わけてやろっ」と言って自分の口にパンを持って行く。

「よし、かじっていいぞ？」

「だが断る！」

「何故だ！」

「僕が恥ずかしいからだ！」

「なん……だと……」

「いや、何このやりとり」

「気にするな」

「気になるよ」

「……」

「……とりあえず、食べよう」

「そうだね（だな）」

三人頷いて食事を再開する。オチ？そんなもの有りません。

第三十一話：侵入者は兎？（後書き）

次回、放課後の約束

第三十二話：放課後の約束（前書き）

あれ？学校の方が集中して執筆できるぞ……？

第三十二話：放課後の約束

放課後、夕暮れに染まる廊下を僕とシャルロットは歩いている。
職員室まで課題を提出に行った帰りだ。

「ん、ん〜！ やつと終わった〜」

「お疲れさま、真琴」

「それはお互い様でしょ？」

「それもそうだね」

廊下を抜けて下駄箱へ。

今日は時間が時間なので訓練はやらない。

あ、そういえば。

「シャルロット」

「ん？」

「ん〜、いや、この前『二人きりの時はシャルロットって呼んで
って言うてたでしょ？』」

「うん」

「でもさ、翌日からシャルロット・デュノアって名乗っちゃったか
ら約束の意味合いが皆無だね」

「た、確かに……」

それは最初に気付くべきでは……？

「で、でも、それは……その……真琴に、見てほしかったから……。だから、ふたりきりの時だけ女の子っていうのも変っていうか、卑怯っていうか……と、兎に角っ、真琴が原因なんだよ？」

「そ、そうなの。その、スイマセン」

「べ、別に謝られる事でもないけど……」

そういつて、シャルロットはぶいっとな顔を明後日の方向へ向けてしまふ。

その頬は夕日のオレンジの中でも際立って見えた。

「でも、さ。ちゃんとシャルロットのことは女の子って見てるよ」

「えっ？それって……」

「最初は確かにびっくりしたけどさ」

校舎を出て寮への道を歩く。

「でも、可愛らしいところもあるし、ん〜、上手く言えないけど、シャルロットは女の子なんだって、理解してるつもりだよ。……って、シャルロット？」

シャルロットを見ると仄かに赤かった顔が真っ赤になっていた。はて、僕は何か聞いてて恥ずかしいことでも言っただろうか。

「かわ、かわいい……ブツブツ」

「おーい、シャルロット」

「ハッ！」

どうやら戻ってきたようだ。

「話を戻すけど、呼び名が普通になったので、なにか別の呼び名を考えようかな、と」

「えっ。い、いいの？」

「シャルロットが良ければ」

僕の答えにシャルロットは直ぐに縦に首をふる。

「う、うんっ。全然大丈夫！お、お願いします！」

「そんな承らなくても。んっ……」

思案する僕をじっとシャルロットが見てくる。

流石に恥ずかしいな……。

「そうだね。すこし安直だけど、シャル、なんてどう？呼びやすい

し、親しみやすいし」

「シャル……。うん！いいよ！すっげえいいよ！」

「よかった、気に入ってくれて」

「ま、まあ、ね。シャル……。シャル、かあ。うふふっ」

さっきまでのシャルがハイテンションなら今のシャルは超ハイテンションかな。

っと、そうだった。忘れるところだった。

「そうだ、シャル。お願いがあるんだけど」

「うん？何かな？」

「水着買いに行くんだけど、一緒に行かない？」

「……………」

何故沈黙。

「…………それは女性用？」

「んなわけないでしょ！」

とりあえず、週末行くことになりました。

第三十二話：放課後の約束（後書き）

次回、デート（？）と追うもの！

第三十三話・デート(?)と追うもの(前書き)

明日は更新できそうに有りません m ((m

第三十三話：デート(?)と追うもの

「ん、いい天気!」

週末の日曜日。天気は快晴、素晴らしい。

来週から始まる臨海学校の準備もあって、僕はシャルロットと二人で街に繰り出していた。

「
」

何故かテンションが月光ちょゲフンゲフン絶好調なシャルロット——もといシャルである。

「……二人きり……ふふっ」

何だかよくわからないけど、今朝からこんな調子だ。キラキラというかホワホワというか、とにかく明るい表情をしている。

ちなみにシャルの服装は夏によく似合う半袖のホワイト・ブラウス。その下にはスカートと同じライトグレーのタンクトップを着ている。ふわりとしたティアドスカーはその短さもあって、健康的な脚線美を十二分に演出していた。

——正直言つて、可愛い。表情と相まってとても華やかに見える。

「機嫌良いね、シャル。何か良いことあったの?」

自販機で百円拾ったとか。

「うん、とっても良いことが今現在継続中だよ。百円も拾ったけど」

「拾ったんかい」

「冗談だよ」

ふふふつ、とまた花のように笑うシャル。

何でこんなテンション高いんだろつか。（貴方が原因です）

まあ、元気なのは良いことだし、気にしないでいつか。

「あ、そうだ」

「ん？」

「今日、付き合ってもらうお礼に何か奢るよ」

「いいの？」

「頼んだのはこっちだし、お礼も何も無いのは失礼でしょ」

「……………僕はこの状況だけでも十分なんだけどね……………」

「うん？」

「な、なんでもないよ!？」

よく聞こえなかったので聞き返したら慌てた反応を返された。

「え、えーと、じゃあ、駅前の専門店でパフェを奢って欲しいかな」

「ん、了解」

「あと……はい」

と、いきなり手を差し出された。
手を繋げと？

「うん」

視線を送ったら即答だった。

「それなら、はい。迷ったら大変だしね」

今日は日曜日だから、駅前はかなり混んでることだろう。

「……………」

って、何故シャルは急に黙ってしまったんだろ？
顔が妙に赤いし。

「顔赤いけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ！？」

顔を覗き込むとめちやくちや驚かれた。何故。

「大丈夫なら良いけど……」

「平気っ、大丈夫っ！いい、行こっ！」

「っと、シャルそんなに慌てなくても……」

急に歩き出すシャルに引つ張られる形で僕も駅前へと進む。
握ったシャルの手に変にドキドキしてしまった。

「……………」

「……………」

駅前へと向かって歩き出す真琴とシャルロツト。
その姿を物陰から見つめるふたつの影があった。

二人が青になった横断歩道を渡って人混みに消えると同時、茂みから姿を表す二つの影。ひとりは淡い桃色の髪、ひとりは流れる銀の髪。

つまり、里乃（久しぶりの登場）とラウラであった。因みに同室の仲である。

「……なあ、ラウラ」

「……なんだ、里乃」

「……あーりゃ、手え握ってないか？」

「……握ってるな」

ラウラの返事に里乃は静かに頷く。
そして、

「こりゃ、追跡しかないな……」

スチャツ、と懷からサングラスを取り出し装着する。
髪型と髪の色でバレバレなのだが。

「その必要性は？」

「……敵情視察ってヤツさ」

「なるほど、ならば」

スチャツ、とラウラも同じくサングラスを以下略。

「よし、ではラウラ。作戦を説明する。

目的は真琴及びシャルロットの追跡だ。

本人らにバレないように追跡し、二人の行動を監視する。
いいな？」

「了解」

「よろしい、ならば 追 跡 開 始 ツ！」

「作戦を開始する」

何気にノリノリな二人だった。
というか端から見れば不審者感マックスな二人であった。

第三十三話：デート(?)と追うもの(後書き)

次回、第三十四話：水着と試着とまさかの遭遇

第三十四話：水着とまさかの遭遇（前書き）

ガイドラインに引っかけられなければいいな……

第三十四話：水着とまさかの遭遇

「えーっと、水着売り場はここかな」

僕は駅前前のショッピングモール、その二階にいた。

交通網の中心でもあるここは電車に地下鉄、バスにタクシーと何でもござれと陸路勢揃い。

市の何処からでもアクセス可能、そして市の何処へでもアクセス可能なのだ。

そして、駅舎を含んで周囲の地下街すべてと繋がっている当ショッピングモール『レゾナンス』は『ここでなければ市内の何処にも無い』と言われるにふさわしい品揃えと店舗数を誇っている。

中学の帰りに良くここで買い物したっけ。

「ところでシャルも水着買うの？」

「そ、そうだね……あの、真琴はさ、その……僕の水着姿、見たい？」

「う、うーん……それは、まあ……シャルなら何でも似合うだろうし……」

正直な感想を返す。

仕方ないじゃない、男の子だもの。

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、せっかくだし新しいの買おうかなっ」

繋いだ手に軽く力を込めながら、シャルが何度か頷く。

その様子を見て思い出す。

中学の時、プールで溺れかけた事を。

「……………」

「ちょ、真琴っ、どうしたの!？」

「いや、うん、過去のトラウマが少し……気にしないで。じゃあ、男女で売り場が違うし、一旦ここで別れようか」

「あっ……………」

手を離したら、何故かシャルは妙に心残りのあるような声を漏らした。その後、じーっと僕の方を見てくる。

「えーと、どうかした？」

「あっ、ううん。なんでもないよ」

「そっか。じゃあ、とりあえず三十分後にまたここで」

「うん、わかった」

こくりと頷いて、シャルは女性用の水着売り場に向かう。色とりどりの水着が並んでいるそこは夏を感じさせるには十分な雰囲気だった。

「つと、僕も水着選ばなきゃ」

一応、義父さんからの仕送りと貯金でそこそこの軍資金はある。

にしても、水着なんてこうして選ぶの久しぶりだなあ。

奇抜な色合いが多いけど、僕は白地に黒のラインが一本入った水着を手に取る。

レジに持っていったら店員さんに首を傾げられた。なんで。

（約束の時間までまだあるな……ま、いっか。先に戻って待ってよう）

そう思って先程シャルと別れた場所に戻ると、意外な事に既にシャルが立っていた。

「あれ？早いね、もう終わったの？」

「あ、ううん。ちょっとね、真琴に選んで欲しいなあって思って」

「りょくかい。じゃあ行こうか」

そう言ってシャルを先頭に女性用水着売り場に入る。

しかし、覚悟していたとはいえ……気まずい。

でも、シャルに意見を求められてる訳だし、我慢我慢と……。

日曜日ということもあり、そこそこ女性客の姿が目につく。

流石に気付かれるかと思っただけど……。

「その可愛らしいお客様」

どうやら変な意味で気付かれたみたいです。

「えっと……僕、ですか？」

思わず返してしまった。

現れた店員さんは一つ頷いた。

「はい、左様でございます」

「僕に何か……」

シャルの方を見ると少しムツとしている。マズイ、直ぐにこの状況を脱しなければ……。

「はい、アナタの様な可愛い『女性』にオススメの水着があります——」

……女性？

「僕は男です!!」

「はい？」

「ですから、僕はれっきとした男なんですって」

「………ありえない」

いや、性別間違えるそつちがあり得ない。

「あり得てたまるかこんな現実……っ！」

そんな捨て台詞を吐いて店員さんは奥に引っ込んでしまった。

その場にいた人が全員呆然となった。

「えーと、水着見ようか」

シャルの一言に漸く人々に動きが戻った。

「そうだね」

なんか、変に疲れた……。

そして、

「えー、シャル。一つ質問が」

「な、何かな？」

「何故僕も一緒に試着室に居るのでしょうか？」

何故か僕はシャルと一緒に試着室に入っていました。

「ほ、ほら、水着って実際に着てみないとわかんないし、ね？」

ね？と言われても困るんだけど……。

「す、すぐに着替えるから待っててっ」

「それなら一回外に――」

「だ、ダメ！」

いや、ええ……。

「だ、大丈夫。時間はかからないから」

言うなり、いきなりの上着を脱ぎ出すシャル。

「うわあっ!？」

僕は慌ててシャルに背を向ける。

あ、危なかった……。

狭いボックス型試着室の中にシャルと二人きり。しかも背中越しに衣擦れの音のオプシオン付き。

マズイ……主に僕の心臓が。

「あ……シャル？」

「な、何？」

「……何でも無いです」

改めてどうしてこうなったのか訊こうと思ったけど、何となくためらってしまった。

「ん……」

ぱさり、と何か軽い物が置かれたような音が聞こえる。
もしかして——いや、考えるな。何も考えるな！
あああつ、シャルは一体何がしたいんだ！

（うつつ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう……）

というのも、こうなったのはシャルロットが追跡してくる不審者（
里乃・ラウラ）の存在に気付いたからである。

理由は至って単純。姿で分かった。

ラウラはまだしも里乃は髪の色が目立つので一発でバレた。

ラウラもそれについていくような動きだったので、また然り。

（ん……。二人とも諦めて帰ってくれないかなあ）

今は真琴とふたりきりでの外出——即ちデートである。真琴本人が
どう思っているかはこの際置いて、シャルロットは心の底からそう
だと主張したいのであった。

流石は花も恥じらう十代乙女の行動力。
げに恐ろしきは恋の力か。

（で、でも、流石に同じ個室で着替えるのはやり過ぎたかなあ……）

ぼつと顔を赤くしながら、背中越しに真琴の姿を確認する。向こうも対応に困っているようで、さっきからうつ向いてモジモジしている。

妙に似合うから驚きだ。

（うつつ……。へ、変な子だって思われてないよね……。？）

いくらなんでも、異性と同じ個室で仕切り無く着替えているのである。

しかも、一度完全に裸になるのだから、恥ずかしくないわけがない。ぎゅっと、胸元のアクセサリ——IS『リヴァイヴ』の待機形態である十字マークのついたネックレス・トップ——を握りしめる。

（で、でも、真琴って超弩級の鈍感だし、これくらいしないと……ああもうっ、勢いでしちゃえ！）

シャルロットは真つ赤になった顔でそう決意を固めると、下着を脱いであしから抜き取る。

そして裸になった体に水着をまもっていった。

「い、いいよ……」

「う、うん……」

見てもらう為に着替えたので当然なのだが、早速真琴の視線を体にかけてシャルロットは落ち着かなくなる。

誤魔化すように組んだ指をモジモジと動かして、真琴の感想を待つ。

「……………」

肝心の真琴と言えば、密室でふたりきり↓生着替え↓水着御披露目の普通の男子なら恐らく獣になるであろうデスコンボに困っていた。——というより、照れていた。

（ま、真琴ったらなんで黙ってるんだろう……。水着が変だったかな？あ、改めて見ると、これって結構大胆な水着……）

セパレートとワンピースの中間のような水着で、鮮やかなイエローは夏を意識させる。

「あ、あの、一応もう一つあって……」

「い、いや！それ、良く似合ってるよ！そ、その……綺麗だし。それが、いいんじゃないかな……？」

流石に再度あのデスコンボをくらったら堪らないと思った真琴は恥ずかしがっていた率直な感想を吐露した。

しかしてその発言に裏表がないのだから鈍感は恐ろしい。

一方その感想を聞いたシャルロットは、

「~~~~っ」

テンションが限界突破した。

「じゃ、じゃあ、これにするねっ」

「う、うん。それじゃあ僕は出てるから」

シャルロットに引き留められる前に試着室を出ようとドアを開ける真琴。

ガチャ。

「え」

「えっ？」

「ええっ？」

なんと、ドアを開けた場所に立っていたのは一組副担任の山田真耶先生その人だった。

そして、後ろでは状況に気がついた千冬が溜め息と共に頭を押さえる。

「何をしている。バカ者が……」

次の瞬間、軽いパニックに陥った山田先生の悲鳴がこだましたのだった。

第三十四話：水着とまさかの遭遇（後書き）

次回、第三十五話：選択と兔について

第三十五話：選択と兎について（前書き）

ああ、早く戦闘パートに行きたい……

第三十五話：選択と兎について

「はあ、水着を買いにですか。でも、試着室に二人で入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「す、すみません……」

山田先生の言葉に素直に謝る。

いや、もうこれは弁論の余地なんてないしね。

「ところで山田先生と千冬さ——織斑先生はどうしてここに？」

話題を逸らすついでに疑問点を解消しよう。ナイス僕。

「私たちも水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中では無いですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

しかし、そうは言っても……ねえ。山田先生はともかく千冬さんは多少カジュアルめではあるものの、ビシッとサマースーツを着ているわけで。

特に他の人の目があるところで『千冬さん』と呼ぶと、また色々怒られそうだ。

ところで——

「そろそろ出てきたらどう？」

ギクウ！という音が聞こえた気がする。多分気のせいだけど。

「そ、そろそろ出ようかと思ってたんだけどね」

「タイミングを見計らっていたのだ」

という訳で柱の影から二名登場。

「何をコソコソしてるんだろう、って気になってたんだけど」

「女子には男子に知られたくない買い物があるのさ」

「右に同じ」

ええ……。というかり乃と一緒にだとなりがいいなウラ。

「さっさと買い物を買わせて退散するでしょう」

ふう、と溜め息混じりにそういったのは千冬さんだった。

手にしているのはどうやら水着で、千冬さんも山田先生同様に土壇場準備らしい。

「あ、あー。私ちよつと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所が分からないので田並さんとボーデヴィツヒさん、ついてきて下さい。それにデュノアさんも」

う、うん？いきなりどうしたんだろ山田先生は。何か『我、天啓を得たり』みたいな顔をしたかと思ったたら有無を言わず生徒三人を連行して行ってしまった。

となると、この場に残されたのは僕と千冬さんだけで、変な沈黙が数十秒流れた。

「……まったく、山田先生は余計な気を遣う」

「え？」

「こつちの話だ、気にするな」

「はぁ……」

よくわからないけど、気にしない事にしよう。

「でだ、真琴」

「はい」

「どっちの水着が良いと思う？」

そういつて千冬さんが見せたのは専用のハンガーにかけられた水着二着。

色は白と黒。そしてどっちも露出が高い。

（これは……黒かな）

イメージカラーにピッタリだし。

「黒の方で」

「その答えを待っていた」

「ええ？」

「一夏の奴は余計な心配をして白を選んだしな。これで意見が固まった」

「はぁ……」

相変わらず、我が道をいつてるなあ……。

「そういえば千冬さん」

「なんだ」

「義父とはどうですか」

スパァン！

言った瞬間頭を叩かれた。何故。

「余計な事は言わんで良い。次言ったら単位引くぞ」

そんな理不尽な。

「私のことはいいとして……。お前の方はどうなんだ」

「え、僕？何がですか？」

「何が、ではない。お前は彼女を作らないのか？幸い学園内には腐る程女がいるし、よりどりみどりだろう？」

よりどりみどりって……。いや、まあ、確かに皆美人だけど。

「そうだな……。ラウラなんかはどうだ？色々問題はあるだろうが、あれで一途なやつだぞ。容姿だって悪くはあるまい」

「それは、まあ……。そうですね」

「それに、キスした仲だろう？」

「ぶふっ」

今、ここですいませんか。

狼狽する僕がそんなに面白いのか、さっきまで苦笑いだった千冬さんはいつの間にか微笑をたたえていた。

「まんざらでもないか？」

「いや、そういうのは、まだ……。よくわかりません」

「ふむ、そうか。容姿は好きな方か？嫌いな方か？」

「それは……。うーん。えと、その……。可愛いと思います」

「ほっ」

「ラウラはあれでいて結構可愛い——って、ハッ！？」

「ほっほっ……」

うわ、千冬さん凄くニヤついてるよ……。ああ……。恥ずかしい……

「まあ、何にしても私の心配をする前に自分の方をどうにかするんだな。私はまだ、弟子に気を遣われるような歳ではないさ」

「うう……。わかりました。変な心配はしません。これでいいですよ?。」

「ああ、それでいい」

再度ニヤリと笑って、千冬さんはレジの方に歩いていく。
突然フリーになった僕はどうすればいいかわからなくなり、少し我が身を持て余した。

第三十五話：選択と鬼について（後書き）

次回、第三十六：赤くなる黒兎

第三十六話：赤面黒兎と到着（前書き）

感想お待ちします

第三十六話：赤面黒兎と到着

時間は少しさかのぼる。

山田先生に連行された里乃、ラウラ、シャルロットだが、真琴の事が気になったラウラはトイレに行くと言って水着売り場へと戻って来ていた。

（ふむ。そういえば私も水着を持っていなかったな）

千冬と真琴の様子を少し離れた所から見ながらラウラはふと思い出す。

しかしまあ学園のものがあるから別にいいかと考える。

ちなみに、IS学園の指定水着と言うのは絶滅危惧種を通り越して保護指定種へとランクアップした紺色の芸術ことスクール水着である。

ちなみに名札つき。

（まあ、泳げればなんでもいいだろう。あの水着は機能的に優れている。代わりの物は必要ないな）

そう思い、冷めた瞳で水着の列を眺めるラウラだったが、次の瞬間その白い肌が赤く染まった。

「ラウラは可愛いと思います」

いきなり、真琴の声が——その言葉が聞こえたのであった。水着に意識を向けていたところへの不意打ちである。

「……………」

突然の言葉に顔は熱を持って紅潮し、心臓は長距離を走りきったかのように早く脈打っている。

褒めるがいい——と何度も真琴に言っで、その都度褒められていたラウラだが、『可愛い』と言われたことはない。

そこへきて、突然のこの言葉なのだから、冷静沈着・ドイツの冷氷と呼ばれたラウラが取り乱すのも仕方のないことだった。

（か、かか、可愛い……？私が、可愛い？……可愛い）

意味もなくキョロキョロと周囲を見やっでから、ラウラは胸に手を当てて瞼を閉じる。それは普段なら必要としない意識の集中法で、コールする番号を何度も間違えながらラウラはISのプライベート・チャンネルを開いた。

「海っ！見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げた。臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射する海面は穏やかで、心地よさそうな潮風にゆっくりと揺れていた。

「久しぶりだなあ、海を見るの」

「う、うん？そうだねっ」

「？」

バスの隣の席になったのはシャルだった。

バスが発してからずっとこんな感じで、今も、返事だけしてすぐにまた手元を見ている。

反対側の列では一夏がハイテンションになって、篤さんがそれをいさめている。

「それ、気に入ってくれた？」

「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ」

左手首にシャルがしているブレスレットは、先日 of 買い物に付き合ってくれたお礼に僕がプレゼントしたものだ。

シャルは黄色に白のラインが入ったそれをにこにこ眺めては、時々思い出し笑いでもするかのように笑みを漏らす。

それにしても、こうまで気に入ってくれると、もう少し高いもの選べば良かったかな。

そもそも『真琴が僕に似合うと思うのを選んで』と言われて選んだけど、それでよかったのかな。

「うふふっ」

ものすごくご機嫌だ。

「まったく、シャルロットったら朝から随分ご機嫌じゃないか」

僕とシャルの座る席の後ろ、里乃が若干むすつとした顔で言うてる。

「うん。そうだね。ごめんね。えへへ……」

里乃の言葉もなんのその、笑顔で返すシャル。
ここまでご機嫌だと逆に少し怖い。

そんなに海が楽しみなのかな？（何故そうなる）

「あん時帰りに途中でふたりだけで抜けたと思ったら、まさかプレゼントとは……不公平だ」

「えー、と……まあ、うん。里乃にはまた今度の機会にね？」

どうも里乃もプレゼントが欲しかったみたいだ。そんなに拗ねなくても。

「や、約束だぞ？」

「うん。あんまり高いのはダメだけどね」

そう言うの一つ頷いて引き下がってくれた。

「……………」

にしても、不思議なのは里乃の隣ですーっと大人しくしているラウラである。

体調でも悪いのか、ときどき周囲をキョロキョロ見ている。

「大丈夫？昨日合流したときからずっとそんな感じだけど」

「……………」

「おーい、ラウラー」

余りにも反応が無いので、振り向いてその顔を覗き込む。

「！？なっ、なんっ……………なんだ！？ち、近い！馬鹿者！」

「うにゅ」

鼻を手のひらで押し返されて、思わず変な声が出してしまった。どうも風邪でも引いたのか、ラウラの顔は僅かに赤みがかっていた。

（まあ、心配しなくても意外と体調管理しっかりしてるし、大丈夫かな）

その後、少し雑談をシャルや一夏としていると、千冬さんが立ち上がり声をあげた。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席の座れ」

千冬さんの言葉に全員がさっとそれに従う。指導能力抜群だ。

言葉通り程なくしてバスは目的地である旅館に到着した。バスの窓から見える旅館の入り口には、

『花月荘』

という看板がかけられていた。

第三十六話：赤面黒兎と到着（後書き）

第三十七話：挨拶と天才（天災？）登場！

第三十七話：挨拶と天才（天災？）登場！（前書き）

なんとか更新できた……

第三十七話：挨拶と天才（天災？）登場！

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「……よろしく願いします」

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶をする。

この旅館には毎年お世話になっているらしく、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

歳は三十代くらいだろうか、しっかりとした大人の雰囲気漂わせている。仕事柄笑顔が絶えないからなのか、その容姿は女将という立場とは逆に凄く若々しく見えた。

「あら、こちらが噂の……？」

ふと、僕と一夏を見た女将が千冬さんにそう尋ねる。

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってますって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子達じゃありませんか。二人ともしっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけです。挨拶しろ、馬鹿者」

ぐいつと押さえられる。いや、今しようとしたんですよ。本当に。

「お、織斑一夏です。よろしく願いします」

「香我美真琴です。よろしく願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

そういつて女将さんはまた丁寧なお辞儀をする。

その動きは先程と同じく気品のあるもので、こういう大人な女性に耐性の無い僕としてはすこし緊張してしまう。

一夏も同じなのか、体が固まっていた。

「不出来なやつらでご迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生つたら、随分厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

いや、それほどじゃないと思うんですけど……。

でも事実な部分もあるので否定はできない。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければ何時でも従業員に聞いてくださいまし」

女子一同は、はいと返事をするときさま旅館の中へと向かう。とりあえずは荷物を置いてからかな。

ちなみに初日は終日自由時間。

食事は旅館の食堂にて各自とるようにとされている。

「ね、ね、ね。おりむ、まこちい」

うぐ、この呼び方は間違いなくのほほんさんだ。

一夏とそろって振り向くと例によって異様に遅い移動速度でこっちに向かってきた。

眠たげな顔は、たぶん素。

「二人って部屋どこ？一覧に書いてなかった。遊び行くから教えて」

その言葉で周りにいた女子が一斉に聞き耳を立てるのがわかった。でも、僕と一夏の部屋なんて聞いてどうするんだろ。面白いことなんて何もないと思うけど。

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないの？」

「右に同じ。良くて休憩室のソファじゃないかな」

「わ、それはいいね。廊下なら床つめたいし。ソファならふかかだし」

夏だし廊下はちょうどいいのかも。いや、翌日が大変だ。

ちなみに女子と寝泊まりさせるわけにも行かないというわけで、僕と一夏の部屋はどこか別の場所が用意されるみたいだ。

山田先生がそう言ってただけで、明確では無いけど。

「織斑、お前の部屋はこっちだ。ついてこい。香我美は山田先生についていけ」

「はい、んじゃ真琴、のほほんさん、また後で」

「それじゃ、僕も行こうかな。また後で」

のほほんさんの『おゝ、また後で』という声を聞きながら僕は山田先生のもとに向かった。

「山田先生、僕の部屋ってどこになるんですか？」

「私の部屋です」

「はい？」

廊下を進みながら山田先生に聞くと、そう返された。
おかしい、聞き間違えかな？

「先生、もう一度お願いします」

「私の部屋です」

「……………」

な、なんだっ（ry

僕が内心驚いていると、山田先生がある部屋の前で止まった。
部屋のドアには堂々と『教員室』と書かれた張り紙が。

「最初は個室という話だったんですが、それだと絶対に就寝時間を

無視した女子のみなさんがおしかけるかもしれないので、私がこのようにしました」

「はぁ……」

「流石に織斑先生も二人も見れないとの事で、私が香我美君と同室になったわけです」

「なるほど」

確かに教師と一緒にの部屋なら女子の皆もおいそれと近寄れない……はず。

「うう、自分で言い出した事とはいえ、やっぱり恥ずかしいです……」

「？」

山田先生を先頭に部屋に入る。

「ふえー、広いですねー」

本当に二人部屋かと言いたくなるくらいに広々とした間取りで、大きな窓の向こうには綺麗な海が見える。

「一応、大浴場も使えますけど香我美と織斑君は時間交代になります。本来は男女別なんですが、それだと女子の入浴が大変になってしまうので……」

「わかりました」

赤面しつつ山田先生は説明してくれた。

「顔赤いですけど……大丈夫ですか？」

「え、あ、だ、大丈夫ですっ！」

聞くと慌てて返された。本当、どうしたんだろう。

「あ、私はこれから仕事ですので、香我美君は自由に行動して下さいね！ではっ」

「あ、山田先生！？」

赤面したままそう言い残して山田先生は部屋から出ていってしまっ
た。
うゝむ。

「……とりあえず、海に行こうかな」

僕は小さめのビニールバックに水着とタオル、それと替えの下着を
入れて、部屋を出た。

「「「「.....」」」」

僕とシャル、それに一夏と箒さんは更衣室のある別館に向かう途中、
ばったりと出くわした。
それはまあいいとして。

四人揃って外の地面、そこにあるものを注視した。
それは、『ウサミミ』だった。
『引っ張って下さい』の張り紙つき。

「一夏、僕の気のせいかな？ テレビで一度見たことのある耳が見えるんだけど」

「気のせいじゃない。現実だ」

「これはどこからどう見ても.....ねえ」

「なあ、箒、これって——」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

一夏が言い切る前に即否定。
となると——。

「えーと.....抜くぞ？」

「好きにしろ。私には関係ない」

そう言っ箒さんはすたすたと歩き去ってしまった。

結局気になったのか、一夏がウサミミを引つ張った。

すぽっ。

「のわっ!？」

耳の下になにかあるのかと思っただけ、何もなく。
力の余った一夏が盛大にコケた。

「いてて……」

「何をしていますの?」

「一夏がウサミミを抜いた」

「お、セシリアか。いや、今このウサミミを……あ」

一夏の声に僕とシャルは一夏を見る。

その頭の位置はちょうどセシリアさんのスカートの少し手前だった。

「!?!い、一夏さんっ!」

一夏の視線に気付いたセシリアさんが、ぱつとスカートを押さえて
後ずさる。

うわ、速いなあ。

「す、すまん。その、だな。ウサミミが生えてて、それで……」

「は、はい?」

セシリアさんが若干混乱した声を上げた、その時。

キィィン……………

何、この何かが高速で向かってきてるような音……………って、

「皆、上っ！」

「「「え」「」」

シャルの言葉に上を向いた瞬間。

ドカーーン！

空から巨大なニンジンが降ってきた。

「「「に、にんじん……………？」「」」

四人同時にそう漏らす。しかも、人参は人参でもデフォルメされた人参……………というかこれは一体何！？

「あつはつはつ！引っかったね、いつくん！」

そんな声と共に人参が割れ、その中からある人物が現れた。

それは、IS開発第一人者にして稀代の天才・『篠ノ之 束』その人だった。

第三十七話：挨拶と天才（天災？）登場！（後書き）

次回、第三十八話：海とバスタオルおぼけ

第三十八話：海とバスタオルおばけ（前書き）

中途半端になったかな……

感想お待ちしておりますm（
|（
|）m

第三十八話：海とバスタオルおばけ

「あつはつはつ！引っかかったね、いつくん！」

「「「「「……………（。□。）「「「「」

突如飛来した巨大金属製にんじんから現れた世に有名な天才に僕は啞然となる。

いや、もう正直言って何もいえない。

篠ノ之束、IS開発の第一人者にして稀代の天才。

なんでこんな所に…………？

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

格好はと言うと、不思議の国のアリスそのままで、一夏の手からウサミミを取ってすぐに装着。

一人不思議の国のアリスの完成だ。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいつくん。篝ちゃんはどこかな？さつきまで一緒……………ん？」

篠ノ之博士が言葉を切って僕を見る。

「えーと…?」

「……ま、いつか。篝ちゃんを探さないとだから、またねいっくん。それと……香我美真琴君」

「っ、なんで僕の名前を――」

問いただそうとした時には既に篠ノ之博士は走り去ってしまった後だった。

「……何で、僕の名前を……」

答えを訊こうにしても本人の姿は既になく、僕らは少し呆然とした後、少しの疑念を残しながら着替えにいった。

「あ、織斑君に香我美君だ!」

「う、うそっ! わ、私の水着変じゃないよね!? 大丈夫だよね!？」

「わ、わゝ。二人とも体かつこいいゝ。鍛えてるねゝ」

「二人とも、あとでビーチバレーしようよ」

「おー、時間があればいいぜ。な、真琴」

「うん、僕は構わないよ」

更衣室から浜辺に出てすぐ、丁度隣の更衣室から出てきた女子数人と会った。

皆、可愛い水着を身に付けていてその露出度に照れてしまう。

砂浜に向けて一歩踏み出す。

「あちちちっ」

「サンダル履かないからだよ、もう」

隣で裸足だった一夏が熱い砂に足の裏を焼かれたのか片足飛びで悶える。

「それじゃ、僕は」

「おう、また後でな」

一夏と別れて一人波打ち際ではなく適当に立てられたパラソルの下に座る。

何となく、海を眺めたくなつたからだ。

「……………」

聞こえる喧騒と潮騒に耳を傾けながら目を閉じる。

心が癒されるような感覚にそのまま眠ろうかと思った時。

「あ、真琴。ここにいたんだ」

ふと、声に呼ばれて振り向いた瞬間、一瞬どころか刹那で眠気が吹き飛んだ。

まず、シャルが居る。水着がとても似合ってる。それはいい。でも、問題は……

「……………シャル、その隣のバスタオルの塊は？」

シャルの隣にいるバスタオルおばけだ。

バスタオル何枚使用したのか見た目では分からないくらいの重装甲で頭の上から膝下まで隠れている。

そしてなにより動きがまるつきし某蛇。

「ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

この声、もしかして……

「ラウラ？」

「！」

いや、何故そこで某蛇のように跳ねる。

しかし、いつも自信満々なラウラにしては、随分弱々しい声のよう……。

シャルはシャルでなにやら説得を試みてるし。
全く状況が掴めないな。

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、真琴にみてもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」

「もー。そんな事言ってさっきから全然出てこないじゃない。一応僕も手伝ったんだし、見る権利はあると思うけどなあ」

そういえばラウラとシャルはあの一件（VTプログラム暴走）以来普通に仲がいい。

里乃とは同室だし、人付き合いが苦手なラウラにとっては二人はいい友人なんだろう。

「うーん、ラウラが出てこないなら僕も真琴と遊びに行こうかなあ」

「な、なに？」

「うん、そうしょ。真琴、行こっ」

言うなり、シャルは僕の手を取って波打ち際へと誘う。

「ま、待てっ。わ、私も行こっ」

「その格好のまんまで？」

明らか沈むね。

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

言うが早いか、バスタオルを全てパージして、水着姿のラウラが陽光の下に現れる。

その水着というのが――

「わ、笑いたければ笑うがいい……！」

黒の水着、しかもレースをふんだんにあしらったもので、大人びた印象を与える。

さらにいつも飾り気のない伸ばしたままの髪は俗にいうツインテールになっている。

「シャル、正直な感想言つてオーケー？」

「うん」

「可愛い過ぎる」

「なっ………！」

僕の言葉が予想外だったのか、ラウラが一瞬たじろいだあとそのまま赤面してしまった。

いや、可愛いものは可愛いんだから仕方ないよね？

「じゃ、社交辞令ならいらん………」

「いや、お世辞抜きで可愛いよ。ね、シャル?」

「うん。僕も可愛いって褒めてるのに全然信じてくれないんだよ。あ、ちなみにラウラの髪は僕がセットしたの。せっかくだからおしやれしなきゃってね」

「Good job・シャルも水着似合ってるよ」

「う、うん、ありがとう」

褒められて照れくさそうに髪を弄るシャル。

その手首には、先日プレゼントしたブレスレットが光っていた。

第三十八話：海とバスタオルおばけ（後書き）

第三十九話：プレゼントとバレ―

第三十九話：プレゼントとビーチバレー（前書き）

明日から冬休みだあっ！

第三十九話：プレゼントとピーチバレー

「それ、錆びたりしないかな？大丈夫なの？」

「大丈夫だ、問題ない……じゃなくて、大丈夫だよ。来る前にちゃんと保護コートしてあるし、後で塩水は洗い流すから。その、せっかく真琴がくれたものだしね」

えへへ、と笑顔で言うシャル。本当に気に入ってるんだ、それ。

「真琴」

「うん？」

さっきまでの声とは違う、いつもの落ち着き払ったラウラの声が僕を呼ぶ。

「ズルいぞ、それは。私にも何かプレゼントを……その、して欲しいのだが……」

う、里乃に引き続きラウラまでねだってくるとは。

「ま、まあ、何かの記念とかあればね。誕生日とかさ」

「む、そうか。では、機会があれば必ずくれ。絶対にだぞ」

「うん。でもあんまり高いのはダメだからね。僕も一応、学生だし」

「うむ。しかし、いずれは給料三ヶ月分というものを頼むぞ。部隊の仲間に聞いたが、日本では大事なプレゼントにはそれだけのお金をつぎ込むのだろう?」

「それは人生レベルで大事なプレゼントだね……」

うーん、どうもこの間違った(というか偏った)日本のイメージはラウラの仲間が言っているのか。

間違っではないんだけど、微妙にずれてる。

「ちなみに欲しい物ってある? ラウラって見た感じアクセサリーとかつけてないよね」

「そうだな。私はそういうものに、正直疎い。……し、しかし、だな。お前が選んでくれるのなら、なんであろうと嬉しいぞ」

「嬉しい事言ってくれるねえ。そうだね……チョーカーとか……あ、今の髪型だと耳が出るからイヤリングとか似合うかも。可愛いと思うよ」

「かつ、かわいっ……!?!」

いつもと違う髪型なのがやっぱり多少なりとも落ち着かないのかな。ラウラは僕の言葉に狼狽したような反応をして、両手の指をもてあそぶ。

「かつがみくーん!」

「さっきの約束! ビーチバレーしようよ!」

「チーム名は」

「リトル・バス。ーズだ!!」

「いやそれ野球だし」

さっき約束した女子と、その友達と、のほほんさんだった。しかし僕、もうちょっと人の名前を覚える努力をしないとダメだな……。

ビーチバレーは三対三で行う。

途中でメンバーを変更するのもあり。

僕らのメンバーは一夏、ラウラ、シャル、僕。

のほほんさん達のメンバーは、里乃と先程の二人とのほほんさん。

「んじゃ、お遊びルールで良いよね。タッチは三回まで、スパイク連発禁止、キリのいい十点先取で一セットね」

「了解。じゃあ、そっちのサーブで」

ぽーんとビーチボールを放って渡す。

受け取った女子（確か、櫛灘さん）の目がキュピーン!と光った。

「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を……見よ!」

む!いきなりのジャンピングサーブ!しかも、速度も角度も申し分

ない。

「任せて！」

そう言ってくれるのはシャルだった。さすが頼れる優等生。ここはお言葉に甘えよう。

「って、わあっ！」

どんっ！という音とともにシャルの悲鳴が聞こえる。振り向くと、ぼーっと立っていたらしいラウラとボールを追いかけたシャルが思いつきりぶつかったようだった。

「大丈夫っ！？」

「いたた……ラウラ、どうしたの？」

「か、かわ、可愛いと……言われると、私は……。ううっ」

僕と目があって、何故かボツと顔を赤くするラウラ。それから、なんと脱兎の如く逃げ出してしまった。

「え……。っておい、ラウラ！どうしたんだよ！？」

一夏が声をかけるも、それよりも早くラウラは別館の中へと消えていった。取り残されたのは僕と一夏とシャルと、ポカンとした女子三人。

「うーん、これはあれかな。かがみんの乙女心ブレイカーが作動中なのかな」

のほほんさんはそんなことを言っている。

ちなみにのほほんさんの着ている水着（と呼んでいいのかな？）は
要約すると、そのまんまピカチ。ウだ。

「うーん、まあ、続けよつか。ラウラの様子は後で見ておくよ」

「さんせーい」

そうしてラウラの代わりに一夏が入って、ビーチバレーが続いた。

「そーれっ」

身軽な動きでシャルがスパイクを決める。それを真横で見ていた僕はジャンプにつられて揺れる胸——いいや、僕は何も見ていない。見えていないぞ……。

（考えるな、無心になれ……雑念を………）

「はいっ！」

ボスッ

（……………無理です）

一度意識してしまうと、どうしてもそれが気になってしまう。しかも、向こうのチームの女子も跳ねるのだから……

「……………」

「どうしたの、真琴」

「いや、まあ……なんでもないよ」

シャルの声に心臓が大きく跳ねる。

僕は動揺を悟られないようにしたけど、ぎこちない笑顔になってしまった。

そんな僕の反応を見て、可笑しそうにシャルが微笑む。

「くすつ。変な真琴」

「ま、まあ、夏だから。熱も入っちゃうっていうか……」

「はいはい、サマーとサーマルをかけてるのは分かったよ」

「テンポあってんな、真琴とシャルロットは」

「「まあね」」

最近のシャルは僕の冗談に手厳しい。

『真琴の言いたいことはわかってます』というような態度は、なんというか、照れ臭い。

「あ、そろそろお昼の時間かな？二人は午後どうするの？」

「僕は一休みしてから軽く泳ごうかな」

「俺もだ」

「そつか。じゃあ、お昼に行こ。それと二人って結局どこの部屋だったの？」

「あー、それ私も聞きたい！」

「私も私も！」

「わたしも」。冷たい床情報は共有しよう

のほんさんの言葉に他の皆ははてな顔をしているけど、とりあえずそれは置いて。

「僕は山田先生の部屋」

「俺は織斑先生の部屋だ」

それまでワクワクとした顔をしていた女子一同がピシッと凍りついた。

まさかの展開に思考が止まったかのように。

「だからまあ、遊びに来るのは危険だな」

まあ、魔王の居城に踏み込むみたいだね。

山田先生の場合は……リスの巣かな？

「そ、そうね……。で、でも織斑君とは食事時間に会えるしね！」

「だね！わざわざ鬼の寝床に入らなくても——」

「誰が鬼だ、誰が」

ズドン！と何か音が聞こえた気がした。いや、気のせいじゃないのかも知れない。

一同、ギギギギ……と軋んだ動作で首を動かす。

「お、お、織斑先生……」

「おう」

あ、例の水着を着ている。

ラウラとはまた印象の違う黒の水着をバッチリと身に纏い、そのスタイルのいい鍛えられた体を惜しげもなく陽光に晒している。

大人の魅力という奴なのか、女子一同は色んな意味で圧倒されていた。

僕？いや気恥ずかしくて直視できません。

一夏はガン見してるけど。

「おりむゝ、鼻の下伸びてるゝ」

「なっ……！？そ、そんなこと有るわけ……」

「」「見とれてたくせに」「」

「うぐっ……」

まあ、否定出来ないよね……。僕は咄嗟に視線をずらしたから大丈夫だけど。

「そら、お前達は食堂に行って昼食でもとってこい」

「先生は？」

「私は僅かばかりの自由時間を満喫させてもらうつとしよう」

その言葉通り、教師陣には殆ど自由時間なんてないんだろう。
遠くの方では山田先生がはしゃいでいる。

「じゃあ、僕は昼食に行ってきます」

「集合時間には遅れるなよ」

「はい」

と、それだけ言ってその場を離れる。
ちょうど十二時を過ぎたところなので、僕達以外にも生徒達がぞろぞろと移動していた。

「織斑先生の水着見た？すっごくきれいー。かつこいいー！」

「あー、私もあんな風になりたいなあ」

「無理無理」

「や、やってみないとわかんないわよ！」

そんなきやいきやいとした感じで盛り上がっている。
そのまま水着姿のまま昼食とは行かないので、着替えの為に別館へと向かう。

「お昼御飯、なんだろうね？海だから刺身が出たりして」

「お、いいなそれ」

「お刺身！いいね、新鮮なのは大好きだよ」

ちなみにシャルはこんな感じで日本文化にもしっかりと適応している。

セシリアさんかというと『お、お魚を生で！？し、信じられませんわ……』とのこと。

ちなみにラウラは『安心しろ。私は生の食材を食べられる訓練を受けている。ジャングルで孤立無援になったときにも生き延びられるようにな』とか言っていた。

うん、そんな逼迫した状況じゃない。

（そういえば……）

朝あった篠ノ之博士の事を思い出す。

（ホント、何で僕の名前を知っていたんだ……？）

そんな事を考えながら、僕と一夏はシャルと別れて男子更衣室へと入った。

第三十九話：プレゼントとビーチバレー（後書き）

次回、第四十話：宴会場と夕食

第四十話：宴会場と夕食（前書き）

新年あけましておめでとーいぞいますm（――）m
本年度初話です。

感想お待ちしてます（^―^）

第四十話：宴会場と夕食

時間は矢のように過ぎ、現在七時半。

大広間を三つ繋げた大宴会場で、僕達は夕食を摂っていた。

「うん、うまい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなあ」

「確かに、IS学園って羽振りがいいよね」

ちなみに座席は、一夏の右に僕、シャル。左にセシリアさん。向かいの列の一番奥には篤さん……が恨めしそうにこっちを睨んでる。今は旅館のお決まりで皆浴衣姿である。

ズラリと並んだ一学年の生徒は当然正座。

そして一人一人に膳が置かれている。

メニューは刺身と小鍋、それに山菜の和え物が二種類。

さらに、赤だし味噌汁とお新香。

これだけ書くと普通のメニューだけど、なんと刺身がカワハギなのだ。

しかも肝つき。羽振りが良いにも程がありすぎでしょ。

「あー、うまい。しかもこのワサビ、本わさじゃないか。すげえな、おい。高校生のメシじゃねえぞ」

「……あ、ホントだ。このワサビの風味……市販の物じゃ有り得ないね」

「本わさ？」

「シャル、本わさつて言うのは、文字通り、本物のワサビをおろしたものの事なんだ因みに高級」

「えっ？じゃあ、学園の刺身定食でついてるのって……」

「あれは練りわさ。えーと、原料はワサビダイコンとかセイヨウワサビとかだったかな。あつてるよな、真琴」

「流石一夏、正解。一夏の言った材料を合成と着色をして、見た目と色が似ているんだ」

「ふうん。じゃあこれが本当のワサビなんだ？」

「うん。でも練りわさでも最近美味しいのが増えてきたんだ。店によつては本わさと練りわさを混ぜて出したりもするから」

「そうなんだ。はむ」

「「え？」」

シャル、今わさびの山食べなかった……？

「つ~~~~~~~~!!」

案の定、鼻を押さえて涙目になり、声にならぬ悲鳴をあげるシャル。

「ああ、シャル何してるのさ……ほら、お茶飲んで」

僕がお茶の入った湯呑みを渡すとごくごく飲み始める。

「だ、大丈夫？」

「……一瞬、故郷が見えたよ」

「大丈夫みたいだね……」

「いや、ダメだろ」

気にしたら負けだよ、一夏。

「あれ？」

「ん、どうしたのシャル？」

「えと、この湯呑みは……？」

シャルは今しがた僕が渡した湯呑みを見て首を傾げている。
シャルのお盆にはもう一つ湯呑みがある。

……あ。

「えと、焦って僕の飲みかけ渡しちゃったみたいだね」

「っ！ー！」（ボスン！）

僕が気まずいながらも答えると、途端にシャルは顔を真っ赤にしてみました。

「う、ごめんシャル……男の飲みかけなんて嫌だよね……」

「「「いやなワケがない」「」」

「にゃあ!？」

いや、何故他の皆が反応!？

と、騒いでいると沈黙していたシャルが声を上げた。

「……………か」

「か？」

「かかか間接キスしちゃったよおおおっ!!」

ボスンッ!

あ、爆発した。

……………て、間接キスう!？

「……………真琴、お前は俺の敵な」

「いや、何故ここでも。ろ色ネタ？」

「やらなきやいけない雰囲気を感じたんだよ」

「ええ……………」

というかさつき（シャルの魂の叫びあたり）から女子の方々からの

視線（という名の兵器）がすごいんだけど。

シャルは（。□。）こんな顔のまま固まっちゃったし。

一夏は素知らぬ顔でご飯を食べてるし。

（孤立無援ってこの事……？）

ま、まあ気にしない意向で……………

ふとセシリアさん

「っ…………っ…………」

苦行を成していました。本人曰く正座が苦手らしい。

一向に食事が進んでいない。

視線を戻してシャルを見ると未だに帰還していない。魂的な意味で一夏がセシリアさんと話している傍ら、僕はシャルを戻す（誤字にあらず）ことにした。

「シャル、戻ってこい」

「…………（。□。）」

ダメだ、帰ってこない。

ん、どうすれば。

あ、そうだ。

僕はあることを思い出し、早速実行する。

シャルの耳元に口を近づけ。

せいの。

「……シャル、起きて」

出来る限り甘く囁いてみた。

「わひゃあ!？」

「おはよう、シャル」

「お、おはよう……何か、甘い声が聞こえたような……」

「気のせいじゃない？」

なかなか起きない妹達を起こす最終手段とは絶対に言えない。

「うん……まあ、いつか。で、真琴」

「うん」

「さっきは気を失ったりしてごめんね」

「いや、それに関してはこっちこそ。原因作っただの僕だし」

「でも——」

「食事中に謝りあうっていうのも、なんか変でしょ？」

「うう……」

「ん……」

僕はお膳に乗った刺身を一切れとり、シャルにさしだす。

「はい、あゝん」

「え？」

「ちょっとしたお詫び。今回はお互い悪かったってことで」

困惑するシャルに説明すると、シャルは少し躊躇したあとパクツと刺身を食べた。

「……うう、真琴ってズルい」

「そう？」

「そうだよ」

ズルいことした覚えは無いんだけどなあ。

「あ、そうだシャル」

「うん？」

「後で部屋に来る？」

「山田先生と同室なんだっけ」

「うん。やっぱり、話とか色々したいし」

「う、うん！わかった！必ず行くよ！」

なんか急激にテンション上がったなあ、シャル。

「ああ、お料理美味しいねえ」

まあ、みんな手が込んでるしね。

（ん、この味噌汁赤味噌と白味噌ブレンドしてあるな……）

しかも双方高級品とみた。風味がいいし。だしは何を使ってるんだろ。

どうやら僕はつくづく家事向きみたいだ。

その後も味を分析しながら、食事を進めた。

第四十話：宴会場と夕食（後書き）

次回、第四十一話：マッサージと談笑

第四十一話：マッサージと談笑（前書き）

感想お待ちしてますm（
—
—）m

第四十一話：マッサージと談笑

「ふう……いい風」

時間は過ぎて、食後に温泉に浸かった後、僕は部屋で風を浴びていた。

火照った身体が程よく冷えていく。

「潮風ってやっぱりいいですねえ」

「はい、何か癒されます」

同じく窓際の座椅子に座っている山田先生も心地よさそうに風を浴びている。

「あ、そうだ山田先生」

「はい？」

「肩揉みましょうか？」

「ふえ！？」

いや、そんなに驚く事……？

「きゅ、急にどうしたんですか？」

「いえ、普段いろいろお世話になってますし」

実際、射撃兵装の扱いのコツとか色々教えてもらったし……。

「恩返し、と言うことで」

「あ、う……で、ではお願いします」

「はい」

山田先生の言葉に頷いて、僕は山田先生の背中に回った。さ、肩揉みの始まりだ。

「~~~~~」

風呂を上がって暫く休憩した後、シャルロットは上機嫌で廊下を歩いていた。

（真琴の部屋）

山田先生も恐らく居るのだろうが、今のシャルロットにとっては些事であった。

上機嫌な表情はそのまま、廊下を曲がると――。

『先生、こういうのは初めてですか？』

『そ、そう……ですね、んっ……』

『ん……ここ……ですか？』

『ふあっ！そ、そこはあ……！』

『そこは？んっ』

『よ、よわいんですう……』

『山田先生の弱点みつけ、ですね』

『はあああっ……』

……。

「こ、これ、は……一体……」

表情は笑顔だがしかし目は一切笑っていないシャルロット。
その問いに里乃とラウラは沈黙で返した。

「……………」

「……………」

二人とも暗く沈んだ表情をしている。
箒達の方を見るとどうやら似たような状況らしい。

『……まあこんな感じでしょう、楽になりましたか？』

『はああ……すごかったです香我美君の……』

ゴクリ、と誰かの喉から音が鳴る。

事と次第によつては突入、確保、尋問の3ステップを踏むことになる。

『……………肩揉み』

「「「つて、肩揉みかいつ！」「」」

思わぬ台詞に三人は盛大な突っ込みと共に部屋に突撃してしまった。

「「へ？」「」

「「「あ」「」」

そして気付く。

これじゃ盗み聞きしてたのバレバレじゃないか、と。

「———という事さ」

「え、私そんな声出してました？」

あれから逃走を計った三人だけど、僕が呼び止め、部屋に招き入れて、事の顛末を話して今に至る。

「それは、もう。『そこつ、弱いんですう！』とか色々」

「あうう……」

「ラウラ、無駄にクオリティ高いね……」

ホント、里乃の影響受けてるなあ……。

「こ、こほん。兎に角、盗み聞きは感心しません。今後はやらないで下さいね」

「いや、先生がそれっぽい声をだすから……」

「里乃、余計な事は言わない方がいい」

「「はあ……」」

里乃とラウラの明け透けなやり取りにシャルと僕は思わず溜め息が漏れた。

「まあ、この件はこれにて手打ちって事で。山田先生もいいですよね？」

「は、はいっ」

「」「むう……」「」

僕が山田先生に笑いかけると山田先生は顔を赤くしてシャル達は何故かふくれてしまった。

「？ まあいつか。とりあえず皆何か飲む？ 買ってくるけど」

「あ、じゃあ僕も……」

「シャルは待ってて、流石に誘っておいてそこまでさせちゃ失礼だし、リクエストがあるなら聞くよ？」

「あ、じゃあ私コーラで」

「……コーヒー」

「あ、あの、私もですか？」

「もちろん」

僕が山田先生に返すと少しおずおずとした様子で、

「じ、じゃあ……緑茶を……」

そう言って百二十円を渡してきた。

「奢り、とはいきませんから……」

「はい。わかりました。それじゃ、ちょっと行ってきます」

そう言い残して僕は部屋を出て自販機へと向かった。

真琴が部屋を出て行って、少しの沈黙の後、一斉に息をついた。

「気が回りますよね、香我美君」

「回り過ぎってくらいにはね……」

「上手くフォローしてくれるし」

「褒めろというと褒めてくれるしな」

「いや、それは何か違う」「

「……それで」

少しの間を置いて真耶は口を開く。

「皆さんは香我美君の事、どう思ってます？誤魔化し無しでぶつちやけた。」

「……！」「」

その言葉に三人は息を呑む。

果たして、本当に答えて良いものか……。

そう考えたが、真耶の（珍しく）真面目な表情に圧されてそれぞれ口を開いた。

「……好きです（だ、だよ）」「」

その言葉を聞いた真耶はにっこりと微笑んで、

「頑張ってください」

と、そう言った。

その後、真琴が缶を抱えて帰ってきた時には女性四人がクスクス笑っているという光景があった。

第四十一話：マッサージと談笑（後書き）

次回、第四十二話：武装と再び天才

第四十二話：武装と天才再び（前書き）

気付いたらユニーク数二十万越え！

これも一重に皆様のお陰です！

ありがとうございます！

これからも本作をよろしく願います！

第四十二話：武装と天才再び

合宿二日目。今日は午前中から夜まで丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りに終われる。特に僕ら専用機持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。

専用機持ちは他の生徒と離れた……と言うか隔離された、四方を切り立った崖に囲まれた場所に集まっていた。

「漸く全員集まったか。——おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬さんに呼ばれて身をすくませたのは、意外にもラウラだった。朝起こしたはずなんだけどなあ……。

今は千冬さんに罰としてISのコア・ネットワークについて説明させられてる。

「——以上です」

「流石に優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われて、ふうと息を吐くラウラ。心なしか胸をなで下ろしているようにも見える。

……まあ、ドイツ教官時代に恐ろしさを嫌という程味わったんだろう。

「さて、お前ら専用機持ちは専用パーツのテストだ。迅速に行え」

はい、と返事を返すとそれぞれ散らばって装備の確認を始めた。ここに搬入されたISと新型装備のテストが今回の合宿の目的。当然、ISの稼働も含めて行うので、全員がISスーツ着用姿。場所が場所なので水着に見える。

「そう言えば僕らはどうすればいいんだろうね？一夏」

「だよなあ、お互いISに新しい武装入れる容量なんて無いし……」

正直、なんにもやる事が無いのが現状。
と言っても何もやらないっていうのも居心地が悪い。

「……とりあえず、武装の再確認とかやっとくか」

「……だね」

ので二人して武装の確認を始めた時、ふと気になった事を聞いた。

「そう言えば、一夏」

「ん？」

「なんで箒さんがここに？」

「それは俺も思ってた」

箒さんは専用機を持っていない。だからここにいる理由はないはず
なんだけど……。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

千冬さんに呼ばれた篤さんがそちらに向かう。

「お前には今日から専用——」

「ちーちゃ~~~~~ん!!!」

ずどどど……!と砂煙を上げながら人影が走ってくる。
ありえないくらい速い。たぶんESに似た何かをつけているからだ
ろうけど、問題はその人影が——

「……束」

昨日、謎の初対面をした稀代の天才・篠ノ之束博士だということ。

「やあやあ!会いたかったよ、ちーちゃん!さあ、ハグハグ!愛を
確め——ぶへっ」

飛びかかってきた篠ノ之博士を片手で掴んで持ち上げる。

しかも顔面。思いつきり指が食い込んで……。

手加減ないな、千冬さん。

「束。このままシャ。ニングフィンガーか崖に頭を突っ込むか、選
べ」

「謝って許すという選択肢は……」

「無い」

「ですよね……つてのおおお……!」

うわぁ……なんかみしみし鳴ってるよ……。

二、三秒の抵抗の後篠ノ之博士は「よう」と軽い調子で着地した。そして何気ない顔で篝さんの方を向く。

「やあ!」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年振りかなあ。おつきくなつたね。篝ちゃん。特におっ——」

ガスン!

「殴りますよ」

「な、殴ってから言っただ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた! ひどい! 篝ちゃん酷い!」

頭を押さえながら涙目になって訴える篠ノ之博士。というか篝さん、日本刀何処にしまったの?

「え、えっと、この合宿では関係者以外——」

「山田先生、ISで一番の関係者じゃないですか?」

「えっ、あつ、はいつ。そ、そうですね……」

僕の言葉に山田先生が沈んでしまふ。すいません、先生。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒が困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。はい
終わり」

そう言ってくるりと回って見せる。ポカンとしていたセシリアさんらがにわかに声を上げる。

「はぁ……。もう少しともに出来んのかお前は。そらお前達、手が止まってるぞ。この事は無視してテストを続ける」

「これってひどいなあ、らぶりい束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

「らぶりい束さ〜ん」

「……香我美」

いや、言ったほうがいいかなあ、と。

「お、ノリが良いねえ〜。流石、栄ちゃんの息子さん」

「え、義父さんと知り合いなんですか!？」

そんなの初耳だ。

「知り合いも知り合い、私とちーちゃんと友達だもんね」

「え、ええ！？」

まさかの暴露に思わず声を上げてしまう。
「どんだけ顔広いんだ、義父さん……」。

第四十二話：武装と天才再び（後書き）

次回、第四十三話：紅と凶兆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0270w/>

インフィニットストラトス～天上駆ける蒼き刃～

2012年1月13日12時46分発行